

はし が き

この頃「出合い」という言葉がはやる。普通は人と人との間のことをいう。しかし、私にとつては啓明学園という小さな学校に勤めることになり、そこで九人の海外から帰国した子供たちに会ったことが、私の生涯を通しての学習と研究の日々につながったのである。

まさに「出合い」であった。昭和一五（一九四〇）年五月のことである。

私は、内定していた出版社を断り、東京女子大学の学長故安井てつ先生のお言葉に従って啓明学園を訪ねてから三日後、もう子供たちの前に立っていた。全校生徒は九名。私は一三人目の先生であった。まさか、それから後四五年間にわたる日々の出発の日であったとは知るよしもなかった。

日本がいまだ経験したことのない敗戦、占領下での混乱を始め、この学園生活の周りには政治、経済、教育など、いろいろな面で嵐が吹き荒れた。そのなかで私は、さまざまな困難にぶつかりながらも、少人数制クラスの個別指導による授業という教育を思いのままに展開できた幸福を思うのである。大波にのまれ沈むかと思うが沈

まず、一枚の木の葉のように大風に吹き飛ばされるかと思うが飛ばされずに守られてきたことは、まさに神の摂理にほかならない。受験、受験、受験の世界にあつて、一人の大切な人間に目をとめ、その人間のもつ可能性を育てようとする教育を、神はよしとみて、守りぬいてくださったもの、私は思う。

今、私はここを去り、峠を反対側におりようとしている。その時、もう一度自分の後にできている道を振り返る。そこには帰国子女教育を出発点とした少人数制のクラス編成、個別指導、そして個人の特徴を伸ばしながら育てる教育を言葉でいうのではなく実践し続けてきた啓明学園の四五年間の道が続いていた。

帰国子女教育の始まり

昭和一五年

啓明学園の誕生

旧制七年制高校である「成蹊高等学校」の校長である浅野孝之先生は、海外を視察の途中で、多くの海外勤務者が帰国後の子弟の教育に多大の悩みをもっていることを知った。帰国後、昭和九（一九三四）年に、これらの子弟を受け入れて教育する機関の設立を願

奔走した。しかし、公立や官立（国立）では、四月に何人の児童・生徒が入るかはつきりしなければ設立することはできない。一人また一人と年間を通してぼつりぼつりというのではどうにもできない。野先生は、これは私立学校がやるよりほかはないと決心し、成蹊の理事会に対し海外勤務者の子弟教育のため、特別の機関開設を働きかけた。

昭和一〇年、浅野校長の熱意により、同高校内に海外勤務者の子弟を受け入れる操業学級が発足した。そして、成蹊高等学校から東京帝国大学文学部教育学科に学び、さらに同大学大学院で研究をした菅野尚明先生が、浅野校長に招かれ、その教育に当たることになった。

操業学級で、帰国した子供たちの教育を開始するに当たり、参考になるものを探したが、前例はもろろのこと参考になるものも見当たらない。この教育は全く新しい分野のものであり自分で開拓するしかなかったのであった。

最初は一人の生徒。その後、一人二人とほつりほつりと入ってくる生徒。しかも、その一人ひとり、微妙な違いをもっている。菅野先生は、これに対処するには、ウ

オツシユバンのブネトカプランによる個別指導以外に方法はないと確信し、その指導方針をたてた。

つまり、学習は児童・生徒一人ひとりの特徴に従い進められる。そして、ある範囲を十分に学習したと自分で思った時にテストを受ける。テストの結果十分に復習したと認められた時に、次の課題に進む。そうして進んだところをまた総括してテストを受け、十分な成績と認められた時に、さらに先へ進むという方法である。

こうして始まった操業学級は、やがて人数も増え、二三名を数えるようになった。

昭和一二年、浅野校長が成蹊高校を去られた。その頃から周りの状況が徐々に変化を始めた。

七年制高等学校としての成蹊のなかで学力の占めるウエートが大きくなってきた。そういう空気のなかで、操業学級の存続もあやしくなる心配が出てきた。そこで、菅野先生はこれとはなんとか海外勤務者の子弟の教育を専門に行う学校をつくるよりほかはないと考え、さまざまに思いをめぐらしたのである。

その当時、海外から帰った子供の教育の必要性を一番身にしみて感じていたのは外務省であった。外交官の父親と長く海外

で生活した娘さんが、日本語が十分でなかったばかりに、アメリカンスクールに入らなければならなかったということもあった。しかし、教育のことは文部省の手にあるので、外務省はどうすることもできない。文部省に出かけ、これがいかに大切な教育か、特に、日本の将来のために必要であるかを説いても、「ほう、そんなこともあるのですか」と聞き流す程度で、

全く話にならない。昭和も一三年がたち、日本は世界の一等国だと称して、多くの勤務者が海外に出ていったが、その子弟が帰国した時の教育に関する認識は、この程度の時代であった。

菅野先生は役所を相手にしていても、らちはあかないとあきらめ、当時、操業学級に在籍していた子供の保護者に働きかけ、なんとか学校設立ができないかと心を砕いた。そうしているうちに、成蹊の理事会は、昭和一四年度限りで操業学級を閉じることを決定したのである。

ここに至れり。そこで当時、操業学級の保護者の一人であり、この問題の深い理解者でもあった三井高維氏が、このための専門の学校を設立する決心をされたのである。昭和一四年の秋のことであった。

操要学級の閉鎖は昭和一五年三月三十一日である。半年の間に、当時姫路高等学校の校長となつておられた浅野先生の助言をいただきあらゆる必要な書類を整えられ、学校設立の申請が出された。学校設立の認可がおりたのは、実に昭和一五年三月も半ばであった。学校設立の認可の出た次の日、二月一五日の朝、赤坂台町の三井邸には、当時の五大新聞社の自動車すべてが集まった。

当時は、新聞社の旗をひらめかして車が走るということは大事件であった。しかも、五大新聞社が取材に来るなどということはよほどの大事件である。取材をされたほうも大変びっくりしたという。そして、次の日には五つの新聞に大きく記事が出たのである。認可された最初の学校は「啓明学園小学校」であったから、その設立者が三井財閥の本家の次男であり、



創業者 三井高維夫妻

園長・小学校長は元立教大学総長で、ハワイ大学東洋史教授の経歴をもつ人である。そして、入学の資格は海外勤務者帰国子女という今まで聞いたこともない子供とあつては五大新聞の車が社旗をひるがえして押し寄せたのももつともであつたかもしれない。

こうして昭和一五年四月八日、東京府東京市赤坂区台町二番地（現在は港区赤坂台町二番地）の三井高維邸において入学式が行われた。海外勤務者帰国子女教育を専門とする学校「啓明学園」が誕生したのである。

帰国子女教育とは

ある時、私は菅野先生にこんな質問をしたことがある。

「先生が浅野先生からのお招きで帰国子女の教育に当たろうと決心された理由はなんだったのですか」「僕は学校を出たら教育に携わることを考えていた。ただ普通の学校教育には、あまり興味がなかった。特殊教育をやってみたいとの気持ちがあった。それで先輩のなかにそういう教育をしている人もあつたので、その現場へも何回か行ってみたいし、いろいろ話も聞いたけれども、どうももう一つピンとくるものがないのね。確かに、一人ひとりの子供にとつ

ては大切なことであり、子供一人ひとりを大切に育てるといふ教育の大きな部分であることに間違いはない。

しかし、教育をして後にその子供がどれだけ社会に働きかける仕事ができるかというところ、きわめて消極的に思われてねえ。もつともつと社会に向かつて将来大きく働きかけ、社会的に広がりのあるものはないかなあと思つて決心しかねている時、浅野先生からのお話が出てきた。さつそくお目にかかつてお話をしている間に、これだと思つたわけ。海外から帰ってきた子供は、言語的文化的特殊児童生徒だ。日本語と日本文化については、確かにマイナスの部分がある。しかし、複数の言語と複数の文化の体験者だと思つた。だから、この子供を教育するのは確かに特殊学級での特殊教育となる。しかし、この教育はその子供一人のためだけにとどまらず、将来社会に大きく伸びる人材を育てるものだと確信し、この教育だ、と決心がついた」

昭和一〇年から六〇年までの五〇年間、半世紀にわたる菅野先生の前人未踏の教育分野といつてもよい帰国子女教育は、このような考えを根底に行われたものであつた。

日本にいなかったために、身につけ得なかつたものを身につけさせ、複数の言語と文化を身につけることにより得たメリットを一人ひとりに従つてよく見て伸ばす。そして、将来は大きく社会に働きかける人材を育てる教育、これが帰国子女教育というものである。

進学を目的とする受験体制に組み込むことを目指して日本的な教育にのみ汲々とするのは決して帰国子女教育の本道ではない。単なる便宜的なものでもなく、飯の宿的なものでもなく、ましてお金の毒ですからなどというセンチメンタルなものでもない。本物の帰国子女教育が、「啓明学園」では昭和一五年から六一年三月（筆者がかかわつていたので、この時までであつたので、このように表現した）まで確実に行われていたのである。

自分のレコードとの競争

学習の形は完全な個別指導制である。家庭教師と子供のような一人対一人の個人指導ではない。もちろん、時間割の都合で一人の教師と二人の子供になる時もある。しかし、普通は一人の教師が同一時間内に数人の子供と対し、その一人ひとりの子供の条件にあつた授業を展開する。それが個別指導

である。子供は自分のペースで学習ができる。理解力は普通だが、ゆつくりと確実に身につけてゆく子供。頭の回転が早く、従つて進度も早いがいささかおつちよこちよいで不確実な子供。そういう違いに合わせ、その子供の長所はどんどん伸ばし、短所は改善するよう教材などを準備する。テストに關しても何種類も作り、基本的なもの、平均的なもの、やや高度なもの、高度なもの、非常に高度なもの、と用意をし、その子供の状況に応じ、これらをやらせてゆく。

子供にはあらかじめ各教科の学習の手順が連絡してある。従つて、子供はその手順に従つて学習を進める。その間で、分からないことは質問し、また自分か十分学習できたと思つた時にテストを受ける。従つて、子供は常に学習を怠りなくやっていると順調な進み方ができない。

子供たちは時間いっぱいそれぞれ

成績は「進度表」で

「先生！ 読めませう。聞いてください」

「先生！ 書き取りやってきました。テストしてください」

「先生！ お話できませう」

図表-1 進度表

項目		読方	書取	お話	意味	短文	
月日	月日						
(月)	月日						なまえ
(火)	月日						
(水)	月日						
(木)	月日						
(金)	月日						
(土)	月日						

算術(算数)

項目			
月日	月日		
(月)	月日		なまえ
(火)	月日		
(水)	月日		
(木)	月日		
(金)	月日		
(土)	月日		

教室に入るといろいろな声がして、どよどよと子供たちが教卓を囲む。みんな少しでも早く見てもらいたくて先を争って出てくる。書き取りをするもの、音読を聞いてもらうもの、お話をするもの、さまざまである。そのなかで、だまって短文や次の課の練習をするもの、まさに十人十色の学習風景である。

さて、こういう授業を行うのに大切なものがある。

「進度表」である。一人ひとりのその時間の学習状況を細かく記入しておくもので、これを一週間分まとめて一枚の紙にまとめてある。

それを見ると、その子供がその一週間にある教科で、どれだけを学習し、どんな成績をとったかが一目で分かる(点数も書き込んである)。しかも、教材の難易により、また本人の学習意欲の波により、いろいろな変化をみせる。また、本人がその学期にどれだけ進歩をしたかという進捗も、一学期間の「進度表」を通して見ることによる、はっきりと分かる。もちろん本人にも分かる。

ことに、小学校の高学年以上は自分で書き込んでゆくのだから……(進度表。図表-1)。

授業は個別指導であり、日本語

の語学力の関係で必ずしも年齢相
当学年の教科書は学習できない。
従って、日本の学校で行っている
評価の仕方は通用しない。そこで、
成績表もその形態を考えねばなら
なく、いろいろの面からの研究を
重ねて、一つの様式ができて上
がった。

菅野先生は苦心して考え出した
成績表を持って監督官庁へ出かけ、
熱心に説明をして回った。

類例をみないものではあるが、個
別指導の授業法の説明を聞けば、
まことにものごとでもである。

当局
も研
究を
して
みる
が、
当面
はそ
れで
やっ
てお
くよ
う、
正式
には
追っ
て通
知を
する
とい
うこ
とに
なっ
た

図表-2 成績表

	評定	進度	学態度	程度	生活の記録
国語					
算術					
歴史					
地理					
理科					
音楽					出欠の記録
図画					
体操					
裁縫					校長氏名 印
外国語					担当氏名 印
					保護者 印

1 赤坂校舎が戦災で資料焼失したため、教科名、配列順など細部は記憶によるので原形通りではない点もある。
2 外国語の(一)には英、仏、独など、児童・生徒の履習したものが入る。
3 この成績表は複写によって記入された。

菅野先生は苦心して考え出した成績表を持って監督官庁へ出かけ、熱心に説明をして回った。類例をみないものではあるが、個別指導の授業法の説明を聞けば、まことにものごとでもである。

当局も研究をしてみるが、当面はそれでやっておくよう、正式には追って通知をするということになった

その後、昭和一六年に戦争に突入し、ついに“追って通知”は来なかった。その成績表とは次のようなものであった。

評定 甲、乙、丙。一六年から優、良、可。

学習態度 優、良、可、不可。その教科に対して積極性をもって学習するか、教室で自分のやることをきちんとできるかよく調べて、質問が多く出るかどうかがみられる。質問の多いことは重要な評価の対象になった。

進度 一人の子供がその学

度をみせたかということである。他人との比較でもなければ、教科書の進度でもない。本人がどの位理解し身につけて進んだかの度合いを示すものである。記述は、速、適、緩、停、退。

程度 日本の教科書を使っている教科については、二、三、五年上、さらに、三年上終了、五年上に入る、などの表現をもって記入した。

この成績表の記入例と、その見方についての解説は図表-2、3に記してある。

KEIMEI GAKUEN	WEEKLY GOAL CARD FOR ENGLISH							Teacher's Remarks
	Mon.	Tues.	Wed.	Thurs.	Fri.	Sat.	Week's Report	
READING								Parent's Remarks
GRAMMAR								
COMPOSITION								
DICTIONARY								
CONVERSATION								
TRANSLATION								

期の間に、その教科でどの位の進
ベランダ教室でのカルチャーショ

図表一3 成績表記入例とその見方（教科は国語を例にとる）

(A)	評定	進度	学習態度	程 度
国語	甲	速	優	3 年 上

例（年齢相当学年小5年）

(B)	評定	進度	学習態度	程 度
国語	甲	適	良	4 年 下

例（年齢相当学年小6年）

(C)	評定	進度	学習態度	程 度
国語	甲	適	優	4 年 下

例（年齢相当学年中1年）

(D)	評定	進度	学習態度	程 度
国語	乙	適	優	3 年 下

例（年齢相当学年小5年）

(E)	評定	進度	学習態度	程 度
国語	乙	緩	良	4 年 上

例（年齢相当学年小6年）

(A) 現在学習しているのは三年上の教科書、理解力もよく学習態度もよく、これからかなり進度が速いと想像される。もともともよいタイプであろう。

(B) この子供は学習態度が優と評価されるようになれば、もう少し進度が上がるものと思われる。

(C) 自分の力を十分発揮していることが分かる。そう早くはないが着実に力をつけてゆくものと予想される。

(D) 理解力はややゆっくりにあるが、まじめに自分の力を十分出していることが分かる。ゆっくりに着実に理解力は、とくにわるい方ではないが、どちらかというところ、やや遅れ型であることが分かる。学習態度をもっとよくすれば全体によくなる。

(E) 理解力は、まじめに自分の力を十分出していることが分かる。ゆっくりに着実に理解力は、とくにわるい方ではないが、どちらかというところ、やや遅れ型であることが分かる。学習態度をもっとよくすれば全体によくなる。

ック三井高維夫妻の邸の階下が全部学校の校舎になった。広い大きなガラス窓のあるベランダが教室である。細長い教室である。教室のすぐ下は花壇、その先に高麗芝の庭があり、周りは椎の大木が茂り、その根元にはヤツデなどの灌木が葉を広げていた。

ベランダの教室は冬には目をいっばいに受けて暖かく、夏はガラステルを開ければ木立のなかを涼しい風が吹きぬけていった。外国生活をしてきた子供たちにとっては、

日本の夏はむしろ暑かったが、このベランダの教室は当時としては快適なほうだった。

私が、「啓明学園」で教師として授業を開始したのは開校後一カ月の最初の日、菅野初等学校主事がベランダの教室でみんなに紹介した。とたんに生徒から声があがった。「ワァー、先生はユダだ！ 一三人目だ！」

祖父の代からのクリスチャンの家庭に育った私には、大変なショックの連続であったのだ。

座に一三人目「ユダ」ということがぼんと出てくるころに、キリスト教文化の社会のなかで生活してきた子供なんだなあ、とも感心したのだ。これは私かこの学校へきて受けた最初のカルチャーショックであった。しかし、こんなことで驚いてはいられなかった。これから後こそがカルチャーショックの連続であったのだ。

哉先生と一緒に授業に出ながら実

習生の生活である。今まで私も経験したことはないし、見たこともない授業の様子に、一生懸命ついていこうと夢中であつた。そのうちに人数が増えてきたのでベランダを二つに区切り、私は八歳から一歳位までの子供たちの学習を見るようになった。国語の時間にもってゆくものは国語の教科書と英和辞典。教科書も一冊ではない。生徒が学習に使っているもの全部である。短文や作文の時には、日本語が分からず英語で聞いてくる。

そのために英和辞典があるのである。しかし、これはそう長い間ではなかった。

子供たちが、口々に、「誠ちゃん、自分でとれよ」「ここはインドじゃないから」「先生に失礼よ」というのだが、それでも「誠ちゃん」はボカンとしている。やがて、やっと自分でころがつている鉛筆を拾った。

つまり、「誠ちゃん」が小さい頃から生活したインドでは、外交官の息子が落としたものを自分で拾ったということになれば、それこそお父さんの名誉にもかかわるほど大変なことなのである。そんな生活が身にしみている「誠ちゃん」には、その時みんなのいうことが、きつとまだよくのみ込めなかった4

インドのボンベイから帰ってきた愉快な男の子が入ってきた。西郷隆盛のような体型でちつともじつとしていないで先輩たちにちよつかいを出す。しかし、憎めない彼は「誠ちゃん」、「誠ちゃん」といわれて学校中の人気者であった。その「誠ちゃん」が初めての授業の時、自分の机の上から鉛筆を落とした。ちようど、すぐそばで他の子供の書き取りを見ていた私に「それとってよ！」といった。とつさのことで私は何のことか分からなかった。すると、周りのうわげであった。すると、周りの

昭和一六年一月三日永遠の眠りについたのであった。

校医の中鉢不二郎先生が、「日本で育ったお父さんなら脳炎にまでな

るということは考えられない位の風邪なんです、やはりボンベイ育ちの誠ちゃんには日本の冬は厳しかったのですね」といわれた言葉が、今でも私には忘れられない。「誠ちゃん」は、私にいろいろなカルチャーショックを投げかけて、目の前を超スピードで通り過ぎていった。

もう一つ、こんなこともあった。「先生！ またアキ子が怒って学校を出て行きました！」

子供たちが飛んで来た。「またか」と思っ表のほうに回ってみると、なるほど、大声をあげて泣きながら女の子が門からかけ出すところであった。校内履きのまま私は後を追った。高橋是清郎の前を通り、青山二丁目のほうへ向かって走る。

どうにか三二教会の横で追いついた。それから学校まで、いろいろなことを聞いたり話したりしながらゆつくりと二人で歩いた。すっかり落ち着いて、学校に帰れば、「アキ子ちゃん」はなんでもなかったように、ちゃんと一日の授業を終わる。

「アキ子ちゃん」は頭もいいし、よく勉強もする子供だ。しかし、勝負な性格でちよつとからかわれるとすぐに本気で反発する。そこ

ということになり、からかいの理由になる。そのため、からかいが過ぎると「アキ子ちゃん」を本当に怒らせ、家に帰るといつて学校を飛び出させるということになる。おかげで初めの頃、一学期間にどれ 位あの青山二丁目までの道を走ったことか……。

当時 赤坂郵便局の手前の所に、赤坂憲兵隊があった。

戦前戦中の時代には憲兵というのは大変怖い存在という印象があった。その入り口には、いつも二人の衛兵が銃を持って硬い顔をして立っていた。その前を可愛らしい女の子が泣き顔で走り、その後を若い女性が追っかける。

そして、しばらくすると手をつないで帰ってくるという活劇が繰り返されたのだ。そんなある日のこと、帰りにその前を「アキ子ちゃん」と帰ってくる、憲兵隊の衛兵がにこにこ笑っていた。憲兵も笑うことがあるのかと思うと、もに私は急に恥ずかしくなった。きつと衛兵に立つ人の間では、評判になつていたのかも知れない。

話が変わるが、この頃、朝礼ではいつも庭に並んで国旗を掲揚し、その後は正直・純潔・無私・敬愛というMRA運動の標語を唱えたものだ。MRAというのは絶対正直、絶対純潔、絶対愛である。聖

書のマタイの福音書にある、通常「山上の垂訓」といわれているところの要約であるという。

三井先生がオックスフォードにおられた時に、オックスフォードムーブメントといわれる運動に共鳴されたのである。

毎朝これを二回繰り返し、その実践をその日の行動のなかに表すようにとの心を日々新しくしたのであった。

ソフトボールや昼食のこと

四月から六月の末までに、ぼつりぼつりと生徒の人数は増え、一〇人を超してしまった。とはいっても、まだソフトボールの試合をするための二チームはできない。

そんなことで、この頃は何をやるにも先生チームが相手になる。先生のほうもそう大勢いるわけではないから、講師の先生も交えてやつとチームを編成するという具合であった。

いろいろなゲームが行われたが、みんなが一番好きだったものに「啓明ボール」があった。これは当時インドアベースボールといわれたものの変形である。

今のソフトボールよりも、もっと大きな軟らかいボールを細いバットで打つもので、従って飛ぶわけ

はない。だから三井邸の庭でも十分にできるのだ。先生チームのなかでも庄巻は投手をした習字の先生だった。

書道界の大家である上篠信山先生の若き日の姿である。学生時代に投手をしてもらったので、大きなソフトのボールでもなかなかの威力があり、生徒たちは苦戦を強いられた。先生チームの投手は何人かいて、替わることができたが、捕手は私一人であった。学生時代から走ること、バスケット、ホッケーなどいろいろなことをやって

いたが、ソフトボールでも、ショートかキャッチャーのポジションであった。「啓明ボール」ではもっぱらキャッチャーである。

毎日毎日、放課後は雨さえなければ明るい歓声があがっていた。ところが、私は六月の終わり頃、アウトカウントを一つ増やそうとキャッチャーの右にあがったフィールドフライを追いかけたところ、

湿った苔の生えた所で滑り、みごと左足首の少し上を骨折してしまつた。おかげで夏休みの人ヶ岳のキャンプにも行かれず、暑い夏の間ギブスをはめての生活を余儀なくされた。

また、子供たちにとつても先生にとつても待ちどおしいのがお昼である。

「今日は何かな」

「君のお母さん当番でしょう」

「教えてくれないの」

ある朝のひと時の子供の会話である。少し年の大きい生徒はそばでにこにこ聞いている。

お母さんが交替で、みんなのためにお昼の食事をつくってくれるのだ。なんとかして、温かく少しでもおいしい食事を食べさせた。いと温かい気持ちから出た昼食づくりであった。昼の時間が近づくと、台所方面からなんとなくいい匂いがただよってくる。

「先生、読みの練習をします」

国語の音読の練習は教室の外へ出てする約束になっていた。しばらくして教室に戻ってきたどの顔もなんとなく筋肉がゆるんでいる。きつと、読みに出たついでに台所の偵察にいつてきたに違いない。小さい生徒も大きい生徒もみんなが昼食を楽しみしながら午前中の学習に励んでいた。

お昼がくると、先生と生徒とお母さん方とで囲む食卓の楽しさは、学校の雰囲気というより、少し兄弟の多い家族のようなものだった。昭和一四年頃から、そろそろ食糧品も配給になるものが出てきていた。材料もそんなに豊富とはいえない。種類も限られるし、まして量は一度にそう多くは手に入ら

ない時代である。しかし、さすがに海外で生活され、パーティーなどの経験を豊かにつまれたお母さん方は、少ない素材を上手に生かし、いつも楽しく豊かな気持ちの伝わる昼食を整えてくださった。当番は頻繁にめぐって来たから、その苦勞は大変なものだったと思われる。

戦争がさらに迫って市民生活の種々な物質に圧迫が増し、そのうえ、海外から家族がどんどん帰国してくる頃になった。毎日が、隔日に、週一回にと変化しても、ぎりぎりまでこの心のこもった昼食は続いたのだった。

JOAKKの海外放送に出る

この年の九月に、「JOAKK(NHK)の海外放送に出ることになった。外国語で海外に向けて放送するのである。まだその頃は、日比谷公園のすぐそばの内幸町に放送局があった。

新しくきれいな建物だった。入り口を入ってからすぐのホールなどはピカピカで、生徒たちは口々に「滑る滑る、気をつけて」などといったの思い出す。

それぞれが短い挨拶をして、最後は「紀元は二千六百年」を歌って終わった。その後、局中を案内

してもらってから、今自分たちが放送したものの録音を聞かせてもならない頃のことである。

ものが、たちまち再生されるなどということは、そのことに携わっている者はともかくとして、部外者には、大変に驚くべきことである時代であった。みんな耳をすまして回り始めた録音盤を見つめて

いると、聞こえてきた。自分の声が出てくると、顔を見合わせてにこにこしたり、恥ずかしがったりしていたが、決して声を立てることはしなかった。そのうちに、最後の歌となった。その声のなかに、元気のいい子供たちの声に混じって一段と大きな歌声があった。それは、なんと菅野先生のものであった。やがて、学校へ帰った後が大変。

「菅野先生のソロでしたね」
「先生の声が世界中に響きましたね」
などと大評判。しばらくの間は学校でも、そのことで持ち切りで、大いに一同の話の種となったものだった。

最初の運動会

昭和一五年一〇月の半ば、気持ちよく晴れた日だった。「啓明学園

の第一回の運動会が教室の前の運動場で行われた。生徒数二三名と少なかったが、それでもちやんと午前一〇時から午後三時まで行ったのである。

ラジオ体操(戦前のもの)に始まり、個人競走あり、団体競走あり、生徒の出るもの、先生のもの、父兄連合の競走、父親だけのもの、母親だけのものと、まことにバラエティーに富んだものであった。

お母さんたちも運動のできる靴をはいて、スプーンレースやボールゲームに興じる。外交官夫人も商社員の奥様も銀行の支店長夫人も、童心に返っての一日であった。

お父さん方も日頃の堅苦しさを忘れ、相手の頭につけた風船を新聞紙を丸く巻いてつくった棒で、
「お面」の声も鋭く、一つでも多く割ろうとお互いに一生懸命。応援の声も一段とあがり、この日いっぱい、「啓明学園」の庭には、小鳥もよりつけられないほどの賑やかさであった。

展覧会とクリスマス

一月三日の明治節(今の文化の日。昭和二〇年まで、明治天皇の誕生日を記念した祝日)を中心に、作品の展覧会が開かれた。

生徒数は少ないながら、なかなかすばらしい作品がたくさん出品さ

れていた。

図画を指導してくれる先生は、フランスに長く生活をした島村先生。外国育ちの子供たちには、多分感性のびたりと合う先生だったと思う。明るくのびのびとした作品だった。

習字もたくさん出ていた。上條信山先生の指導で、まるでイギリスの国旗のような基本線から、もう立派に「欧陽詢」なみの筆法を身につけて、堂々たる漢字の書かれているものもあった。習字を見ると、帰国して間もない子供と、すでに二学期の学習生活を続けてきた子供の違いがよく見分けられた。一二月の二〇日過ぎにはクリスマスを祝った。学園全体でやったシエークスピアの『十二夜』物語はすばらしかった。特に、この劇でトニー君の演技力は保護者を含め全校中をうならせた。

ことあるごとに、以後は演劇で楽しませてもらった。人数は少ないのに、とにかく役者が多かった。クリスマス劇の写真には在りし日の「誠ちゃん」がはつきり写っているのも感慨ひとしおである。

財団法人啓明学園

この年の四月から公立小学校が「国民学校」と改称されるに伴って、啓明学園小学校は初等部と改称され、中学部(旧制の中学校、男子のみ)、高等女学部(旧制、男子の中学校に対して女子の学校を高等女学校といった)の設置が認可された。そしてその後は、財団法人啓明学園(戦後、学校法人と定められるまでは、私立学校は、財団法人であった)の経営するところとなった。

初代理事長は伯爵樺山愛輔氏であった。樺山伯は少年時代から長く米国に生活し、当時としては数少ない本当の意味の国際的視野をもった人物であった。この人物が、規模からいえば小さな小さな学校の理事長を快諾されたのも、欧米の教育を熟知しておられたからであろう。そしてまた、三井高維先生も啓明学園の教育は、こうした人物によって率えられることを熱望されたに違いない。

当時、日本の権力ある指導者たちの唱えた。「八紘一宇」とは違ったニュアンスの、全世界に出かけていって人々のための働き人となり、日本の社会のみならず世界

戦争前夜から戦争へ

戦争前夜から戦争へ

に通用する人間を育てる教育の場
としたい。それが啓明学園の教育
の目的であった。

財団法人啓明学園になり、創立
記念日も決まった。四月二日。
設立者三井高維の誕生日である。
生徒数は三〇名になっていた。

制服、帽草、バッジ、校旗

海外で生活した子供たちは全員
が私立学校で学んでいた。当時、
欧米では私立学校に学ぶのが普通
であった。従って多くの子供たち
は制服の生活の経験があった。

小学校が初等部となり、中学部
高等女学部もできると、制服をつ
くりたい、校旗もほしい、バッジ
もつくりたい、とみんなが願うよう
になった。制服は中学部、高等女
学部の連中があれこれ意見を出し
て、島村喜夜生先生（島村先生は
絵の島村先生の夫人で、夫とも
にフランスで学ばれた。啓明学園
では、いわゆる裁縫の時間を受け
もたれた。当時、日本橋三越本店
の高級婦人服のデザイナーとして
活躍されていた）がスタイル画な
ども描いて、結局、男子は成蹊高
校（旧制）に似た型となり、帽子
は当時の海軍兵学校のように、上
がきちんとしたものになった。
女子のほうもなかなか決まらず、
結局は三井先生のお嬢さんが在学

していたイギリスの学校のものを
そのままいただくことになった。
しかし、当時特別の制服をつくる
のは容易なことではなかった。昔
野尚明先生が成蹊におられた関係
もあり、三井先生の息子さんも操
要学級におられたので、成蹊の制
服を以前から引き受けていた「大
国屋」さんが扱ってくれることにな
った。

しかし、男子の服はともかく、女
子のほうはスカートがグレーであ
る。当時は女学生の制服は、まず
紺色が普通である。洋服の生地な
ど入手がしにくくなっている時代
のこと、なかなか大変だった。
しかし、そんな過程をへてでき上
がった制服に身をつつみ、胸を張
って新聞社の見学に出かけたこと
はよく覚えていいる。

帽草やバッジも大騒ぎであった。
いろいろの人が自分のいいと思う
イラストを描いて、その意味を説
明する。絵の島村先生が非常にス
マートな感じのものをたくさん描
いてくださった。

そのなかのどれがよいかをみんな
で投票するのである。帽草のほう
は星を主体にしようということであ
った。バッジの方にも星がつい
ていた。というのも、啓明という
のは、中国の古典では明けの明星
金星のことを指すからである。

ところが、いよいよ業者を呼ん
で発注するという時になって、と
んでもないことが起こった。

まず、問題になったのは星のデザ
インであった。つまり、業者が時
代を配慮し、星にこだわるならお
引き受けできませんというのであ
る。一般の人の間では星をさけて
ほしい、陸軍のシンボルとなつて
いるから、帽草も星を目立たない
ようにし、他の物を配すか、ある
いは花が何かに見えるようにすれ
ばよいというのだった。こちらも
いろいろアレンジを試みたが、
全部不合格である。もう仕方がな
いので、一番分かりよくて文句の
こない「啓明」になった。バッジ
も形が外国のもののようにだめ
だというので、鏡のなかに「啓明」
と入ることになった。業者のいう
ことには、「鏡ならどこからも文句
は出ません」とのことであった。

考えてみればおかしなことで、
星は陸軍のものだから怪しからん
というが、鏡は当時、日本国の基
として尊崇されていた伊勢皇太神
宮の御神体を象徴しているものと
された。日本の神社は特定の人を
祀ったところ以外はたいいて鏡だ
それを一般の人が何かに使っても
どこからも文句は出ませんと業者
はいうのだった。

昭和一六年当時、日本はこんなこ
ろが、いよいよ業者を呼んで発注
するという時になって、とんでも
ないことが起こった。

とが何の不思議もなくまかり通
っていたのだった。

待望の校旗。これは有名な実業
家より寄贈されたものだった。
深い紺色と白の線で、正直・純潔・
無私・愛の標語を表している。
校旗にはふさがつき、初等部、中
学部、高等女学部の部旗にはふさ
がなく、棹の先には剣先の形がつ
く。

この校旗や部旗は学校行事だけ
ではなく、いろいろの時に持って
出ることが多くなった。たとえば、
昭和一八年、山本五十六元帥の国
葬の時、また学徒出陣の時には冷
たい雨にぬれて、帰ることの保証
されない若者の旅立ちを見送った。
沿道を写した新聞社の写真に、パ
つと目につく校旗であり、部旗で
あった。

その後、四〇年をへて見るかげ
もなくなったこの旗は、四五年目
になって新しい二代目の校旗に後
を譲った。その交替の際に初代の
旗を、こんなきたないのはおかし
いから棄てるなどという人もあつ
たのだが、赤坂の校舎が焼失した
際にも生き残ったものであった。
この校旗も、その昔は新しく、当
時の先生や生徒たちに大きな歓声
をもって迎えられたのである。こ
の旗は啓明学園の四五五年の歴史と
日本の戦中、戦後四五年の激動の

歴史を見つめてきたことを思う時
何かしみじみと心に響くものがあ
る。戦争中はそのデザインが日本
ばなれをしているとの理由で、ア
メリカ野郎などと悪口をあびせか
けられたこともあった旗だ。確か
に新しい校旗への代替りはよいこ
とだ。しかし、みすぼらしく汚
汚くて、貧乏くさいから棄ててし
まおうという気持ちではなく、激
動の世にあの空襲の猛火にも焼失
することなく生き延びた校旗には、
静かに隠居してもらい、ご苦労さ
までしたという感謝の気持ちをも
ってほしいと思つたものだった。

戦争の足音が近づくなかで
昭和一六年は無気味な気配がひしひ
しと迫ってくる年であった。啓
明学園も帰国してくる子供でどん
どんと生徒数が増加してきた。一
六年の春には三〇名になっていた
が、それから一人二人と増加を
続けていた。

四月二日の創立記念日には先
生と生徒、そして保護者の方々と
一緒に写真をとった。その写真の
なかに、まだ小学生の頃の、後に
ビートルズのジョン・レノン夫人
となった小野洋子さんの顔もあつ
た。口数の少ないおませな感じの
子供で、いつも何かをじっと見つ
め、考え込んでいるような大きな目
は印象的であった。

海外から勤務者の家族が帰るようになったと同時に、外国人が日本から故国へ帰っていった。

外国人の先生がどんだん日本を離れ、残ったのは日本人と結婚している方々だった。学校の隣のカナダ大使館の一等書記官の奥様とも別れなくてはならなくなった。

外交官の栗栖三郎大使(駐独)のお嬢さんも高等女学校に編入してこられた。また、これは正式に編入されたのではなかったが、東条英機内閣の東郷茂徳外務大臣のお嬢さんがしばらく日本語の勉強にこられた。いつも和服に長身をつつんで、静かな物腰の美しい方であった。窓外には大きな椎の木が枝を広げているので日光がさえざられ、立派な部屋ではあるが、うす暗い感じの職員室のなかで落ち着いた個人教授が続けられた。これはまさに個別指導でなく個人指導であった。

軍靴の音もいよいよ高くなり、われわれの周りからも応召してゆく人々が増えた。物資も次第に窮屈になり、自由に買えるものが減ってきた。

「先生、今日三時から青山一丁目の所の市場でピーナツバターを売るので、お母さんが買ってきなさい」といいました。寄つてもいいですか」などということが増えてき

た。どうみても、まだ外国の雰囲気をかもし出している生徒のこと、何かあつてはと、私も一緒に並んだことが何度かあった。

七月になると、やはり初めから休みになり、昨年と同じ清泉寮での夏のキャンプが始まった。二週間涼しい八ヶ岳山麓で、スポーツをしたり勉強をしたり、れんげツツジの下の道に飛び出した野ウサギを追いかけたり、歌ったりの生活をした。それが終わり、一同の乗った列車が新宿駅にすべり込んだ。するとプラットホームに人待ち顔で事務の先生が見えた。

「清水先生だ！」

「お迎えかな？」

などと思ひ思いにしゃべりながら並んで待っていると、なんとなんと、学事部からの通達により、この非常時に休んではいられない。七月いっぱい学校で平常授業を行うこと、ということであった。

涼しい所から帰ってきたばかりで汗がふき出してくる。この暑さのなかであと二週間と思つたとたん急に疲れが出て、ガックリと座り込みたくなった。生徒たちは「ええー」といって顔を見合わせていた。涼しい所での生活の後、暑い所で生活する時の注意をいろいろと伺つてこの日は解散した。

この清泉寮の生活で、みんなの

心のなかに忘れることのできない強い衝撃を与えたことがあった。まだ清泉寮の生活が始まって三日ほどしかたつていないころ、神林郁哉先生のところに召集令状がきたのである。

翌朝、神林先生は入隊のために東京に出発された。清泉寮ではみんなて歓迎をしてお別れをし、中学生は清里駅までお送りした。そうして、われわれは先生と再び会うことはなかったのである。

八ヶ岳山麓は静かだった。大きなホールと食堂などのある中心の建物は明るく広く、なんにでも使えた。ゲームをしたり卓球に興じたり、時には歌を歌つたりする。

さすがに外国の歌ばかりで英語の歌が多かった。隣には小さい図書室があり、洋書がほとんどだった。静かに過ごしたいものは、自分でもつてきた本も読むことができた。みんなの寝起きするキャビンはまだ新緑の色を残すツツジ、れんげツツジが高く生い茂るなかに屋根だけ見えて、ぼつりぼつりと離れて建つていた。大人も子供もその建物と建物をつなぐ道を行くとききは声はすれども姿はみえずという風であった。

このキャビン生活で子供たちが大変困つたのが、各キャビンのトイレが日本式の、しかも汲み取り

式であることだった。幸いにして共同のホールに付設されているのは、当時の日本ではまことに珍しい水洗であったので、多少遠いという難はあつてもそこまで行くことになった。

何しろ一四日間という長丁場のキャンプでは、まことに重大な問題であった。

私のキャビンでは七人ほどの小学校の低・中学年の子供で家族がつくられていた。このキャビンは午前中のある時間、勉強する間と昼寝の時、そして夜寝る時くらいしか使われなかった。

午後は先生も生徒も一緒に例の「啓明ボール」に興じる。すぐ目の前には、ふり上げば八ヶ岳がそり立ち、八ヶ岳に背を向けて眺めれば広々とひろがる裾野の緑が小さい村を抱え込みながら遙かに続いていた。運動場はこの広大な景観のなかにあり、火山砂で少しポコポコした感じだったが、われわれの運動には十分であった。興じているうちに風が肌寒く感じられるようになる。すると運動はおしまいで、夕食までホールでそれぞれ休んだり手足を洗つたりする。なにもないのに一四日間もよく

退屈しないと思うかもしれないが、自然のなかでは子供は飽きることを知らない。

ツツジの花があればその花が、小さい虫がいればその虫が遊びの対象になる。野ウサギと出合い頭に顔を合わせ、驚いて飛び退いたら、ウサギはしばらくこちらを見ていたけれど木のなかに飛び込んで逃げた、などというたわいのない話でさえもみんなの笑いを誘い、次から次へと話が展開していくのだった。

夜中だからといっても、必ずしも深い眠りにつけたわけではなかった。突然「バカヤロウ！」と奇声を発するものもあれば、何やら、むにやむにやと寝ほけるものもいて、それはそれで、また思い出の一つである。

時代に迎合しない

文化人たちの集まり

この年の九月になると、外国からの客船が入るたびに生徒が増えだした。四月の始業式には三〇名であったものが秋には六〇名になった。これでは運動会も庭では無理ということで、中目黒にあったアメリカンスクールの運動場を借りて行つた。天気の良い日であった。先生と生徒の対抗リレーやボール送り等々、個人競技もあれば団体競技もある。

この時も平均台の上に乗って釣る魚釣り競走で、お父さんやお母さん方がバランスのとりにくい平均

台の上から苦心をして地に置いたボール紙の魚を釣り上げる姿に応援の声や笑い声が空まで響き渡った。

綱引きは大変な人気で、招いたお客様までが立って応援をするという事態にもなった。

また、借り物競走では、三井先生と手をつないで」というのにあたった生徒が、いくら探しても先生が見つからない。あきらめてゴールをすると、アメリカンスクールの建物のかげからひよっこり現れるということもあった。「ミスター三井、ずるい！」などと生徒が言っていた。一同また大笑いするという、まことになごやかこのうえもない運動会であった。

一月には学芸会を催した。この時の出し物ですばらしかったのは、狂言『附子』であった。中学部の三名の生徒が演じた。能舞台と同じような松を描いたバックの前で衣装も本物、所作も本物、言葉だけが英語である。何しろ所作の指導は大蔵流の大先生である。三井先生の紹介によるものであった。練習を十分に積み、本番は大変にすばらしく、大評判となり、またその言葉のやりとり、所作のおもしろさに小さい生徒まで大笑いであった。何しろ言葉が英語であるということ、内容の説明をし

なくてもみんなが理解できたのである。

さらに、私か感心したのは、その練習風景である。先生は、動きをつけていくとき、日本語で台詞をいい、諡うたっていく。

生徒は先生のとおり英語に節をつけていく。先生は英語は全く分りませんが、いわれるのだが、狂言の台詞も諡の言葉もしっかりと頭に入っておられる。それで英語でどのあたりをやっているかが、きちんと分かる。そのため、一つひとつ的確に注意していかれる。私はそれを見ていて大変に驚嘆し、また多くのものを学びとったものだった。

生徒の数も増えたが先生の数も増えた。すばらしい講師が増えたのだ。そして中学部、高等女学部の生徒に対しての特別講座が最終開かれた。日本の大学で外国語関係の講座が減らされたために、時間のあいた先生方、また思想的に好ましくないというので講座のなくなった先生、そういう優れた大先生が呼んでこられては特別講義をしていただいた。法律の清沢先生、英文学の神田盾夫先生、それに日夏歌之助先生、芥川竜之介の親友の一人であった日夏先生の芥川竜之介論の時には生徒のなかにもぐ

り込み聴講をさせてもらった。今まで知らなかった芥川の自殺の原因の話なども実におもしろかった。何しろ後に疎開された時、その住居の門に「軍人と犬入るべからず」と看板を出したというような気骨のある方であったから。

この時期から一九年の始め頃まで、啓明学園にはすばらしい文化人が集まってこられ、授業後はいつもさまざまな話が続いた。

その談笑のなかには、当時としては他の所では絶対に発言できないような世界の政治経済に関する評論や座談も含まれていた。

今考えても、急速に垂れ込めてくる暗い戦雲のなかで、ここだけは世界に向けてしっかりと開いている窓であったような気がする。

二十代半ばの私には実に広い視野を与えられた貴重な時間の連続だった。日本の社会がなにもかも世界に背を向けて内へ内へと目を向けた時期、私はこれらの人々のおかげで、たった一つの窓から向こう側の広い世界を眺め、知ることのできる場所に置かれていた。大きな時間の流れからすればわずかな時間だったかもしれないが、私にとっては何にもにもかえられない貴重な財産となった。

戦争に突入

昭和十六年十二月八日の朝、ちよつと何となくいつもと違うようなものを感じながら、青山一丁目電車を降り学校へ行った。もともと信濃町駅から六本木にかけては、陸軍大学があり、近衛師団司令部、第一師団司令部、赤坂憲兵隊と、まるで陸軍の町みたいところであった。

あの辺を歩いていると民間人（軍隊で一般の人のことをさしている言葉）には会わなくても陸軍軍人には必ず会うといえるほどであった。学校で先生方と、「何か少し違うなあ」と話していた。やがて、授業のベルが鳴ると思われ、時、「先生！戦争です」と息をはずませて中学生が飛び込んで来た。ドア一枚をへだてた距離なのに興奮で息を切らしているのが分かった。われわれも彼に続いて隣の部屋に行くと、あの大本営発表の、「大日本帝国は本日未明北太平洋において戦争状態に入れり」と、緊張したアナウンサーの声が繰り返されていた。しかも、この第一報を学校にもたらしたものは、中学部の二宮さんと友人の岡さんが、しばらく前から組み立てていた手製のラジオであった。

女学部、初等部の生徒たちも集まって来た。この子供たちの胸のなかを去来するものはどんな思い

だろうか。まだ外地にある父親の身はどうなるのだ。日本での生活よりも長い間生活してきた学校は、そこでの友人は、先生はどうしているのだろうか。そういう人々との交わりを断たれた思い、安否を気遣う思いで満たされただろう。女学部の一人がふとつぶやいたものだ。

「もうイギリスのお友だちにも手紙が出せない。悲しいわ」

父親を外地において、母親と自分だけで帰った子供が何人もいたが、そのなかには外地の収容所で病を得た父を亡くしたものの、また、この開戦により、その父との永遠の別れとなった子供もあった。しかし、彼らはその後、戦争の終わるまでの間の生活では、日本人として課せられたことをきちんと行った。中学部、女学部の学校工場の作業、長野県御代田での労働、初等部の集団疎開での生活と、みんな心を込めて働き、生活したものである。

クリスマスに祈る

この年も重苦しい戦雲のなかでクリスマスの祝いが行われた。一階のロビーから二階に通じるしつかりした階段に女学部の生徒、階段の下からロビーを囲んで初等部と中学部の生徒が腰をおろす。そして、まず讚美歌を次から次へ

と歌った。その後は女学部の生徒がそれぞれ手にしたろうそくに火を灯し、その美しい炎を見ながら各国のクリスマスカロールを歌いつなげていった。この全体の指導の指揮をとられたのは、日本の宗教音楽界の第一人者であった中田羽後先生であった。中田先生は、啓明学園の音楽の先生を多忙のなか勤めてくださった。

発声をよくするために、まず柔軟体操をしたり、初等部の生徒には先生のピアノに合わせて自由に動き回らせるという表現の勉強をさせて、楽しい音楽の時間であった。ただ声楽には厳しい指導をもつて臨まれ、コンコーネの練習の時などは、女学部の連中はフーフーと音をあげていた。

この年のクリスマス、中田先生の指揮で歌う「平和の主の生誕を喜ぶ歌」は、生徒たちの胸にどのよう響いたことだろう。

学園も次第に戦時体制へ

昭和一七年

拝島の錬成場で

昭和一六年二月八日以後は、帰国してくる生徒はなくなった。海外にあった人々は外交官も商社・銀行関係もみな定められた場所に集められて抑留された。ところが、啓明学園にはごく少数ではあるが編入者があった。

戦前の日本には、特色をもち自由な雰囲気をもって教育を行ってきた「各種学校」があった。しかし、そういう学校に対して閉鎖が命ぜられたのである。

戦争遂行のためには自由な教育というのは危険であると、当時は何の不思議もなく考えられたのである。そこで、そういう学校在学していた生徒の一部が編入してきたのである。

五月になると、現在の啓明学園のある拝島の校地が、錬成場として認可された。それで、現在の運動場から多摩川の土手にまで及ぶ広大な田畑へ作業を行うためたびたび出かけることになった。

こういう作業は戦地で戦う兵士の苦勞を思いやり感謝の気持ちを表すためにということでは必要であった。

当時は拝島までゆくのは大変なことであった。何しろ立川行は三〇分に一回、浅川行（現在の高尾行）は一時間おきである。

新宿から立川まで中央線、立川から南拝島までが五日市鉄道である。この五日市鉄道は電車ではなくて汽車である。小さな蒸気機関車が煙を吐いて客車を引っ張ってゆく。蒸気機関車の番号には五番とつ

ているのがあった。二番は当時鉄道博物館の中におさまっていた。

おもちゃのような可愛らしい機関車に引かれた、乗客のあまり乗っていない列車であった。

その沿線もまた、のどかなものであった。車窓からは疎らな人家が続き、畜産試験場の広い牧場には牛がのんびりとこちらを眺めながら口をゆつくり動かしている。南拝島駅に着くと、もうすぐそこは錬成場であった。

錬成場に着くとまず作業。そして、すぐお昼になってしまふ。作業とはいっても遠い距離をやつてくるので働く時間は少なくなつてしまふ。二時を過ぎるともう帰らねばならない。

南拝島の駅で列車を待つ間、われわれ以外は誰もいないプラットホームで、子供たちはゲームに興じている。すると少し小高くなった拝島駅から、黒い煙を吐いて畑の中を列車が来るの見える。

それでも、また列車のほうを見ながらゲームを続けている。

いよいよ小さい機関車がプラットホームのはしにかかるとゲームをやめ、荷物を持ってきちんと二列に並んで止まるのを待つのである。なにもいわなくても一人ひとりきちんとタイミングをはかってや

座席があればそこにかけるが、どんなにすいていても決して騒ぐことはなかった。おもしろそうに、ここにこ笑って話に興じているが静かであった。このあたりにも、それぞれの家庭での躰のよさがうかがわれた。

ある時、途中で列車が止まり、その先へは行かないという。中神の駅であった。仕方がないので中神の駅からみんなで歩いた。えっさえっさと歩いた。

現在は立川から啓明学園へ通ずるバスの通る道だが、当時は道の両側には流れがあり、道には麦を干すむしろが並んでいた。

その間がやつと一人通れる位あいていた。そのわずかな土の上を、干してあるものを踏まないようにみんなで声をかけ合いながら歩いた。四五分ほどかかり錬成場にたどり着いた時には汗だくになっていた。

途中にある馬頭観世音の石仏や、その前に供えてある小さい花や、農家を風から守るための、枝を伸ばして葉を茂らせた背の高い木の垣根など、歩いたおかげでふだんは見ることのできなかつた珍しい風物に目を輝かせたのであった。それにしても、拝島は静かな村であった。

鮎のつかみどり

七月になると夏期学校の時期になった。昭和一七年は初等部は拝島で、中学部、高等女学部は軽井沢で行うことになった。

初等部の夏期学校は拝島村の禅寺・龍津寺の本堂を宿泊所として、現在の校舎の前の芝生を運動場として使い生活した。子供たちにとっては、広い本堂に蒲団を敷いて寝たり、涼しい風が多摩川からお寺を囲む木立のなかを吹きぬけていく本堂での朝の勉強など、珍しい経験ばかりであった。

夜は蚊帳をつつて寝る。明日の打ち合わせなどしていてふと見ると、蚊帳からニューつと手が出ている。急いで行って手を入れると、こんどはあつちのほうから足が出る。しばらくの間は生徒の手や足の格闘が続いた。

天氣が悪くて外へ出られない日の本堂は、柔道場とかわる。

菅野先生と男子は、寝技、立ち技と賑やかだ。

「先生、日本は夜も蟬が鳴くの？」
「え？ 夜蟬が鳴いている？ なに蟬かなあ」
「とっても大きい声で鳴いていますよ」

夜になって寝る頃に、
「先生、ほら鳴いているでしょう」

「あーあれはねえ、蟬じゃなくて蛙なのよ」

「蛙ですか……」

周りの田や小川に住む蛙のすばらしいコーラスが本堂をつつんできいた。

拜島の夏期学校ですばらしかったのは、多摩川で行った鮎のつかみどり。お父さんお母さんを招いて楽しんだ。まず村の漁業組合の人々が川へ入り、下流から上流へ静かに歩きながら適当な所に簀を立てていく。頃合をみてさらに上流のほうを止めて、水があまり流れてこないようにする。

「さあ皆さん、川に入って魚をつかまえてください」

という合図で、待っていましたとばかり大人も子供も川に入る。

いるいる、少なくなつた水に銀鱗をかがやかせて石のすき間に逃げこもつと魚が走る。それを両手でぱつとつかまえる。水が少ないから逃げるほうの魚は行動がままならない。その辺に置いてあるバケツはたちまちはね返る魚でいっぱいになる。

「キヤー、カニだ、カニだ、足の指をはさまれた」

「(どどど) ほんとだ、アハハ……」

「笑うなよ。小さくても痛いよ……」

……

「うわあ、足の裏がくすぐつたいよ……」

どうやらあわてて魚が足の下へもぐり込んだものらしい。

大人も子供も十分に楽しみ、その戦果のほどは鮎やはやを合わせて四斗樽に四つ位になった。その後三日間はかりは、鮎の塩焼き、フライ、天ぷら、バター焼きと、姿をかえては食膳に乗った。贅沢な馳走であったが、さすがにおしまいには、「もう鮎に会いたくないね」などと子供もささいなほどだった。

こんな経験はおそらくこれからは二度とできないだろうと思う。簀をとりのぞいた後の多摩川は、何事もなかったように、ただきらきらと光りながら流れていた。

初めての修学旅行

二学期になると新聞は戦争の記事で埋まるようになり、市民の生活には「銃後の何々」という話が増えてきた。しかし、それは遠い海のほうの戦いのようで、まだ服装も普通のままであったし、食糧や衣料などが不足してきたなど思う程度で、そう大きな変化はなかった。

一〇月になると初めての修学旅行が行われた。まだまだのん気な

ものであった。

初等部、中学部、高等女学部の少しずつコースを変えて同じ時期に行った。旅行地は京都・奈良方面であった。私は高等女学部にお供をした。コースを少しづつ変えているのであるが、巡る所は同じなので、旅の間、あちらこちらで

中学部と出会ったり初等部と出会ったりする。明るい日のなか、平安神宮で初等部と出会った時は、時間的に余裕があったこともあり、いかにも懐しい人々と再会したような騒ぎであった。

日本の古い文化に対する興味と珍しさに、みな目を見張っていた。奈良公園ではのどかに遊ぶ鹿とも写真をとり、楽しく秋の日を過ごした。

初等部、中学部ともに大きな収穫をあげた初めての修学旅行であった。なにしろこの旅行は、東

京駅を午前六時半に出発して、各駅停車で京都に着いたのは午後七時過ぎであった。私にとっては『太平記』の「東下り」を逆に京に上つたようなものでおもしろかった。初等部と高等女学部は京都で、中学部は名古屋で別れて奈良へ向かった。京都の宿は三篠小橋際の「亀屋」というこぢんまりした静かな宿だった。ここは昭和一〇年の秋、私か学生時代の最後の思い出に二

週間、京都、奈良、飛鳥、そして室生寺を巡る旅をした時の宿であった。

軍靴高鳴るなか、学園では

昭和一八年

三井家別邸を寄贈される

当時の北多摩郡拜島村にあった三井家別邸が、設立者三井高維の父君・三井八郎右衛門氏より啓明学園に寄贈された。国の重要建造物に指定されてもよいような立派な建物と、三万坪に及ぶ広大な土地が寄贈されたのである。

現在、北泉寮と呼ばれている当学園の日本館は、もともと鍋島侯爵の邸で、平河町の現在の首相官邸の近くにあったものである。

大正二二年の関東大震災で純洋館のほうに焼失し、残った日本式の建物を三井八郎右衛門氏がこれを譲り受けて移築したものであった。外見は日本式であるが、内部は和洋折衷といえるものであった。

この土地に隣接する伏見寮と称される所は、もともとは伏見宮が演習に來られ、土地が気に入って別邸をつくられたものだ。それを三井家が引き受けられていたものだった。

伏見宮はご夫人を大正二二年の地震でなくされた宮様であったので

屋根の軽い平屋の建物は、目に見えないところに耐震構造がしっかりと施されている。この建物のために、昔から有名な飛騨の匠が二〇名、わざわざ高山から招かれて、

用材の檜も飛騨から取り寄せて造つたものであったという。

対岸に滝山丘陵を望むこの広い土地はすばらしい自然の景をもち、春の桜、初夏の新緑、夏の緑深い木立、秋の紅葉、そして冬の雪と、四季それぞれの美しさを見せていた。この場所は後々啓明学園の教育の大切な場所となったのである。

幻の啓明学園七年制

高等学校

中学部と女学部が同一敷地内にあることは、当時としては許されていなかった。そのため、中学部は拜島で全寮制で授業をするようになった。

設備の関係から、化学の実験は集中授業で台町の理科室で行われた。啓明学園は中学部、高等女学部の併設が許されたが、次の段階として中学部卒業後のことを考えて、高等学校(旧制)か大学の設立をしようという計画があった。

帰国した子供のためには教育時間が多く必要であったからである。討議を重ねた結果、七年制高等学校をつくるとういうことになった。

場所は拝島の地で、北泉寮といわれる日本式の建物を生かして校舎の見取り図もできた。

設計をしたのは三井先生と親しい近江兄弟社の建築家ボーリス氏（米国より来られた伝道者。近江兄弟社を近江八幡の地につくり、建築事務所をもつ）。

また、メンソレータムの日本における製造を行った。後に夫人一柳満喜子さんの籍に入り、帰化し一柳米利留となる）であった。

ボーリス先生はあの建物をみて、「パレス」だと称され、それをそのまま生かして設計されたのであった。

このようにして七年制高等学校設立のすべての書類が整えられ、文部省に提出された。

ところが、昭和一九年になってから、この書類は文部省から返されてきた。返却された理由がつけられていた。「今は学生もすべて動員される時代であるので、七年制高等学校を設立しても学生は学ぶことができない。」

それ故にこの戦いが終わった時、改めて提出するように」というものであった。

昭和一八年秋には日本中の学生は理科系をのぞき学徒兵として戦列に加えられ、残る女子学生も学校工場で汗を流すという年であった。

しかし戦争は敗戦に終わり、戦後まもなく学制の改革が行われた。そんなわけで、啓明学園七年制高等学校設立の申請書はついに再び世に出ることはなかった。

緊迫を加える戦局のなかで

この頃、東京都の要請により中学部、高等女学部に海外勤務者の子弟以外の生徒も入学させるようになった。

啓明では初めてのいわゆる入学審査である。設備の関係で選抜入学させたのはごく少数であった。

四月一日、初めて東京の一部が空襲を受けた。早稲田付近である。台町校舎には半地下式ではあったが立派な防空壕があつたので、全員そこへ退避して空襲警報の解除のを待ったものだ。警報が解除になって教室へ帰った時、

「先生、あの地下室には石炭がいっぱいありましたね。もし飛行機が落とした爆弾で火が出たら、みんな死にますね」

「ほんとね。中に入らない方がいいかしら」

などといって大笑いをした。まだ、のん気なものだった。

戦争が始まった時、啓明に集まってきた教授たちや、子供とともに帰国することのできた父親たちの話では、まあ一年がやっと

だろう、長くなり二年三年とかかるようでは勝ち目はない、との話があつたが、早くも開戦から一年と四カ月がたち戦況は厳しい成り行きとなつてきた。

この年の四月、遠い南の島ガダルカナルから日本軍退却（当時は転進といつていた）、六月には北方アリューシャン列島のアツツ島、キスカ島より退却、同じく六月に連合艦隊司令長官山本五十六元帥の戦死と打ち続いて、戦況は悪くなつていった。

一方では、世の中は士気を鼓舞するために、歌でもなんでも、「鬼畜米英打ちてしままん」が大合唱される。そんななかで啓明学園の帰国した子供たちのなかには次第に不当な扱いを受ける者が増えてきたのである。

登校途中の地下鉄の中で、英語の本を持っていたといつてなぐられ横断途中で信号が変わり、急いで渡るとまもなく巡査に引つ張つていかれ、いくら話をしても聞き入れられず、「お前の学校は自由主義だ、非国民だ」などといわれ、小さい胸を痛めつけられることが続いた。それでも日本語のできる子供はよい。しかし、まだ上手になつていない子供、二世でたまに里帰りしているうちに帰れなくなつてしまった子供のなかには全く

話せない子供もあつた。なるべく外では日本語を使いなさいといつておいても限度がある。

しかし、子供の生命力というものはすばらしい。彼らは、こんななかで「啓明イングリッシュ」というものを創作したのである。

日本語と英語をくつつけて、日本語のようだけれどもよく聞くと英語をしゃべっているというものだった。

この頃には、男子は常時ゲートルを巻き、女子はズボンかもんペルである。啓明の子供は大体海外で生活するなかでズボンをもっているもので、それをそのまま着用させたが、これがまた、ブルーやピンクなどもあり、形もスマートである。そこで、それがまた周囲から変な目でみられるということになつてしまつたのであつた。

しかし、みんなたくましい。巡査に引つ張られた子供は工夫してそこを通らないで済むように道をかえてみたり、決してそれらに對抗して何かするというのではな

いが、心のなかにはしつかりしたものを持っていた。そういうことが理由で学校へ来なくなることもなく、親のほうも実に泰然自若としたものだった。もつとも彼らにとっては、学校のなかはかえつて楽しいものだった。

たかもしれない。日本人と結婚しておられる外国人の方に外国語の授業をしてもらえ

るし、学校のなかでは何語を使つても誰にもなにもいわれないのだから。

しかし学校のほうでは、これら外国人の先生に来ていただくことについては大変な心配りをしなければならなかつた。

いくら日本人と結婚していても、外見はやはり日本人ではなかつたのだから。

学徒兵を送つた日

一〇月二日は、朝からしとしとと冷たい秋雨の降る日であつた。

この年、大学や専門学校に学ぶ学生に与えられていた徴兵猶予もなく、理科系学部籍を置くもの以外は全部兵隊にとられることになつた。

戦局この事態に及んで、もはや学生としてただ勉強にいそしんでいる余裕などはないということである。

この日、東京の明治神宮外苑の陸上競技場は学生で埋まつた。

彼らを励ます壮行の会が行われたのである。神宮外苑の競技場や隣の野球場、それらは学生たちの運動のメッカであつた。

プロ野球はまだできたばかり、野

球といえは東京六大学が花であった時代である。六大学の選 55 手たちのプロマイドが店頭に並び、売られる時代であった。

その青春の限りを尽くして競技をし、応援をしたその場所が、戦場への旅立ちの場となったのだ。

神宮で壮行の会を終えた学生は隊列を組み、足並みをそろえて青山の通りから赤坂を通って皇居の方向へと行進していった。

啓明学園の中学部、高等女学部、初等部の子供たちは、高橋是清記念公園の前で、長い長い学徒出陣の行進を見送った。

五分や一〇分の短い時間ではなかった。尽きることのない行進ではないかと思われる位長い行進であった。雨に濡れた学生服、帽子のつばからはしずくが落ちていた。どの顔もどの顔も石のように堅かった。

まっすぐ前を見ている眼。あの時代果たして彼らの眼は何を見ていたのだらう。中学部の生徒は、校旗をじつと持ち見送っていたが、もしかすると、これは間もなくくる自分の姿かもしれないと思ってもあったかもしれない。

まばたきするのを忘れたように見つめていた。女学部の生徒のなかには涙をぬぐう姿があった。

長い行進はやつと終わった。終

わつた後もまだそのあたりが動いているような気がした。

生徒たちも、「全部の行進が終わったのに、道が動いていました。そんな、長い行進でした」、「学校へ帰る途中の道に箱が落ちていたのでもその箱をみたら、箱が動いて見えました」と日記に書いているほどだった。

啓明の流行歌

第四回運動会は三井浜田山のグラウンドで行われた。四百メートルトラックの広いグラウンドだった。しかも周囲には木立が多く、大変に気持ちのよい所だった。

戦争突入後丸二年がたとうとしていた時、さすがの啓明学園の運動会も少し変わってきた。競技の種類や、生徒、先生、保護者、お客と、競技に参加してくださる方々には違いはないが、この年は運動会の入場行進が、いわゆる分列行進であった。

美しい秋晴れの日だった。中学部、女学部、初等部とそれぞれにまとまって行進する。

中学部を先頭にして女学部、初等部と続く。それぞれの列には分隊長がいて、本部前にかかる。

「頭！ 右」

と大声で号令をかける。そうすると足を高くあげて力強く行進し、

隊長の、「なおれ！」の指示があるまで続く。中学部の力強い声、女学部の高い声、初等部の可愛らしい声が浜田山の木立をわたるさわやかな風の音のなかに響き渡った。まだまだ市民の生活のなかには空襲はあまり念頭に浮かばなかった。

初等部が学芸会にやったもので日本史を寸劇、歌、朗読などで綴った出し物があった。

そのなかに「八幡船の歌」というのがあった。作詞は私がやり、作曲は中田羽後先生がしてくださいました。作詞は元気のよい文句であったが、中田先生の曲は日本の民謡に出てくる舟歌のような雰囲気のものだった。学芸会のために初等部のみんなが練習したが、よっぽど歌いやすい曲とみえて、日常生活のなかでも歌いながらかけ回っていた。そうして、とうとう学校中に広まって愛唱された。一同、この歌を「啓明流行歌」と称した。

残念ながらこの歌を作った私自身も今はすっかり忘れてしまった。

戦場へ――

先生方とのお別れ

初等部六年の男子と中学部の生徒には剣道と教練の時間が入った。また、高等女学部には薙刀が入っ

た。これらの時間には元気のよい鋭い声が台町の庭に響き渡ることとなった。剣道や薙刀は、基本的な型の練習ではあったが、みんな楽しみにやっていた。

また、男子の教練もなかなか一生懸命にやっていた。教練の先生は石田少尉、もとは体育の先生であった。授業中はまじめにしつかりと訓練してくれるが、放課後になると楽しい。しばらくの時間、ドッジボールやバスケットボールとともに興じてくれるし、ことにドッジボールの楽しさは格別であった。

石田少尉の足をねらって投げれば、ぱつと両足をほとんど水平に開いて飛び上がり、ボールはみごとに後へ飛んでしまう。それではというので、少し上をねらうと地面の上へあたり、中間をねらって投げるとぐるりと体を回してよける。中学部の男子生徒がいくらかやつきになって、どこをねらっても、ひらりひらりとかわされる。まことに牛若丸のような先生であった。生徒はむきになってボールを投げ、見ている生徒や先生は面白かって笑ったり冷やかしたり、賑やかなひと時であった。

石田少尉も楽しそうであった。召集されて軍務についていたので、くつろいだ気持ちをもってもち

も楽しめた時間であったのかもしれない。そんな楽しい少尉殿もとうとう戦地へ向けて出発され、学校を去っていかれた。その後の消息は聞かない。

音楽の磯貝先生も楽しい先生であった。音楽をなさる先生の独唱はいつともみんなを魅了した。

その先生のところにも容赦なく召集令状がきたのである。先生との送別の会は感激的なものだった。

先生が得意とする歌曲を歌ってくださるといふ。しかし、誰がピアノを弾くかということになった時、高等女学部の市毛笑子さんに白羽の矢がたつた。彼女は先生から楽譜を受け取り二回ほど楽譜を見ながらピアノの鍵盤の上に指を走らせ、「できませう」と答えた。

今別ればおそらく二度と会うことは不可能と考えられる時代である。その思いはおそらく先生の胸中にも去来したはずである。にもかかわらず、静かに、すばらしいバリトンに乗せて歌いあげられたそれを支えて力強く演奏する市毛さんのピアノ。聞いているうちに、そこに集まったすべての人の頬には滂沱たる涙が流れていた。なかには声を押し殺して泣いている生徒もあった。

剣道の先生も去られた。故郷の

沖縄に帰った先生もあった。台湾へ帰った先生もあった。三井先生が「こつちのほうが安全ですよ、途中で船が沈められますよ」などというておられたが、やはり、親や兄弟の待つ地へと帰っていかれた。戦争が始まって二年が過ぎようとしていたのである。

疎開始まる 昭和一九年

軽井沢に疎開学園を

開設する

この年、啓明学園初等部、中学校、高等女学部は、それぞれ啓明学園初等学校、中学校、高等女学校と改称された。中学校は赤坂台町に移り、高等女学校とともにいわゆる学校工場といわれるもので、学校を作業場として雲母がしの作業を行った。蓄電池の部品である。

戦況は好転をみせず、かえって日本本土に敵が迫ってくるのを感じるようになった。

建物疎開や、子供の縁故疎開を呼びかける声が大きくなった。

啓明学園も縁故疎開で去る人も出てきた。八月学童疎開の国策に従い、東京都は、各区が割り当ての地方を決め、そこへ疎開が始まったのである。赤坂区は北多摩郡であった。初等学校三年以上の児童

が北多摩郡拜島村に疎開した。二名であった。引率の先生は菅野尚明初等学校主事のほか五名、炊事関係三名。寮舎は現在の北泉寮であった。大きな荷物を持って新宿から立川、立川から南拜島へと旅立ったのであった。

今までの遠足とは違う。今日、家を離れたら戦争が終わるまでは家に帰ることはできないのである。

七月には南の島サイパンが全滅し、米軍の手に落ちている。小さな胸の奥にもうずくものがあつたろう。お昼頃に寮に着いた。それぞれ極度に物資の少なくなった時ではあつたが、お母さんの心尽くしの弁当を開く。いよいよ集団疎

長の話にそれぞれ決意を新たに送った。三時になると、付き添って送ってきたお母さん方の心尽くしのおやつが出た。「かぼちゃ」のから揚げであった。そのおいしかったこと、甘かったこと、今でもはつきり覚えている。

間もなく、名残りを惜しみつつ親御さんたちは帰っていかれた。急に、両肩にずしりと重いものがおおいかぶさるのを覚えた。

ここは、農村地帯とはいっても立川、横田や箱根ヶ崎には陸軍関係の飛行場がある。決して安全地帯とはいえない。追いつめられつつある戦局を考えると、親から離れたこの子供たちをどう守るか、まことに重い責任を感じた。

重陽の節句

啓明学園初等学校の集団疎開の生活に関しては、この疎開で生活した子供たちが四〇年後に編集した『多摩川は澄んでいた』という当時の日記集がある。ここで私は、一人の教師として、厳しかった生活の様を写し出してみたいと思う。

疎開寮での生活も二週間を過ぎる頃には、周りの状況にも慣れて、いろいろな面で軌道に乗ってきた。九月九日は、平安時代から行われている「重陽の節句」ということ

で、そのお祝いをやるとういうことになった。まず重陽の節句のお話を菅野先生から伺うため、みんなはノートと鉛筆をもって、広い庭にある池の中につき出た小さな建物へ出かけた。あずま屋風のこの建物は中に腰をかける所があり、真ん中にお茶のかまが置けるようになっていて、二三人の小学生はまじめな顔で、和歌や俳句をひねり出そうとしている。建物のわきの池の中にはガマが茶色の棒のよな穂を出している(図表一4)。

そして池の向こう側にあるあずま屋には四、五頭のヒツジが入り込んで「メエー」とのんびりした声を出してこちらを眺めている。

少し雨模様の日であった。たぶんヒツジは九月の夕立を避けて入り込んだものだろう。このヒツジたちもやがては子供たちといふ友だちになった。

子供たちには欲がないから、感じたもの見たものがすぐに歌になり、句となる。なかなかの名句、名歌が生まれたが、残念ながら、それらは今、私の手もとにない。この風雅なあずま屋は、その後、月見の宴やら雪見にとしやれたりして、いろいろの時に利用されたのであった。

菅野先生に召集令

菅野先生のもとに召集令状が舞い込んできた。当時は、五体満足な男性なら誰のところへきてもおかしくない時代だった。体が弱い若者も全部兵役につき、入隊してから、当時としてはもう一般の人には縁のなくなった牛乳や栄養剤で、なんとか軍務につくに足る体力をつけるようにした。俗に養護部隊と称していた部隊もあつたという。

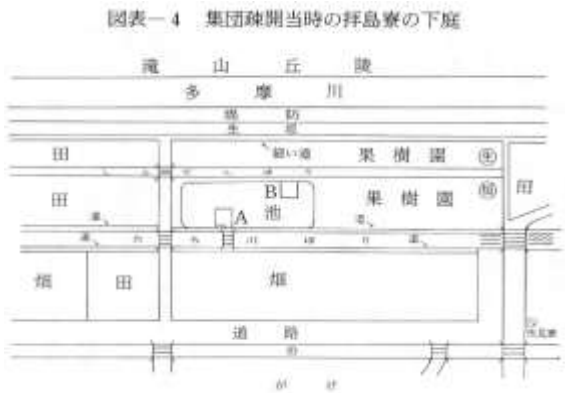
しかし、やっと軌道に乗り、安定した生活を始めた矢先のこと、みんなの不安は隠せなかった。九月一日の朝、みんなに送られて菅野先生は寮を後に、故郷の山に向かわれた。

後には二三名の子供たちと、五人の教師と炊事係の三名の女子と女子ばかりで集団疎開を守ってゆかねばならない。ただ、啓明学園の広い農場を管理していた谷中広美先生の存在はわれわれには大き



菅野尚明先生

かった。ことに大人数の食糧にいろいろと工夫しては楽しいものに



図表一4 集団疎開当時の拜島寮の下庭

開の開寮式が始まり、菅野尚明寮

してくれたのは、うれしくも頼もしかった。

よく学びよく働きよく遊ぶ

九月四日から授業が始まった。午前九時から三時間の授業だ。みんな、ひさびさなので熱心に勉強する。休み時間も休まずに、一人ひとりが自分の勉強をしつかりとやっていたほどだ。戦争のなかで自分のやることは何かということの子供心にも、なんとなく感じていたのかもしれない。

この日から戦争の終わる日まで午前中は勉強、午後は作業という日課が続いた。そして、その間に、多摩川の美しい流れが楽しい水泳の時間を与えてくれた。

秋は収穫の時である。谷中先生がいろいろと考えて作ってくれた野菜の収穫に忙しい。

初めのうちは、ドクダミの葉をサツマイモの葉と間違え、草取りの時などサツマイモを抜いたりしていた子供も、今は立派に農作業をこなすようになっていた。

学園の畑は砂が多いので、夏の間はナス畑の畝の間に水を流したりして忙しかったが、里芋やサツマイモ、豆類はなかなか味がよかった。サツマイモのつるや葉も食糧の少ない時代には、うっかり捨てられない。油でいためたり、み

そ汁の実になったりした。里芋の茎は縄でしばってはりめぐらした軒下の紐につるした。

大根の葉も干した。それらはみんな冬に備えたものだった。玉ねぎも茎をしばり、これを食堂から台所へ行く廊下の上に何本も紐を通してぶら下げた。この玉ねぎはだんだん茎が乾いてくるとしばった縄から抜けて、時々ポツンと落ちてくる。頭上に直撃を受けた人もあったが、玉ねぎといつてもあれはとも痛い。

中秋の名月には枝豆、里芋、おさつ、それに昨年の米をひいてつくった粉のおだんご、庭にはスキはいくらでもあるので、立派な月見のお供えができた。

額に汗して働き、草を取り育てたものを前にして、みんなは興奮していた。

谷中先生の非常に上手な指導により、子供たちは楽しんで農作業に励むことができた。

落花生の収穫の時も、谷中先生がひとくわ入れて茎をあげると、まるで傘のように広がった茎にたくさんの実がぶら下がっている。ワ

ーつと歓声があがる。実を取りはずす。むしろの上に山ができる。やがて、この実はおやつに、食事

の時にいろいろな姿をかえて現れた。

一〇月になると、広い田に出て稲刈りである。五年、六年の男子も女子も鎌の使い方はすぐ

に上手になった。ザックザックと刈ってゆく。でも限られた時間、子供たちの手というところで、とうとう一月の中旬過ぎまでかかった。最後のたんぼの稲刈りが終わった時、思わずみんなは万歳を叫んだ。そして、谷中先生からおほめの言葉をいただいた時は本当にうれしさに満たされたものだった。

四本の飛行機雲

一月に入ると、毎日のようにB二九が一機ずつやって来るようになった。初冬の青く晴れ上がった空に、くつきりと四本の飛行機雲が細く伸びてゆく。その細い雲の伸びるもとを見ると、小さきらりと光るものがある。そして耳をすますと、かすかにうなるような音がする。B二九の爆音だ。二〇日過ぎ、真昼の東京の一部が数機のB二九の焼夷攻撃を受けた。

この日は、集団疎開のみんなが多摩御陵のあたりに遠足に行つたお

天気のよい日だった。楽しく遊んでから昼食を賑やかに

する。食べるに十分な物はなくてもお炊事の先生方の真心のお弁当だ。子供たちはどんな物でも感謝の気持ちをもって食べていた。

この日も美しい自然のなかで特に楽しくおいしい食事だった。

食事がすんで、またひとしきり遊びが賑やかに展開していた。とサイレンである。みんなすぐに集まり防空頭巾をかぶる。警戒警報だ、と思う間もなく追っかけるように、またサイレンだ。空襲警報だ。どんな状況なのかさっぱり分からない。しばらくは、森のそばの竹やぶの中にひそんで警報の解けるのを待った。やがて空襲警報が解除になり、帰るために浅川駅まで行くと電車が止まっている。

いつ開通するか分からないという仕方がないので、甲州街道をささと歩いたので、西八王子駅まで来たとき、電車が開通したので分かった。そこから電車に乗り帰った。この日以後、ほとんど毎日のように、晴れた日には青空に四本の飛行機雲を引き、「あぶ」のようなうなりを立てながらB二九はやって来たのである。

常に今生の別れを思う

学童集団疎開に関しては、国もかなりの神経を遣つた。主として食糧であったが、特別の配給とあった。ただし、本学園では赤坂の本校へ来るので、菅野先生がおられた時には、毎週本校へ出かけ、これを運んでこられた。

本校との種々の打ち合わせとともに、配給となった物資を背負って帰寮された。ところが、菅野先生が応召されてしまうと、その役目は自然に私のところへ回ってきた。その日が来ると朝七時頃に寮を出る。戦いが厳しさを増してくると、いろいろのものが統合されるようになった。五日市鉄道も統合され、立川と拝島間の駅は廃止となった。従って、東京都心へ向かう時は青梅線拝島駅がその往復に用いられるようになった。それまでの南拝島にくらべ、かなり駅が遠くなった。

出かける時、みんなが寮務室の窓から重なり合うように顔を出し、「行ってらっしゃい」と叫ぶ。通用門を出てもまた叫んでいたものだ。この時代は、朝起きて明るい太陽の光を拝みながら、ああ今日も生きて朝を迎えられたという、なんとも命に対するはかないような気のする時代だった。

今、都心へ向かおうとする自分と、残っている子供たち、ひとたび空襲警報が出ればもう再び会うことはないかもしれない。そんな思いのする別れだった。子供たちは姿が見えなくなっても声だけは届けと叫ぶ。「行ってらっしゃい」には、子供心にも今生の別れになるかもしれないという思いがあったのだ

ろ。

警報は出なくても、いろいろと報告をしたり、連絡事項を聞いたりして、配給物をもたらって帰ると、拝島駅へ着くのは夜の八時を過ぎる。配給の物資は、私が学生時代に使っていたリュックサックにいっぱいになる。バターなどもあれば味噌醤油の調味料まであり、そのうえ、今のように軽い容器のない時代である。一升びんが二本位あれば相当な重さだ。約三二キロ位はあった。拝島で降りる際、すぐには背負えない。まず座席に乗せ、しゃがんで背負ってから、よしよと立つ。幸い学生時代おてんばで足腰を鍛えておいたのと、デンマーク体操で柔軟な筋肉をつくっておいたのが大いに役に立った。

肩に食い込むリュックサックの太い紐を両手でゆるみをとりにながら歩いてきた。月もなくまつ暗な道だった。しばらくすると、後から誰かがついて来るような気配がした。一瞬、いやな気がした。

靴の音だ。こちらが速度をゆるめると、後もしゆるめる。今の小荷田のあたりで、右手にうっそうとした森が続く、やがて左手の田のわきに二軒ばかりの農家が見えてきた。そこで、後から来た人が、

「もしもし、どちらまで行かれませうか」
男の人の声だ。

「啓明学園の集団疎開寮までです」

「そうですか、三井邸ですね」

「そうです。以前は三井さんの別邸でした」

後から来た人が追いついて来た。見ると、陸軍の軍服を着て伍長の肩章を付けていた。

「本当に三井邸におるのですか」

「はいそうです。私はそこへ来ている集団疎開の教師です。」

今日は東京の本校にきている配給物を持って帰ってきたところですよ」

「大変ですなあ。いや、安心しましたよ。夜の暗い道で女の人に会うのは気が悪いですよ」

「それはまた、なぜですか」

「いやあ、昔から狸や狐は男には

化けませんからねえ」

私は狸か狐の化身と疑われたらしい。

「そういうばそうですねえ。男の方でも暗い寂しい道は怖いんですね」

と感心し、それから話をしながら歩き、通用門へ向かう道の分かれていた所で、この伍長殿と別れた。

ずっと後年、私は担任していた中学生から、狸という「あだな」というか。愛称をいただいた。

そして、その生徒たちが卒業し高校生になっても私の授業のあるクラスの上には可愛らしい狸が乗っていたものだ。何かの因縁かなと思っただけだ。

本格的な本土空襲が始まる

二月も押し迫った頃、突然菅野先生が帰って来られた。寮全体がわき上がった。丸坊主の先生の頭にさわってみる子供もあった。

谷中先生のご好意で、菅野先生歓迎会と稲刈りに励んだほうびとお正月の用意と、みんな一緒にして餅つきをすることになった。

台所のかまどには大きな

「せいろ」が釜に乗せられ、かまどにはパチパチと火が燃え、やがて「せいろ」からは湯気が上がり、だんだんという匂いがしてくる。

やがて蒸し上がったお米は臼の中へ入れられる。谷中先生と菅野先生が杵をふり上げてついた。

金田愛子先生が手返しだ。六年生の男子もついた。なかには少々腰のふらふらする人もあった。やがて、つき上がったお餅は台所の大きなテーブルの上で丸められたり、のし餅に作られてゆく。たくさんのお餅がつかれた。小さい生徒のなかには杵についたお餅が飛んでくるというので上を向いて口を開けていた人もあった。その日のおやつは、つきたてのお餅に「きなこ」がついていた。みんな久しぶりのおいしいおやつに物もおわず食べた。どの子の眼もうれしくてここにこと輝いていた。

こうして家を離れた疎開の生活のなかでも、みんなでお互いに助け合う気持ちと、どんな小さなことにも感謝をし、さらに六年生は下級生のよい兄となり姉となり、下級生はまた上級生を信頼し、本当に大きな家族のような雰囲気満ちていた。しかし、年が明けてお正月も一〇日頃になると、B二九の編隊による昼間の爆撃攻撃が連日のように始まったのである。

カラスの鳴かない日は

あつても

日本の国を取り巻く大きな海。その海の東から南にかけて弓状に延びていった戦線が次第に縮まり、やがて硫黄島もサイパン島も米軍の手に落ちていった。サイパン島が玉砕したのが一九年の七月である。続いて一〇月にはレイテ沖海戦で日本の海の障壁の役目を果たしていた連合艦隊の主力が壊滅したのである。

こうした戦況のもとではあつても、お正月はまじり気なしのお餅の入ったお雑煮で祝ったのだった。B二九はお正月の休みはくれたものの、七日間の松の内がすむかすまないうちに連日の昼間の爆撃攻撃を開始した。荻窪、三鷹の飛行機工場や立川の飛行場に対しての爆撃である。この爆撃の時にはB二九の編隊はちようど啓明学園の北泉寮前の芝生の上を西から東へと通過していく。啓明学園の庭にはツツジのなかに灯籠のある築山があるが、その上で、B二九がパ

一つと弾倉を開くのが見える。弾倉がまっ黒に見えるのが不気味だ。するとゴーンという音がする。爆

東京大空襲下の子供たち

昭和二〇年

弾が空気を引きさいて落ちていく音だ。そして、しばらくすると足もとからズーンというような重々しく鈍い震動が伝わってくる。

また、立川が空襲される時には、われわれの上にくる時にはもう弾倉は開かれています。そしてザーという音がする。これは近い音だ。足もとからの震動も強い。すぐに空襲警報が出る。疎開のみんなは木の下で空を見ている。爆音が近づく。六年生の男子が叫んだ。

「先生！今日は中島飛行機工場だ！」

中島飛行機工場は荻窪と三鷹にあった。この頃の空襲はほとんど荻窪と三鷹に集中した。立川にはもう輸送機しかなかったのである。空襲警報が出ても、爆音が遠くでかすかに聞こえるような時はたぶん神奈川県の方だろう。滝山の稜線の上を小さな灰色の編隊が東へ向かうのが見えた。そんなある日、大学に行っている啓明の卒業生がひよっこり訪ねて来た。大学生ではあるが中島飛行機工場に動員されていたという。

「いや恐ろしかった。でも先生、

ほんとうにひと足違いが生と死を分けるってことがあるんですね。それも早く逃げたから必ずしも助かるわけでもないし。僕のいた所では学校の友だちはほとんどやられました」

よく聞いたことがあった。戦争に行くと言論者になるというところを。確かにそうかもしれない。折り重なって伏して待避したのに、自分の上の人と下の人は死に、自分は助かったという上條信山先生の体験談を後に伺ったこともあった。戦争末期の艦載機の来襲で小仏トンネルの所で列車が銃撃を受けた時の話であった。

灯火管制のもとでの

お話し会

一月に入ると、寒さは一段と厳しさを増す。集団疎開の生活では寮務室に薪のストーブが一つあるだけで暖房はない。その薪は谷中先生が適当に運んでおいてくれたもので、その太い木を適当な長さに切り、それを谷中先生と菅野尚明先生がナタで割ってくれる。それを片っぱしから子供たちが小屋に運び、積み上げていく。

炊事用は配給になるが十分ではない。この薪は炊事にも使われた。後年、ビクスラー先生にのこぎり

とがあつたが、この時に体得した腕前なのであつた。そのうえ、腰が柔らかいのが幸いした。薪は腰で切ればあまり疲れないのである。これも体操をやってきた効果というものだろうか。

決して暖かいとはいえない冬の生活のなかで、子供たちは薄着である。靴下もはかない。保護者の面会日に訪ねてきた親たちが、寒いだらうと上衣を着せたり靴下をはかせたりする。子供たちは素直に親のいうとおりになっている。ところが、いよいよ親たちが帰途につき、通用門から姿が見えなくなると首をすくめて靴下を脱ぎ、厚い上衣を脱いで広間で相撲をとっている。子供は『風の子』

本当に寒くはないらしい。

日中は連日空襲が続いているが、夜は静かだ。夕食が終わると日記を書き、その後は寝るまで自由時間だ。いつの頃からか、その時間は連続講談を聴く時間となった。もちろん強制的ではない。

しかし、だんだん人数が増えてほとんど全員となった。子供はお話が好きなのだ。まず最初は、一四日間連続で大仏次郎の『赤穂浪士』を子供に分かりやすいようにアレンジして話す。その次に話したのが吉川英治の『宮本武蔵』であつた。どちらの作品もそこに登場す

お話し会は夜の空襲が始まるまで続いた。

夜の空襲が始まる

一月から二月にかけては、昼間の空襲が続いていたが、三月に入ってから、もう飛行機工場は壊滅したとみたのか、少し休みの日が出てきた。

三月九日の夜半、警戒警報が出た。と、追いかけるように空襲警報が出た。そのとたん、もう遠くでかすかな爆音が、地の底からわき上がるような無気味なうなりをあげている。私は外へ出てみたが、頭上の夜空は暗く静かだ。芝生に出て見回すと、ちょうど東の正門の大きなケヤキの木の枝を黒くシルエットに浮か上がらせて夜の空が赤々と燃え上がっている。鈍いドーンという音がするたびに、赤いなかに黄色味を帯びた炎のようなものがめらめらと立ち上る。東京都内の方向だと思つて寮務室へ帰ると、先生方がラジオを囲んでいた。それによると、東部軍管区が情報を流しており、東京の下町一帯が二百機のB二九の焼夷弾攻撃にあつていふことを知つた。遙かに遠い拝島にいてもあれほどの空の色や炎である。そこで逃げまどう人々の姿を思わずにはおられず、胸が痛くなったものだった。

東の空の赤さも明け方になって空が明るくなるにつれて見えなくなつた。広島・長崎と同様に、厳しい戦時下で一生懸命に生活していた市民一二十万人が炎のなかで一瞬にして尊い命を落としていたのであつた。

拜島駅周辺爆撃！

三月一〇日の東京大空襲以来、米軍機の来襲は夜になった。皮肉にも、おかげで昼間にはいろいろな仕事ができるようになった。そんな激しい空襲の連続のもとでも、自然は間違ひなく正確にその生命のリズムを刻んでいる。秋の名月観賞の時に美しくなびいていたススキの穂は、冬になると白く枯れてきた。この枯れて綿のようにふわふわした穂はつみとられて供出された。みんな頭の毛をススキの綿毛でまっ白にしながら、広い学園の庭でつみとつた。

午前中の勉強は相変わらずである。ことに、この頃は午前中の最初の一時間は、鉢巻きをして習字に励み、立派な字をたくさん書いた。午後はいろいろな作業がある。なかでも当番制になっていたのがヒツジ飼いであつた。一一、三頭いたヒツジが畑の作物を食べないように番をするのだ。五、六年の子供と三、四年の子供が四人か五人で組になって長い棒を持ち、ヒ

ツジが草を食べているそばの道に腰をおろし、目でヒツジの動きを追いながら、楽しそうに話し合っている。

ヒツジがきまつた所から出そうになると、長い棒を横にしてホイホイと声をかけてもとの所に帰す。「ようすけさん」という子はこれが上手で、ヒツジ飼いの名人といわれ、それからはいつも「ようすけさん」はヒツジ飼いの責任者になった。たんぼにレンゲが咲く頃は、これが毎夜のように空襲のある時の風景か、と思われるほどのどかな姿であつた。

三月の二〇日過ぎ、赤坂台町の校舎で初等学校、中学校、高等女学校の卒業式が行われた。卒業式に備へ六年生を早目に帰宅させようと思つたが、一〇日の大空襲で多く罹災したので、念のため卒業式ぎりぎりの前日に六年生を寮から帰宅させた。昨年八月から七月、父母のもとを離れた生活で、淋しい時、悲しい時、また、楽しい時にいつも力になって励ましてくれた六年生が去っていくのは本当に心細いことであつた。

残つたみんなは涙を流して、口々に「元気でね」、「お元気で」、「さようなら」と別れたのであつた。この卒業式は台町校舎での最後の卒業式になつたのである。

六年生を送り出して、やがて四月が来た。寒くて雪のよく降つた年であつたが、日陰の雪もなんとか消え、桜の四月がやつてきたのである。その四月三日の夜、空襲警報が出たとたんにもう爆音であつた。この夜、拜島駅周辺にたくさん爆弾が落とされた。

頭上を這い回るような爆音。照明弾が次々に空からおりてくる。ゆらりゆらりとゆっくりおりてくる。その明るさといえば、庭の芝生の細い葉っぱの一本一本がくつきりと浮かび上がるほどであつた。頭上の爆音は何をねらっているのだろう。今にもこの照らし出された所に爆弾が降つてきそうな気がする。しかし、頭上の爆音は切れ目なく続いているが、その他には何の音もない。あばれ回る敵機の下で照明弾をあびながら、すべてものがひっそりと息をひそめていた。長い長い時間がたつたように思つた。照明弾もやがてなくなり、もとの暗さがもどつて、空襲警報も解除となつた。次の日は静かな朝だつた。ところがどこかでドカーンという爆発音。

ガラスがびりびりと振動する。それから一週間位はあちこちで毎日何回かドカーン、ドカーンが続いた。照明弾で照らしておいて、たくさん時限爆弾を落としていつ

たのだ。これも心理作戦だつたのだろうか。

当時、夜の空襲では地上の煙草の火でも見えれば爆弾を落とされるといわれていた。そのため、灯火管制は厳重をきわめた。夜の爆撃が始まつたある夜、龍津寺の下の方の河原に近い所に小さな工場があり、そこから小さな明かりが漏れていたとかで、たつた一度であつたが爆弾が落とされたことがあつた。その夜には、空襲警報が出たとたん、ものすごい音と振動、青白い光が見えた。これは、北泉寮の河原に面した方は完全に吹き飛ばされたのではないかと思つて、寮務室から飛び出して行つたところ、幸い何の異変もなく安堵した。玄関から軒下伝いに回つて行つてポンプ室のあたりまでくると、ピシッピシッという鋭い音がして、目をこらして見ると、そこいら中に大きな枝、小さな枝がたくさん落ちていた。空襲によるものか、その爆風によるものか。ここから先は危ないと思ひ、見回りをやめて寮務室に戻つた。

次の日、あらためて見ると、枝は全部鋭い刃物で切り落とされたようになつていた。さらに、寮の屋根には細かい爆弾の破片がつきささり、うっかり蒲団でも干そうものなら引つかかつて蒲団のかわが

やぶけてしまうほどだつた。そして、中庭に面したガラスは四〇枚近く全部内側のほうに割れていた。

四月、沖繩本島に米軍上陸の報が入る。戦況が厳しさを増し、空襲が激しさを増すと、啓明学園の疎開寮は村人たちのなかから白い目でみられることも多くなつた。

そして、村の人々のやかましいという通報があつたのでといつて巡查が内部を見回りに来たり、あるいは、歯医者へ行くために、大師前まで行くのに村の中の道を通ると、どこからともなく石が飛んできたりすることもあつた。そのため、河原の土手を通つて歯医者へ行つたものだ。

しかし、子供たちは相変わらずよく励み、朝は早くから拜島の天神様の境内の掃除の奉仕をしたり、村の小学校の行事に招かれれば喜んで参加もしていた。

台町校舎焼失

五月二四日夜半からの空襲は東京都内最後の大空襲となつた。その夜、この大空襲のなかで台町の校舎は焼失したのであつた。

夜であつたために中学校、高等女学校の生徒たちに犠牲者はなかつたが、当夜、学校の宿直だつた先生の話によれば、道という道はまるで火の川のようにあつたという。

大洪水の水が流れるように、火が流れたのである。

本校は、物置に使っていた赤レンガの建物と、暖炉用の高い煙突を残して、あとは全部焼け落ちた。数日後、中学校、高等学校の主事の先生や三井高維先生が、今後の対策やら子供たちの安全のために会合を持たれ、有志だけでも集めて、より安全と思われる場所へ移り、そこで生活をしようということになった。さつそく一カ月後、かつて高等女学校と中学校が夏期学校としていた軽井沢へ移ることになった。そして、そこで全寮の生活が始まったのだった。しかし、そういう時代なので、ここでも学業に専念することはできず、御代田にあった軍の施設に毎日労働に出る日が続いた。

悲運だったカラスのカン太

四月の半ば過ぎ頃、陸軍の高射砲隊が、学園の校庭で野営をさせてほしいという話があった。

それは、現在の拜島駅南側の山茶屋のある高台に陣地を構築するので、それができ上がるまでということであった。その間、彼らは朝出かけて行って夕方遅く帰るという生活で、これが二、三週間続いた。この部隊は、晴部隊 という名で呼ばれていた。晴部隊はどう

やら召集された兵士が多いようで、年輩の人がかなり多かった。晴部隊の部隊長も召集された人であったが、少佐であり、召集前は静岡のお茶屋さんだったそうだ。そんなことでこの部隊の兵士は、みんな子供がなつかしいのだろう。

疎開の子供たちを大変に可愛かつてくれた。スケッチブックに色鉛筆でワラビの若芽のようなものがニヨキニヨキと生えている絵を描いて、「のびろ！ のびろ！ 心もからだも強い子に のびろ のびろ」などとあった。学園の庭の周りには野草のノビルがたくさんあったので、それに引っかけたものだろう。

この晴部隊の、名前は忘れたが何とかという軍曹殿が、ある日、巢から落ちたカラスの子を拾って来た。カラスのことに詳しい軍曹殿は、そのたくましさとは反対に、小さい子カラスを大切にしていた。そして、作業に出て行く時には子供たちに餌の与え方などを教えて出かけて行った。やがて陣地ができ上がり、校庭を去って行く時、カラスの子は生徒に引き継がれた。このカラスの子はカン太と名づけられ、すぐにみんなと友だちになった。やがて飛べるようになり、どこかへ出かけて行っても、生徒が声をそろえて「カン太」と呼ぶ

と、どこからか飛んで来て「カー」と鳴きながら、ちょこんと目の前に来る。

もつともカン太が大きくなるためには、たくさんの虫や肉類が必要なので、気味の悪い、ミミズをつかまえたり、カエルをつかまえたり、みんなが努力して愛情細やかに育てた。

また、谷中先生の指導で畑の草取りをしていると、カン太が目の前にやって来て草を引き抜くように引つ張ったり、また、みんなが大広間に机を並べて勉強をしていると、そこへやって来て、頭へとまったり、ジーツと見ていたり、やがてノートの上におけると、鉛筆をつまんでノートの上でしきりに首をひねったりもする。

「先生、やつぱりカラスは人の真似をするんですね。利口だなあ」「だけど困る事が一つあるのよね」「そうそう、僕もやられました」といふのはお便所がきまらないことだった。ノートの上であるうが、干してある蒲団であるうが、上衣であるうが、カン太の都合によるので、これにはみんな閉口した。台町の校舎が焼けた後、中学校、高等女学校が軽井沢へ行くことになり、疎開寮に一泊して、次の日、拜島駅から出発して行った。その日、カン太は少々落ち着かなかつ

た。知らない人がたくさんいたので警戒したのだろう。そしてその日の夕方、いくら呼んでも帰って来なかった。声もしなかった。みんな心配したが仕方がなかった。ところが、翌朝、寮の東側の太い桜の木の下で冷たくなって横たわっていた。子供たちが、いくら呼んでも「カー」の返事はかえってこなかった。谷中先生の話では、「傷の具合からみると、たぶんイタチでしょう」ということだった。

みんなは悲しがった。いつものように、「カー」といつてくれれば迎えに行つたのにと口惜しがりもした。

中学校、高等女学校の生徒を送り出した後、午後からカン太のお葬式をした。学園上の校庭の東南の端には、竹林と太い立派なケヤキが中心に生えていた。その林の中には、すばらしい岩がいくつも置かれ、さらに、その間にはきれいな丸い粒のそろつた砂利が敷きつめてあり、立派な枯山水が、大きな滝となって落ちる姿が形どられていた。その落ち口に大きく枝を張つたカラタチの木があった。花の頃には香りがあたりに広がり、その後は青い丸い実をよくつける木だった。そんな風情のある木の根元近くにカン太は埋葬された。眺めのいい場所だった。

さらに、みんなでカン太の紙芝居もつくつて吊つてあげた。カン太の墓には誰が供えるのか、長い間、楚々とした野の花が置かれていた。さよなら、カン太……。

戦争は末期の様相を呈す

五月に入り、欧州戦線ではヒトラーが自殺をし、ドイツの降服が報ぜられた。六月に入ると、東京近辺はしばらく夜間の空襲がなくなつて、昼間の艦載機の来襲が増加した。やがて沖縄守備の日本軍の全滅が報ぜられると、ますます戦況は厳しくなり、関係者のあせりを増した。それは当たり前のことだった。太平洋に向かつて日本列島はまる裸になり、台湾との間19も沖縄で分断されてしまつたのだから……。

ある夜のことだった。突然地面の底から突き上げてくるようなすごい振動があった。ドドドといふ重々しい音がするたびにガラス戸や障子や襖が、今にも碎けるのではないか、いや、しつかりした木の戸さえも壊れるのではないかと思われた。空襲警報もないのになんだらう。この音の響きでは艦砲射撃に違いない。きつと相模湾のどこかだろう。とうとう日本本土も艦砲にさらされるようになったのかなどと、暗いなかで先生方はいろいろ思いをめぐらし、一

晩中起きていた。子供たちは夜は危険のない限り起こさないで、この夜もぐっすり眠入っていた。

ラジオはいつもであればいち早く「東部軍管区情報」といつて何か情報を伝えてくれるのに、この日は全く別であった。頭上の空は、ただしんと無気味に静まり返っていた。そして、もう夜が明けようという頃に情報が入ってきた。やはり艦砲射撃を受けたのだった。場所はわれわれの想像とは全く違って、茨城県の日立であった。後で聞いたところでは、東京都内にいた人々は何も知らず、報道を聞きびつくりしたそうだった。

それは地層の關係で音や振動の伝わり方が違うためだということだった。

その後は、小型機の来襲回数はそう変わらないが、一度に飛来する数が多くなってきた。ある時、川で泳いでいると遠くにかすかな爆音がした。やがて、五日市線の鉄橋の遙か彼方の空を編隊で北へ向かう飛行機を見つけた。

さっそく水泳着のまま校庭を横ぎって帰寮した。みんなは、きちんと着替えて北泉寮の下の赤いじゅうたんの上に腹ばいになって外を見ていると、爆音と同時にザーっという音に変わり、編隊を解いた小型機が頭上を通り過ぎて行った。

校庭のがけに茂っている大きなケヤキの太い枝が台風に吹かれるようににサアアとおじぎをする。

全く、いつこの建物に機関砲や機銃を撃ち込まれてもおかしくない毎日だった。時には、飛び去りながら飛行機が射つ機銃の白い煙を見たこともあった。それには一瞬、「ああ！ やられた！」

と思わず口走ったほどであった。川原で機銃掃射を受ける人も出るようになった。また、ちよど川の向こう岸の滝山の懐に抱かれたようなお寺に疎開していた集団疎開寮が掃射を受けて燃え上がるのを目撃し、みんなで心を痛めたこともあった。小型機には本当に神経を遣った。縁側近くに出ることを禁じ、部屋の奥に入った。洗濯物も取り込んだ。時間はほんの一瞬であるが、不用意にしているとその一瞬が命とりになってしまうからだった。

小型機のコースは、富士山を目標にして本土に上陸、大月の上空から北上し、八高線に沿って現在の横田基地とそれに続くジョンソン基地となった陸軍航空審査部などの陸軍航空基地を攻撃して、帰りはわれわれの頭上をまっすぐにかけて抜けるというものであった。

子供たちはそれを聞いて、「富士山はかくせないものねえ、仕方が

ないわ」などといっていたこともあった。これから八月一〇日頃までは昼食の前後は小型機、夕方から夜にかけてはB二九というように空襲警報が出た。しかし、B二九が空襲する所はもう東京都内になどとみえ、機影がはつきり認められない位の高空を悠々と通過していった。私たちはホっとしたが、しかし、その行く先のどこかの都市が焼夷攻撃を受け、そして人々は炎の中を逃げまどい、さらに気の毒にも多くの命が失われていったのである。

たくましい子供たち

空襲は昼も夜も行われていたが、昼間は昼食前後が多かった。小型機の去った後に子供たちを外へ出して遊ばせた。啓明寮の庭は広く、木立が多いので、子供たちが自然を相手にいろいろな遊びを工夫し、かけ回るのにはまさにこれ以上の所はない環境である。

ところで、この頃、庭で楽しそうに遊ぶ子供たちは必ずかこかバケツなどを持ち出して遊んだ。それというのは、夕方、遊び終わって引きあげてくる時に、松かさ、杉の小枝など、かまどで燃やすのに必要なものを入れてくるためであった。そして寮舎に入る前に台所の外のたきつけを入れる所にあけてくる。しかも、これを自分たち

が自主的にやっているのだ。物のないなかで、自分たちに毎日食事を用意してくれ、心を砕いてくれる人への感謝の気持ちで、子供たちのこういう行為を生み出しているのだった。

お米のご飯などにはまずお目にかかることはない。いつもは、サツマイモ、ジャガイモ、大豆、大豆かす、高りやん、トウモロコシの粉で作ったパン、これらが主食であった。毎日、三度二度がサツマイモの時もあった。また、毎日が大豆かすの時もあった。しかし子供たちは文句ひとついわず、むしろ感謝の気持ちをもって食べていたのである。高りやんを炊くとまっ赤になる。子供たちはこれを「啓明お赤飯」といっておめでたいと喜んだりもした。トウモロコシのパンには、「パンパンで銃声」といって勇ましいと喜んだりもした。なんでも楽しく明るく考える子供たちのたくましさには、ただだいたいじらしく、涙のこぼれる思いをしたことが何度もあった。

谷中先生が二匹の雄雌のウサギを六六匹に増やし、そのなかから適当にわれわれの台所に肉として供してくれた。また、ヤギも飼った。ヤギが生まれると、活動的なヤギの子は子供たちのよい友だちとなった。午前中の勉強の時、

庭の池の写生をしていると、その背に子ヤギがひよいと乗ろうとしたりして大笑いになった。

このヤギの乳はよく出たので、ウサギの肉とともに大切な蛋白資源となった。学校の広いたんぼではたくさんさんのイナゴもとれた。

しかし、このイナゴのからあげや、金田愛子先生の故郷から送られて来た蚕のさなぎのお料理は、食べればおいしいのだが、最初はなかなか勇気が必要で、さすがの元氣な子供たちも目をつぶって、「エイっ」とばかりに食べる姿は、おかしくもあわれをさそったものだ。

この頃、一番欠乏していたのが野菜であった。サツマイモの葉や茎、カボチャの茎などは美味しい野菜であった。しかし、冬の最中にはこれらも食べ尽くした。ところがありがたいことに、冬の間はウオータークレスが採れた。

オランダガラシといわれる野菜だ。滝山の崖の下には冬は湯気がふわふわと漂う湧き水のきれいな川がある。そこにこのウオータークレスがたくさん茂っていた。このあたりの農村地帯では採って食する者はなかった。われわれの独占のようなものだった。五年の子供たちと先生方がじゃぶじゃぶと水に入る。何しろお正月

のまだ六日のことである。

水は冷たい。引き抜いてしまわなように気をつけながら伸びた茎を折る。白い細い根のぶら下がった茎に香りのよい葉が元気に茂っている。それを大きなかごに入れて。わずかな時間で足がまっ赤になるが、それでも多摩川の本流よりは、はるかに温かいのである。

これを油いためにしたり、みそ汁の実にしたり、時にはおひたしにする。これは、四十人位の寮生には十分で、採りきれないほどの量がその川から与えられたのであった。

早春になり、あたりに草の芽が伸びる頃になると、白沢頼子先生、神林美津子先生と私の三人は、朝四時に起き、うす暗いなかをリュックサックを背に滝山丘陵に向かう。歩いている間にだんだんと夜が明けてくる様子は本当に美しいものだ。そうして、それから一時間ほど山のなかを歩き回りながら、若い芽を伸ばし始めた野草をつみだす。これらの野草は、山ギボウシ、少々痛いアザミ、ノビル、野カンゾウ、ギンギン、ハコベ、ウシハコベにいたるまで、

毒草を除いて、すべてわれわれの不足する野菜の補いとして食膳に供された。白沢先生は、野草について深い知識をもたれていたの

で、われわれは安心して、数日おいて後に、また野草つみに出かけたのであった。

時にはほろ苦いみそ汁であつても、少々かたい野草でも、みんなはだまつて残すことなく食べた。少ない食べ物全部身体の中に取り込もうと思つて、よくかんで食べたのである。そんなこともあつて食事の時は、今とは多少違つてとても静かだった。

八王子が焼けた

八月二日夜半、空襲警報が狂つたように鳴つた。その時にはすでに頭の上には飛行機のうなりが渦を巻くように響いていた。

これはただならぬ。危ないと思ひ、その夜ばかりは子供たちを起こし、全員身仕度をしつかりとさせ、庭に造つてある防空壕にそれぞれグループに従つて退避させた。子供たちは空襲警報が発令されるやすばやく退避したのに、みんなが壕に入る頃には、もう滝山の向こうはまっ赤に燃えていた。

その焼ける明るさで映し出された大空には、小さく動き回る機影が不気味にキラリキラリと光つた。滝山はまっ黒な大きなシルエットで浮かび上がつていた。さらに、あの燃え上がる炎の下を必死に逃げまどつている人々がいる。

その気持ちはいかばかりだろうと思つと、胸のしめつけられる思いであつた。あとは、ただただ飛行機が去り、犠牲が少ないことを祈り続けた。本当に口惜しいなどというもおろか、なんとも名状しがたい気持ちであつた。

やがてどの位の時がたつたらうか。電気がつかなくなり、ラジオも沈黙してしまい、全く状況は分からない。今のうちに、便利なポータブルのラジオなどは民間人には、とても手に入らない時代であつた。

そのうちに時々バサつという妙な音があちこちでした。山の向こうは赤々と燃えているが、こちらは暗い。学校の校庭の木の枝にも何かがひっかかりながら落ちてくるようであつた。とにかく薄気味悪い。まさか焼夷弾の不発ではないだろう。そんなに重い感じの音ではなかつた。

そのうち頭上の機影も音もなくなくなり、山の向こうの空の明るさもやや薄くなつた。時折、何か爆発したのか、パアッと炎が高く上がり、そのなかに黄色味を帯びた火の粉がはらはらと舞つていた。

やがて、焼けるものを焼き尽くしたのか、空は次第に暗さが支配していった。今度もまた、あの炎の下で多くの尊い命が恐怖と苦痛のうちに失われていったことだろう。そう思つと寝ようとしても寝つかれず、そのまま朝になつたのだつた。

子供たちはいたつて元気だ。翌日、朝礼のために急いで外に飛び出した子供が叫んだ。

「先生、焼けた本が落ちていますよ」
「ここにもある」
「先生、教科書もある」
タベバサつバサつと落ちてきた物の正体はこれであつた。寮舎の前の芝生の上にはいろいろのものが落ちていた。なかでも多かったのが、大福帳の焼け残つたものだった。日本の商家には昔からどこでも使われた大福帳。このあたりにも、歴史のある商都八王子の姿を垣間見る思いであつた。その焼け残りはどれも達筆な筆跡で金銭の出納が書かれてあつた。

この朝、もう一つみんなをびつくりさせたものがあつた。

滝山の山の背にずっと続いていた樹木が全部赤茶けた色に変わつていたのである。八王子の街を焼いた炎の熱のためだったのだろうか。

戦争末期におけるアメリカ軍の焼夷弾攻撃は、市民の大量殺戮にあつたという。それは山の迫つた地方の中小都市が多かつた。とい

うのも、町を取り囲む山に油脂焼夷弾を落として逃げ場を断ち、次第に町の中心部を焼いていくからいからであつた。滝山の山の背の緑の木々は、あるいはまっ先に炎を浴びたのかもしれない。

八王子が空襲された後、しばらくは電灯がつかなくなつた。しかし、こういう薄暗い生活には、もう慣れていく。空襲警報が出れば夜はいつもまっ暗であつた。そんななかでも誰一人柱にぶつかつたり階段から落ちるものはなかつた。

どこの階段は何段あるかを全部覚えていたし、廊下の曲がり角や柱はそれぞれの歩数で見当がついていたので。集団疎開の寮生活では、21

電気がこないばかりか水も出なかつた。深い井戸から汲み上げるポンプが止まつてしまうからだ。

そこで炊事もお風呂も校地内に三カ所あつた井戸から水を汲んでバケツで運んだ。台所には大きなかめが置いてあり、さらにおなべでもなんでも水の入る大きな器には全部水を汲んでおいた。

夏のことなので、お風呂は天気の良い日の夕方、多摩川へ出かけた。水着をつけて川の中でごしごし、最後は泳いで仕上げるといふ具合である。多摩川の水はきれいだった。胸くらいまである所でも足の先にあるいろいろな色の小石をつ

て、われわれは安心して、数日おいて後に、また野草つみに出かけたのであった。

時にはほろ苦いみそ汁であつても、少々かたい野草でも、みんなはだまつて残すことなく食べた。少ない食べ物全部身体の中に取り込もうと思つて、よくかんで食べたのである。そんなこともあつて食事の時は、今とは多少違つてとても静かだった。

八王子が焼けた

八月二日夜半、空襲警報が狂つたように鳴つた。その時にはすでに頭の上には飛行機のうなりが渦を巻くように響いていた。

これはただならぬ。危ないと思ひ、その夜ばかりは子供たちを起こし、全員身仕度をしつかりとさせ、庭に造つてある防空壕にそれぞれグループに従つて退避させた。子供たちは空襲警報が発令されるやすばやく退避したのに、みんなが壕に入る頃には、もう滝山の向こうはまっ赤に燃えていた。

その焼ける明るさで映し出された大空には、小さく動き回る機影が不気味にキラリキラリと光つた。滝山はまっ黒な大きなシルエットで浮かび上がつていた。さらに、あの燃え上がる炎の下を必死に逃げまどつている人々がいる。

その気持ちはいかばかりだろうと思つと、胸のしめつけられる思いであつた。あとは、ただただ飛行機が去り、犠牲が少ないことを祈り続けた。本当に口惜しいなどというもおろか、なんとも名状しがたい気持ちであつた。

やがてどの位の時がたつたらうか。電気がつかなくなり、ラジオも沈黙してしまい、全く状況は分からない。今のうちに、便利なポータブルのラジオなどは民間人には、とても手に入らない時代であつた。

そのうちに時々バサつという妙な音があちこちでした。山の向こうは赤々と燃えているが、こちらは暗い。学校の校庭の木の枝にも何かがひっかかりながら落ちてくるようであつた。とにかく薄気味悪い。まさか焼夷弾の不発ではないだろう。そんなに重い感じの音ではなかつた。

そのうち頭上の機影も音もなくなくなり、山の向こうの空の明るさもやや薄くなつた。時折、何か爆発したのか、パアッと炎が高く上がり、そのなかに黄色味を帯びた火の粉がはらはらと舞つていた。

まみ上げて拾えるほど澄んでいた。一番大変だったのはお手洗いが水洗であるということだった。

そのため、外に出てポンプ室の脇にあったお手洗いを使わねばならない。昼はともかく、暗い夜はきつとみんな苦労をしたと思う。夜中におきる子供は、二階からトン

トンとおりてきて、廊下をたつたつと小走りに走り、大玄関の脇の玄関から外へ出て、暗い道を用を足しにゆく。その頃は小学校一年生もいたのだから、大変な生活であった。

当時は、外交官にしても、銀行や商社にしても、外国に勤務する人々は、やはり相当に経済的余裕のある人だと聞いていた。

何不自由なく育った子供たちが、田植え、畑仕事の労働をし、霜柱のばりばりする芝生を素足で走ったり、そのうえ、とても人間の食事とはいえないような、ふすまや大豆かすを食べたり、さらに、暗い外のお手洗いを使ったりと、大変であった。しかし、誰一人不平をいつたりする者はなかった。

今、この戦いのなかでは日本人みんながどんなつらいことも忍ばねばならない、なにも自分たちだけではない、という気持ちがある。今考えたのかもしれない。

今考えれば、まさにどん底のよ

うな生活のなかであったが、子供たちの大きい者は小さい者の世話をし、小さい者は大きい者を信頼していたのである。何もなし生活のなかでも子供たちの心はひろやかで豊かであったことを、私は今もって何ものにも変えがたい貴重な教育であったと考えている。

新型爆弾搭載機が

東京方面へ？

それは八月五日のことであった。材料を工夫し、苦心して作ってもらった夕食を心から感謝していただいた。その後は、子供たちが寝る時間までのしばらくの間は、のんびりと楽しい時間である。日記を書く者、童話の本を読む者、先生方の膝に乗っかりおしゃべりする者、それぞれの時間を過ごすのだった。私は食後のひと休みを寮務室で、誰かのズボンの破れを繕っていた。向かい側には机をへだてて菅野先生が腰かけ、その膝の上に乗った子供、肩に寄りかかる子供たちとにこにこ話をしていた。この光景は、今でもはつきりと記憶している。

そのうち私の膝の上を奪い合う子供で、もう繕い物どころではなくなった。私の後には、電話室があり、寮務室からも、廊下の方からも出入りできるようになっていた。

「そんななごやかな夕食のひとつきであった。あたりの静寂を破って電話が鳴った。一番近い私か子供たちに、ちよつと待ってね、電話だからね」といって電話に出た。

「〇〇少佐殿をお願いします」とのことであった。当時、台所の上の一面は軍隊に借り上げられて、軍人が何人か住んでいた。

私が階段の下から、
「〇〇少佐殿、電話です」と呼ぶと、

「少佐殿はまだ帰っておられませんか」と返事が返ってきた。そこで電話室に戻り、そのことを伝えると、電話の向こうでは何か打ち合わせをしているようだった。

やがて、私の身分を聞いて確かめ、名前も確かめられた。そして、また何か打ち合わせをしているようだったが、少佐が帰ったらすぐに伝えてほしいとのことだった。その伝言とは、

「今夕午後六時頃、B二九救機が硫黄島上空を通過して北上、東京方面に向かった。敵機には新兵器が搭載されているもよう」というのであった。そして、これは少佐以外のものには決して話してはいけないと釘をさされた。

これは大変なことになったと思いい、早く少佐が帰ってきてくれればよいのだがと願っていた。

この間、重苦しい時間が流れた。やがて少佐が帰ってきたので電話の話を報告すると、急に緊張した顔色となり、「ちよつと電話を」といつて電話室に入った。低い声でかなり長い間話をしていたが、終わると珍しく寮務室のほうへ出てきた。そして、「ちよつと話しておきたいことがあるのですが」とのことだった。子供たちはちよつと八時の就寝時間も近いのでその用意をすることにして寮務室を出た。

少佐は、大切な子供たちを護っている先生方から特別に話しますが、他にももらってもらっては絶対に困る、と前向きをして話し始めた。

「今夕午後六時頃、硫黄島上空を東京方面に向かう米軍機救機を発見したが、その爆撃機には新型爆弾が積まれているもようです。その新型爆弾というのは、今までものとは違つてもすごい光と熱を出すので、もし今夜空襲警報が出たら、子供を起こし、必ず防空壕に入れてください。

その際にはできるだけ厚着をし、決して皮膚が出ていないようにすること。なお、その上からシートでもなんでもよいから白いものを頭からかぶるようにしてください。とにかく大変な熱を出しますから、

防空壕に入ったら入り口は必ず閉めてください」というものであった。この頃になると警戒警報は出さばなし、サイレンが鳴れば空襲警報であるというような状況であったので、サイレンが鳴るとすぐにおこななければならなかった。

どの位時間が過ぎただろう。また、少佐を呼んでほしいとの軍用電話が入った。少佐があわただしく電話室に入り、しばらく話をしていたが、電話室を出るとわれわれに対して、

「今の電話によると、さきの敵機救機は関西方面に向かったので東京方面は一応心配はなくなったよ22うです」と告げた。

われわれもやれやれと胸をなでおろした。しかし、すごい熱量を出す新型爆弾とはどんなものか。今まで私たちは、やれ「黄燐焼夷弾」だとか「油脂焼夷弾」だとか、「モロゾフのパンかご」と呼ばれるものとか、とにかく空から降つてくるこれらのものは身をもって覚えてしまつていた。

しかし新型爆弾とは何か、とひそひそと話し合ったその夜は珍しく空襲警報は発令されず静かな夜となった。

八月六日広島が爆撃された。しかも、こともあろうに、あの新型

爆弾であることを報道で知った時、私たちは思わず顔を見合わせ息をのんだ。昨夕のあの緊迫した電話のやりとり、そして少佐の教えてくれた対処の仕方など……、今にして思えば、いくらシートをかぶっても、厚着をしても役に立つはずもなかったわけだが、それにしても新爆弾の正体をあらかじめある程度はつかんでいたように思う。

硫黄島上空を通過して北上するまではキャッチしていたのに、広島上空で炸裂するまでどんなコースを飛んでいたのだろうか。

日本の防空部隊の必死の追跡をどうかわしたのだろうか。

いつものような大編隊でないため油断があったのだろうか。いや、もしかしたらあの電話も少佐の注意も、すべて私どもの頭のなかに描いた幻だったのだろうか。

私は、広島原爆を思う時、いつも被災された人たちになにかうしろめたいような思いが、ふと心をよぎるのである。もしかしたら、私の頭上に襲いかかるはずであったかもしれない恐ろしい不幸が、どんな理由で広島の人たちの上にふりかかってしまったのだろうかという思いがある。

今まで、この新型爆弾搭載機の話は何人かの人に簡単に話したこととはあるが、文章にしたことはな

い。なぜか月日をへるに従い鮮明さを増す、この幻かうつつか定かではないできごとを詳しく記しておきたい、いや記録していかねばならないという気になり、啓明学園の歴史のなかの小さなエピソードを加えさせていただいた次第である(同窓会日より「啓明」より転載)。

戦い終わり夕日の多摩川

六日に広島、九日には長崎に新型爆弾が投下されたことを知ったところが、その恐怖も覚めやらぬ八月一二日の夜だった。疎開寮の周囲は急に慌ただしい空気に包まれた。それというのも、村の人の話では、一二日夜半に、青梅から立川までの青梅線沿線の各地が爆撃されるというものだった。

どこから流れた情報だかは分からない。しかし、われわれはその情報を信じて覚悟をしたものだった。広島や長崎の実情について詳しくは分からないが、相当に大きな被害らしい。それに少佐殿が教えてくれた新型爆弾の情報では、たとえ逃げたとしても、どうにもならないということであった。

そんなことで、これはもう仕方がないと覚悟したものだ。

その夜は、ひっそりとした静かな夜だったが、多摩川の土手や村のなかの道を、ガラガラガラと荷

物を運んでいく大八車の音が一日の明け方まで続いていた。

一四日の夜、東京女子大学に行っている私の妹が寮務室の入り口の扉を細く開けて、

「あのう、明日正午、重大発表がラジオであるそうです。今日学校で聞きましたので、ちょっとお知らせします」と言った。

「菅野先生、何でしょうねえ。日本本土決戦の布告かな」

とは言ってみたが、そんなことではないような気が私の胸のどこかにあった。

翌一日正午。子供たちもラジオの前に座った。一年生も神妙に正座した。そうして、正午の時報に続き玉音(天皇の声)が流れた。

それは、日本が無条件降伏に踏み切ったことを伝えるものだった。小学生には少々難しい言葉ではあったが、六年生や五年生には大抵の意味は分かったようで、男子は歯をくいしばり、女子は涙を流していた。一瞬何ともいえない静けさがあたりを包んだ。

その日の夕方、拝島の空はよく晴れて夕焼けが美しくあたりを輝かせていた。多摩川の流れる夕焼けを映してきらきら光りながら、遠く夕もやのなかに消えていった。目の前の滝山丘陵の緑は黒く濃い夏の色をまだ残していた。川原に

立つてぐるりと周囲を見回した時、国破在山河、城春深草木唐の詩人杜甫の「春望」の詩の最初の句が、思わず私の頭に浮かんだ。明日からはこの日本はいつたいどうなるのか。敗戦国の日本の後始末はどうなるのだろうか。まったく分からない。しかし、「国破在山河、城春深草木」というその時の心境は、何かほっとするものだった。もちろん敗戦だから手放して喜んだわけではない。しかし、何とも静かな、ほっとした気持ちの底から自然とわき出るのは正直なところであった。

今夜は何カ月ぶりかで「ねまき」に着替えて眠れる。電気も明るく輝くだろう。それだけでも、何か両肩にどっしりと乗った重しとれたように思えたのだ。

部隊長と子供たち

ガラスのカン太以来、晴部隊長と子供たちの交流は続いた。部隊長は二、三人の若い兵隊を連れて、われわれの夕食が終わった七時頃にやってくる。連れてくる若い兵隊も時々人が代わっている。部隊長はまるで自分の息子のようになり、われわれに紹介してくれる。そして、来る時には必ず、当時としては病人や赤ちゃん以外ではなかなか民間では手に入らない新鮮な牛

乳を大きなびんに入れて持ってくる。そして、必ず、

「大事な次の国民であるお子さんたちに」というのだった。田の中で稲を傷めないようにしてつかまえる「イナゴ」が子供たちの貴重な蛋白資源という時代である。ほとんど毎晩運ばれてくる牛乳は本当にありがたかった。そして、不思議なことに部隊長が楽しそうにおしゃべりしている間は警報が出ない。

「ではそろそろおいとまするかな」といつて部下を促して帰り、陣地に着いた頃に警報が出るのである。

八月二〇日頃だったか、もう夏の夜もとつぷりと暮れた八時頃、寮務室の前の庭が急に賑やかになり、大きな荷車が数台やってきた。何事かと出てみると晴部隊の兵隊だった。部隊長からのことづてでということだ。文房具を運んでくれたのである。

陸軍野紙と呼ばれるものから中型の野紙その他の用紙類、そしてペン軸、ペン先、筆などで、こういうものは、どうせ米軍にさし出しでも屑の山になってしまいうので、学校では必需品であるからということであった。これは大助かりであった。学習するノートさえもない時代である。子供たちは習字を好んでするが、墨はおろか墨汁も

ない時代である。

それが朱墨も何本もある、墨汁もインクもあつた。この時から何年間このいただきもので助かったとか。子供たちのノートも日記帳も小学校の名簿も、みな陸軍野紙であつた。陸軍というところを墨で塗つてはあつたが。

このことがあつてから間もなく、寮にいる生徒も先生も全部陣地まで来てほしいという伝令がやつてきた。何事かと思つて、いわれた時間に陣地へ着くように出かけた。陣地は拝島駅のそばで、今の山茶屋のある所だから近かつた。

陣地へ着くと部隊長がみんなの前に立つた。少し疲れているように見えたが、いつものようにここにこして、「今日はみんなにぜひ見ておいてほしいと思うものがある

ので、しつかり見ておいてほしい。日本は戦争に負けた。しかし、これから見てもらうものは決して世界に負けない機械だ。よく見ておいてください」と

と言つと、兵隊たちがすぐに陣地のなかに集められたたくさんの機器の所に案内してくれた。それらは一度梱包したものをわざわざ解いたものようだった。子供たちは部隊長の言葉になにか強いものを感じたようで、一生懸命に説明を聞いていた。対空望遠

鏡などは肉眼ではなにも見えない滝山の上空を二、三機の飛行機が飛んでいるのははっきりと見えた。もう連合軍が入つてきていた頃だから、たぶん厚木の米軍機だったのだろう。

あちこちで子供たちの歓声があがつている。その頃としては初めて見るレーダーもあつた。「こんなによいがあるのに、どうしてB二九を撃墜しなかつたの？」

「うーん、もう弾がなかつたんだ、残念ながら」「そうか、じゃあ負けても仕方がないなあ」などという会話も聞こえていた。並べてある光学機械やレーダーを見て、「どうして？」

という子供たちの素朴な疑問は無理もなかつた。また、もう間もなく八月も終わろうとする頃、一人の兵隊が寮に現れた。彼は、部隊長が陣地を引き渡して去るに当たり、子どもさんとの約束を果たしたいから、多摩川の土手までみんなに来てほしいということづてをもつてきた。

さつそく行つてみると、部隊長が馬に乗つて土手の上にその雄姿を見せていた。部隊長は集団疎開寮を訪ねてこられた時に、子供たち

から、部隊長の馬に乗せてほしいといわれ、それではいつか乗せてあげる、と約束をしていたという。しかし、なかなかその都合がつかなかつたが、今、この地を去るに当たつて、その約束を果たしたいというのであつた。

一人ひとり順番に部隊長の馬に乗せてもらい、兵隊に手綱を引いてもらつて得意顔で土手の上を馬にまたがって行く子供の姿を追う部隊長の脳裏には、故郷静岡に残してきた家族の姿が重なつていたのかもしれない。

午後の日も傾き、夕暮のせまる頃までそれは続いた。やがて全員乗せてもらい、みんなの感謝の言葉を背にして、馬上の部隊長は一人の兵を従え、長い影を引いて帰つて行つた。

子供たちがそこに見たのは日本陸軍少佐殿の最後の姿であつた。日本は以後軍隊をもつことを永久にやめたのだから……。

授業再開と食糧不足

長い戦いが終わり、集団疎開は解散となり、子供たちはそれぞれの親のもとに帰つていった。

なかには、シベリアへ連行されたと思われる外交官の子息たちもいて、その二人は親戚の人の家に帰つていった。

また、敗戦を知つてからは、「うちの親は戦犯として捕えられらるだろう」

と、けろりと言つてのけた少年もいたが、その心の内はいかばかりであつたのだろうか。

また、この頃、文部省より日本全国の学校に対し、「直ちに授業を再開せよ」との通達がきた。そこで、啓明学園は、赤坂の校地は空襲で校舎が焼け落ちたので、拝島の校地と建物を生かして、戦後の混乱のなか授業を再開した。

集団疎開に来ていた児童はほとんど全員が集まつた。さらに、中学校、高等女学校の生徒を加えて五〇名ほどで授業を再開したのである。児童・生徒の大部分は寮に入つたが、なかには鎌倉から片道三時間もかけて通学してくる人もあつた。そのうえ、交通機関の状態も良くなかつた。

車輦は少ないうえに、まともに窓のあるものがないほどひどいものであつた。そればかりか、窓ガラスが一枚もなく、雨風を防ぐために板をぶつけてあるだけのものもあつた。

一方、寮の生活で大変なのは、やはり食糧の確保であつた。戦争中は乏しくはあつたが、それでもなんとかあつた。

さていたのである。しかし、戦争後のしばらくは全国的に食糧事情は非常に悪かつた。

何しろ、一カ月分の主食の配給として大型のベーコンの缶詰が配給されるだけという始末である。GHQの計算によれば、カロリーはこれで問題はないはずであるといふことだつた。そもそも日本人の感覚では、ベーコンというものは、それとともに料理する野菜や穀物があつて初めて生きるものであり、ベーコンそれだけではどうにもならない。こういう行き違ひがいろいろな面にあつた。

たとえば、戦時中のアメリカ軍の捕虜の話であるが、日本人の虐待はひどいものであるといふのがあつた。つまり、日本人は捕虜に材木を食べさせるというのである。

材木というのは、日本の伝統食である「きんぴらごぼう」のことであつた。日本人にとってはおいしいものでも外国人にとっては材木なのだ。こうした食文化の面のみならず、日本と西洋ではいろいろな面でギャップが存在し、それが摩擦を引き起こしたものである。

また、日本軍の隠匿物資をお世話話いただいたこともあるが、「天ぷら油」が実は「ひまし油」であつたこともあつた。当時は「ひまし油」は子供たちの下剤として使

ついていたものである。
この頃は、食糧不足や長距離通学などのため、月、火、木、金と週四日制の授業であった。

混沌の時代GHQの

統制下で 昭和二年

教材不足のなかで授業再開

昭和二〇（一九四五）年九月、降伏文書の調印が終わり、連合国軍が占領軍として日本全土を支配した。そんなことで、この年は総司令部からは矢継ぎ早に命令が出された。

一月に入り、GHQは修身、日本歴史および地理の授業の停止と教科書の回収を通過してきた。そのため、学校にあるこれら教科書に関する掛図は全部焼却するように命ぜられた。

しかも、これらに関してはいささかのミスも許されなかった。少しでも怪しいとなると占領政策に従わないものとして直ちに処罰されたのである。日本中の教師の過去（学生時代を含め）の言動、文書などが微に入り細を穿って調べ上げられた。

また、使用する教科書は問題となるところに墨を塗ることが通達された。

同じく一月、GHQは農地改

革に関する覚え書を出す。この時これが啓明学園に大きな影響をもたらそうとは思ってもいなかった。こうして激動のなかに放り込まれた人々は、昨日までの日本的事物とは全く異なる新しい価値観に、いったい何を信じ、また何が正しいのか、自分の立つところを知らず、まるで羅針盤を持たないで太平洋に出るにも似て、ただただ混乱していた。今は占領軍の価値観を正しいとして従うよりほかはなかった。

一月には、マッカーサーはGHQ民政局に対して日本憲法の草案を作成するように指示している。三月には、混乱の世相のなかでも、学校ではめでたく卒業式が行われた。久々に、普通の服装で行った卒業式だった。女の先生方は戦時中の服装を脱ぎ捨て、疎開先においてあった

着物などを着て、平和のもどった話をした。粉雪のふる寒い日であったが、みんなの心のなかには一筋の光が差し込んでいた。四月になり、学校は新しい学年を迎えたが、食糧事情はますます悪く、一度配給があつても次はいつになるか分からず、学生のうち寮生が大部分であつたこの頃は、始業式も配給があり次第行つたこと、その月の下旬になつたりした。

啓明学園では、昭和一七（一九四二）年以後、戦時中は帰国してくる子どももなくなり、在学していた

子どもも、あるいは卒業し、あるいは全く日本式の学校生活に入つてしまった。外国で生活し、日本語と日本文化についてはふれることの少なかった、いわば、そういう面での特殊教育の必要性はだんだんなくなつていった。しかし、その教育のために工夫された少人数制のクラス編成による個別指導という、各自の力に応じて学習を進めるといふ授業の方法は受け継がれていた。

ところが、この頃ほとんど学習意欲的に進める子供には、教科書が追いつかなかつた。用紙がない、印刷が間に合わないというところで、そのため教科書を一冊きちんと作ることができず何回も分冊になつてくる。しかも、国語などは途中で切れて、その先は次の分冊にとりかかるといふのが、なんとも無神経きわまりないものだった。しかし、敗戦国であり、占領されている側としてはどうすることもできない。早く進む子供には復習をさせてみたり、国語では、疎開をしていた時に寄付をしていただいた世界名作童話を始め、いろいろの本を教材として用い、分冊の間をつなぐという始末だった。

紙類は晴部隊長の好意の贈り物により、あまり不自由はなかつた。もちろんノートなどは手に入らないので、陸軍野紙を二つ折りにして、女の先生方の手作りの簡易和とじノートである。たてにつかえ

ば国語用、横に使える算術用となつた。

試練一農地改革と校地の

問題に奔走

GHQの命令による農地改革政策に基づいて一月二二日「農地調整法」、「自作農創設特別措置法」が公布された。

現在の校地は昭和一八年から中学校（旧制）を置き、全寮制で授業を行つていた。当然もとの持ち主である三井家から学校に寄付さ

れて啓明学園の校地として正式の登録がなされていた。それにもかかわらず、当時の村の農地委員会は、学校に農地は必要なしと叫ぶ人々に揺さぶりをかけられ、学校に対して土地の解放を迫つてきた。現在の校地を守るため、啓明学園の忍耐強く長い努力がここから始まる。現校地の運動場になつてい

る所は、当時は確かに田や畑であった。そこで学校には田や畑はほらないというところで迫つてきたのである。しかし、当時は、学校を新設する場合、運動場は一人何平方メートルと決められていたので、それを標準に計算すると、少人数といえども少し不足するくらいであった。また当時は田や畑であつた所もやがては運動場や野球場にする計画があつた。

そこで、大きな校地の地図の上

に、運動場の縮図や野球場、テニスコートの縮図を切り抜いて貼り付けるという作業が続いた。

現在のように便利な機器があるわけではなく、縮尺を計算し、正確に作つていくのだから、時間がかかる。そういう具体的な数字的なものを用意する一方で、一番力を入れたのは、なんとかして啓明の教育というものを理解してもらおうとする努力であつた。

菅野先生を始め、先生方や保護者の人々が手分けをして、東京都の農地委員を訪ねては話をして回つた。今のような交通網はなく、三〇分、四〇分おきの電車を乗り継いだり、自転車で幾つもの峠を越えたりしては回つた。

食べ物も極端に少ない時代、おにぎりはまだいい方で、いもを食べながらの奮戦であつた。故人となられた折戸先生のお伴をして、私は日野、八王子、聖蹟桜ヶ丘と南多摩方面を回つた。バラックばかりが並ぶ八王子の市街を眺めながら浅川の土手でお弁当を食べた。南武線と京王線の乗り換え時には、高い京王線のプラットホームで身を切るような冷たい風にさらされながら一時間近く電車を待たつたこともあつた。

こうした悪条件のなかで、時にはくじけそうになつたこともあつ

た。しかし、くじけなかったのは、学校の土地を守らなければ新しい時代に向けて啓明の志す教育ができなくなるといふ気持ちが強くあったからだろう。

そんななかで、私にとつて忘れられないのできないうれしい出会いがあった。折戸先生のお伴をして日野在住の都の農地委員をお訪ねした時のことだった。

中央線日野駅からそう遠くない所に東京都の農地委員渡辺年氏をお訪ねすることになった。渡辺年：

「私か小学校六年間を過ごした学校の校長先生と同名同名である。その自宅に着き、玄関で来意を告げ待っていた。

折戸先生は名刺をお出しになったが、私はまだそんな身分ではないので名刺は持っていない。そこで画用紙を名刺ぐらいに切つて名前を書いたのを持っていた。しばらくすると、和服姿の老紳士が現れて、「本間さん、あなた台町小学校にいませんでしたか」

「やはり、先生でいらつしやいましたか」

「平安子というこの名前は忘れていませんよ」

さつた。粉雪がちらつく寒い日だったが、心の中にはほのぼのと温かいものが流れた。

昭和六年三月に台町小学校を卒業して以来、一五年ぶりの恩師との再開であった。空襲と破壊の連続のなかでよくも命のあったものだ。

この時の再開の喜びは、平時ではとても想像のつかない大きなものだった。こうした学校の確保のための努力は長く続けられ、決着をみたのは昭和二十七年になってからであった。

東京都の会議で啓明学園の創立について質問があつた時、三井高維先生が説明に立たれ、お話をしたところ、非常に多くの人々が感銘してくれた。

なかには、大島から出ている委員であるが、自分は主義としては違うが、学校は大切だから啓明学園が成り立つように学校の土地は認めた方がいいのではないかという意見を出してくれた人もいた。後ほど人に聞いてみたところ、その委員は共産党の委員であるということだった。

設立者三井先生の啓明学園の教育に対する情熱がイデオロギーを越えて、大きな感銘を引き起こしたといえるものであった。

物不足のなかでの

教育的試練

昭和二〇年一月、GHQは日本の一五財閥の資産を凍結し、二年九月末には三井本社、三菱本社、安田保善社に対し解散を命じた。創立以来大きな後ろ盾となり、年間、今の金額にすれば五千万円に相当するような経済的バックアップをしてきていた三井本社の解体は、少人数制をもって教育を行おうとしている学園にとつては致命的な打撃であった。

東京とその周辺はことごとく破壊され、経済も崩壊したなかで、児童・生徒の親たちのなかには、生活の基盤をなくし、地方の実家を頼つて散つていくものもあつた。着るもの、住む所にさえもなかなか手が回らない。

生きるために食べるのが一番優先される時代に、子供のために授業料を払つて、しかも私立学校に学ばせることなどはとんでもないことであり、ほとんどの人にその余裕はなかつた時代である。

昭和一八年からしばらくの間、中学校(旧制)では拜島で全寮制の授業を行つていた。この期間が短かつたこともあり、また人数もごく少なかつたので、机や椅子がたくさんはなかつた。ただ体育の用品だけはかなりのものがあつた。

新学制の中学校を開設するには、その規準を満たすだけの設備が必要だつたからである。しかし、これらの体育用品を入れた小屋が一夜のうちに壊されて、板壁は全部持ち去られて、そのうえ、中にあ

る飛び箱は上の布の部分が切り取られ、持ち去られた。ずいぶん注意はしているのだが、ちよつとのすきにやられてしまう。校地内にあつた数寄屋造りの小さな建物も幾夜かたつうちに、あとかたもなくなくなつてしまつた。

これらはすべて燃料として持ち去られたものであつた。何しろ国電のシートも切り取られてしまうと

いう時代であつたのだ。窓ガラスが割れても繕うものもなく、板がぶつてあつた。

しかし、教育活動は、机がなくともおなががすいても続けられた。雨戸を外して箱に乗せ、机ができた。子供たちは板の間に座つての勉強である。誰も文句はいわない。ただ黙々と自分のやるべき学習を進めている。そして、休み時間には広い校地を思いきり走り回るといふふうに、子供たちの学校生活はたくましく明るいものだった。

その間に三万坪を超える広い校地内に亭々と聳える杉の大木や、太いケヤキの木は姿を消していった。

立派な三井邸の庭の各所に置かれたすばらしい庭石も、幾つかがこの学校の教育を続行するための資金となつて消えていった。

話は変わるが、先生方の給料も、いつてみればある時払いの催促なのである。その額も一カ月分の半分だつたり三分の一だつたり。

しかも、確実に来月ももらえないは限らない。全くあてがない状況である。そんななかでも子供たちを教えなければならぬ。次から次へといろいろな教育改革をうち出してくるGHQの通達

はこなしていかなければならなかつた。また、この時代は、どんなに多額の貯蓄をしていても凍結されて、全国民一律に一人一カ月三〇〇円しか引き出すことができない時代であつた。田畑を持たないわれわれは、もっぱら野草を摘んで食べた。助かったことに、広い校地にはさまざまの野草があつた。

日本中が貧しく、毎日生き抜くことで精いっぱい時代であつた。啓明学園においても、吹き荒れる経済変動のなかで、どうにか運営のめどがついたのは昭和二六年の頃であつた。

追悼会

一月に入ると、長岡延子さん、相良よしえさんの二人の追悼会が

若葉会のホールを借りて開かれた。長岡さんは音楽家のレオーシロタに直接指導をうけた何人かの弟子の一人だった。

演奏家を志し、女学校を中退した。そして、それからいくらかもたまたまうちに防空壕の中で母親とともに非運の最期を遂げたのである。大切な楽譜をしつかりと胸に抱いていたという。集まったみんなの胸には、学校に別れを告げる日のピアノに向かっていた長岡さんの姿がよみがえっていた。

また、東京から疎開で故郷へ帰った相良さんは、八月八日の朝、転校した長崎県の活水女学院に元気に出かけたという。しかしこの日、相良さんは学校へ行く前に祖母父母を訪ねるといって、いつもと違った道順で出かけた。そうしてついに再び帰ってはこなかった。その後も消息は不明のままなのである。

この追悼会にはたくさんの卒業生と先生方が集まった。そして、久々に再会した時にまず口をついて出た言葉は、

「生きてお会いできましたねえ」

「本当に……」

であった。生きていくということ、こんなにもすばらしいことなのだということが掛け値なしに胸をうつ時代なのであった。われわ

れをとりまく状況はといえば、住むに家はなく、食べるに食糧もなく、病になっても十分な手当てもできず、薬もない。電車に乗れば身動きもできないなかで、目の前の人の肩にはシラミが二、三匹這っているという具合である。

そのうえ、駅を降りれば米軍兵士にDDTを頭からまっ白になるほどふりかけられる。そういう時代であったからこそ、生きることの尊さ、意味が分かり合えたのかもされない。

揺れる教育現場で

昭和二年

男女共学の新学制のもとで

昭和二年は吉田首相が年頭の辞のなかで、労働運動指導者を不逞の輩」と非難する騒ぎで明けた。

GHQは日本占領とともに、これまで非合法の名のもとに、大

びらに活動もできず、刑に服したり隠れたりしていた共産党員や社会主義者たちを解放したので、これらの人々も大手をふって闊歩できるようになった。価値観の混乱

と、貧困と飢餓のなかで、労働組合の結成・成長にはまことに目ざ

ましいものがあつた。

一月一八日には、全官公庁労組共闘委員会は二月一日を期して無期

限のゼネストに突入するとの声明を出した。厳しい寒さのなかで体を温める術もなく、栄養失調の身には一段と寒さはこたえた。このゼネスト声明に、どうなることかと息をのむ思いであつた。しかし、一月三二日の夜、ゼネスト決行直前になり、GHQはこのストライキに中止の命令を下したのであつた。二月に入ると間もなく、文部省は新学制の実施方針を発表した。

小・中学校はこの年四月から、高等学校は翌年（昭和二三）から、大学は二四年から新学制が実施されることになつた。

この年は一年間にわたり『教育基本法』『学校教育法』を始めとして『児童福祉法』『刑法』『民法』『戸籍法』『警察法』など、あらゆる方面の法律の制定、改正が行われた。

四月一日には新学制による小学校・中学校が発足した。六・三制の学制の出発であつた。しかし国家予算は貧しく、地方財政もきわめて難しい状態にあり、中学校校舎の建設は全くはかどらなかつた。学校教育に携わる者にとっては厳しい年であつた。

新しい学校制度の研究会が連日のように行われた。自由意思で出て

も出なくてもよいというようなの

ん気なものではない。

学制の改革も占領軍の命令なのである。しかも、日本が学校制度を布いてから初めてぶつかったといつてもいい大変革であつた。

六・三・三・四という現在の制度はアメリカで行われていたものだ。日本の制度は六・五（四・三・三）であつた。そして専門学校制があり、六・五（四・四）であつた女子の場合、昭和一四年までは男子と全く同じに教育を受けられたのは小学校六年までの義務教育期間だけであつた。

その後は教科書も違い、教科も違つていた。そして旧制の高等学校、大学は女子に門戸を閉ざしていた。東京では明治大学法学部が女子に門戸を開いていた唯一の大学であつた。昭和一五年四月から早稲田大学、慶応大学が、専門学校を卒業した女子に限り正式に入学を認めるようになった。官立（今の国立）では東北帝国大学、京都帝国大学が、男子学生数にもよつたが聴講生として許可をする場合があつた。

こうして、学校制度が全部変わったのである。小学校から大学まですべて男女共学が許され、男女がともに同じ教科書で学ぶようになったのである。

各教科の学習のあり方、指導要

領などについて連日のように会議

が開かれた。啓明学園は当

時、初等学校、中学校（新制）、高等学校（新制）があつたが、先生はほんの少数である。そこで一人でも何教科も担当しなければならず、そのために講習を受けなければならなかつた。

この年、私が授業を行ったのは一月から三月までの間で二週間にも満たないものだったように記憶している。菅野先生の場合は、その責任上ほとんど学校にいるひまもないというありさまであつた。

さらに問題なのは、六年であつた義務教育が九年になるといつとであつた。つまり、その理由は、子供が九年も学校にしばらくはとによつて働き手が減り、それは27農家のみならず、家庭の経済力に對しても大きなマイナスになるというものだった。わずか半世紀にも足りない以前には、たつた三年の義務教育年限の延長が大問題となつていたのである。

教育改革に動じなかつた

啓明学園の実践教育

占領軍の民間教育情報部の教育改革に関する講習のなかで重点を置かれたのが、授業の内容と方法であつた。そしてまず、すべての教科の学習は、義務教育を終わ

り社会に出た時にすぐに役に立つ

ものでなくてはいけなかつた。小学

校での国語は、それまでは片仮名が先であったものが、ひらがなから学習することになった。算術は算数になり、初めは身近なものの実測から入っていった。中学・高校の国語は、それまでは古文が主流であり、男子はこれに漢文が加わって、現代文はいえはほんのわずかなものだった。しかし、これも卒業後の日常生活には関係が薄いとして退けられ、逆に現代文が最優先となった。

講習会に出席した一般の先生方には、このことは大変な問題であった。つまり、この現代文をどのように教えたらいのかということと、さらに、その現代文はほとんどが明治の頃の文学作品であったことである。そのうえ、先生方の悩みは、西欧の、とくにキリスト教に対する知識が皆無といってもいくらいであったこともある。もう一つは、教育の実践、方法にあった。一人ひとりの子供の力を大切にして、それぞれの子供がいかに自主的に意欲をもって学ぶようにするかにあった。

この問題は、啓明学園において七年の教師生活をした経験者には、何の不思議もない、しごくもつともなものであった。とにかく菅野先生の実際授業を始め、この目で見つかりと見て、たたきこん基本

線の教育」と、一人ひとりの個性に従った当学園の教育実践は、GHQの係官の説明を理解するのにまことに役に立ったものであった。従って、私はかけもちでいろいろな教科の講習会に出席したが、制度上の変化はあっても、そのほかでは別に新教育制度のなかでの教育がとんでもなく大きく変わったという認識はなかった。国・公・私立の他校の先生方が不安とまどいのなかにあつた時、私も啓明学園育ちの教師においては、今まで実践してきた教育が天下に公認されたようなもので、鼻高々の気分を味わったものだった。

また、この年は『労働基準法』で、児童の労働が禁止され、さらに、『児童福祉法』の成立によって、子供たちが貧困による犠牲から解放され、あるいは児童の権利などが保障されることになったことは、教育に携わるものとしては喜ばしい限りであった。

戦後教育の新しいスタート

昭和三年

今日の教育につながる

新学制の発足

敗戦後の一、二年に比し、いくらか世情は落ち着いてはきたものの、まだまだ血なまぐさい事件が

後を断たなかった。昭和一九年以來、乳児一〇三人を殺害して、その養育費、配給費を着服していた「寿産院事件」は、その被害者が乳児であるだけに、やりきれない思いのする事件だった。その一方では、子供たちのための映画が作られ上映され、また音楽教室が開設されるなど、子供のための文化の灯がともし始めたのだった。二月に入ると文部省は、大学および高等・専門学校進学希望者に進学適性検査を実施した。啓明学園の生徒たちも帰国生を含む数名が受験した。

四月には新制高等学校の発足である。啓明学園は高等学校を設置し、普通課程と農業課程を置いた。それとともに第一中学校と第二中学校を合併し、中学校とした。以来、初等学校、中学校、高等学校という現在の一貫教育の基本型ができ上がった。

この年の一〇月には現在の昭島市の第一回の教育委員の公選が行われた。教育委員とか教育委員会といつても、全く経験のないものであり、その意味すらのみこめなまま、とまごいながら投票した人も多かったと思つ。おそろくなにをする委員なのかもはつきり知らない人が多かったと思つ。

めまぐるしいのは何も教育の世界ばかりではなかった。二二年六月に誕生したばかりの社会党内閣は、二三年の二月、党内左派、右派の対立が原因で総辞職してしまつた。その後成立した芦田内閣は、有名な「昭和電工事件」に巻き込まれ、閣僚のなかから逮捕者を出して一〇月には瓦解してしまい、あげくに元首相の芦田均氏も逮捕されてしまった。そして第二次吉田内閣の成立へと動いていたのである。

中国大陸では、中国人民解放軍と国民政府軍の戦いが激しさを増していた。朝鮮半島では八月、九月と続いて大韓民国の樹立、朝鮮民主主義人民共和国の樹立を迎えたのである。そして十一月、極東国際軍事裁判所は、二五人の被告に有罪判決を下し、年も押し迫つた一二月二三日、七名の絞首刑が執行された。勝者が裁く裁判に疑問は十分に感じて、敗者・被占領国民の悲しさで、ただ黙々と成り行きを見守るよりほかにすべはなかつた。

五段階相対評価が始まる

「甲・乙・丙」、「優・良・可」という懐かしい成績の表し方の終わる時がきた。文部省から「学籍簿に五段階相対評価を採用せよ」と

いう通達が出たからである。

啓明学園のように少人数の場合、これは大変に難しいし、また、あまり意味のないことであつた。そこで当学園は五段階で表示はするが、分配曲線にはよらないという方法になった。この分配曲線による五段階相対評価によると、そのクラスを構成する子供の質によりまことにさまざまな様相を呈することになる。つまり三といつてもいろいろになるし、A校で三だったものが、B校では四となつたり、またはその逆だつたりということが出てくるのである。

独立校舎での子供たち

日本の経済はまだその頃、国家経済としての体をなしていなかつたのではないだろうか。食糧にしてもアメリカ占領軍の放出物資に助けられていた。私自身もアメリカに行っている叔母

(奥江清之助氏の長男に嫁いだ叔母)が許可を受けて送ってくれるカリフォルニア米やチョコレートにどんなに助けられたかしのれない。そういうなかで、子供たちの家庭も大変で、親たちの故郷でしばらく様子をみるといつて、転校をしていく者、本家が倒産したので分家が子供を私立学校に通わせてもおけないと、親子ともども涙のな

かで転校していく者などさまざまであった。

学園では、戦争中、軍に貸していた物置小屋は教室となった。生徒たちは独立校舎と称していたが、天井もないトタン屋根の掘っ立て小屋である。大小四つの小屋であった。多摩川からの風が吹き抜けるこの教室は、夏はともかく、冬はとても寒い。晴れた日はなんとか凌げるが、雪が降ったりした日には大変だ。時々授業を中断しては押しくつまじゅうをししたり、雪合戦をする。ぬれても服をかわかす火もないのだが、そんなことはかまわず生徒はみんな明るく楽しそうだった。教室の寒さに耐えかねて外に出てみると、崖の下からイタチが出てきて、われわれを見て驚いて後ろ足で立ち上がっていったこともあった。こちらも驚いたが、イタチはもつと驚いたことだろう。一時寒さを忘れる、剽軽でかわいい仕草であった。

人間もまた満足な食事のできない時代である。この犬も「サツマイモ」で育った。それにしても丈夫で一歳を超えるまで生きた。この犬は、三万坪はある啓明学園の敷地を自分の縄張りとして決めた。従って、啓明学園の児童・生徒には慣れていたが、他の学校の生徒や子供が校地へ入ってくるの猛烈に吠え立てて校地外へ追い出してしまった。夕方庭の植え込みにひそんでいた人を追い出してしまったり、積もった雪の下から小学生の落とした手袋を掘り出して喜ばれたりもした。この犬が小さい時には、中学生の男の子が教室へ連れ込み、授業中机のなかで寝ていたということもあった。一匹の犬と生徒たちの、今ではとても考えられないほのぼのとした愛情物語があった。この犬は賢くて「啓明の犬」とこの周辺ではいわれ、勇名を馳せた。

演劇活動花ざかり

啓明学園の生徒・児童は演劇が大好きで、しかもなかなか芸達者な人が多かった。もちろん舞台があるわけではなく、日常使っている部屋がそのまま舞台になった。現在の北泉寮の階下の広間と食堂に続く部屋ではどの位の劇が上演されたことか。照明もなく、バツ

クの装置も限られていた。しかし、そういうなかで演技達者の生徒たちの演ずる出し物はいつも見物の人々をうならせた。生徒たちの演じるもののなかには本格的な歌舞伎の脚本も取り上げられた。先生が押しつけるのではなく、生徒の中に名優の真似のうまい人などがあつたりして、自然にそんな気運が盛り上がったのである。

とくに浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』では、わが子を主君の身替わりに立てるところなど、観客の大人たちの涙を誘ったものだった。なかでも庄巻だったのは、福地桜痴の作になる『春日局』の上演であった。主人公の春日局を演じたのは男子高校生、女形である。本格的な「かつら」をつくり、衣裳は着物を応用したが、二代将軍秀忠の奥方の衣裳は、三井高維先生の奥様の婚礼衣裳を拝借した。奥方役を演じたのはフランス語の上手な生徒だった。その大柄な体格には白地に豪華な縫い取りのある清らかな美しい打ち掛けはよく似合い、まさに徳川将軍の奥方の貫禄を示していた。しかも、北泉寮の大広間の床の間を背にしての舞台は、ほかに何の装置もなかったが、そのままびつたりと決まっていた。その将軍

と奥方と家康の前で、並みいる家来たちが「ははあー」といってひれ伏すと、熱心に見入っていた小学校の小さい子供が思わずつられて、「ははあー」といってひれ伏してしまつたが、誰も笑う人はいなかった。

幕が降りてから改めて思い出して大笑いとなった。

以後十年位の間に上演されたのは、日本のもの、外国のもの、さまざまであつたが、その熱の入れようとして研究はたいしたもの、岡本綺堂の『修禪寺物語』の上演を計画した時には、たまたま歌舞伎座で上演していたのを、舞台装置のチーフになった生徒がわざわざ出かけていって研究してきたりしたこともあった。

外国のものを外国語で上演する時は、海外生活の経験のある子供たちはその美しい正確な外国語力を遺憾なく発揮していた。

演劇活動に熱心に取り組む、のびのびと生活しながらも、大学を受験する生徒はそれぞれの目標に向かって勉学に励んだ。

また、掘っ立て小屋の教室に電灯などない時代であり、補習をやるにも電灯のつく部屋を探して移動しながらの学習であった。

ビクスラー先生

昭和二四、二五年

リン・ゴ箱と雨戸の机や

お古の調度品

占領下の教育は、占領軍の厳しいチェックのもとで、さまざまに法令が出されていた。大学関係のレッドパージも進んでいた。

昭和二四年は何か人々の不安をかき立てるような事件が続発していた。七月から八月にかけては、下山事件（下山国鉄総裁が轢死体で発見）、三鷹事件（三鷹駅で無人電車暴走）、松川事件（旅客列車転覆）とたて続けに大きな事件が起きた。これらの事件はいまだに本当のところは分からない。下山事件に至っては今もまだこつこつと捜査に従事している人があるという。

一方で、「成人の日」、「子どもの日」、「母の日」など、今ではすっかり暮らしに定着している。明るくい行事も、この年に生まれたのである。

そんななかで、啓明では物置き小屋を片づけて、中学校、高等学校の教室とした。それらは独立校舎と称されていた。そして初等学校は、北泉寮の廊下を区切ったり、伏見寮の部屋を使つたりしていた。広い建物のおかげで、教室はなん

とかお茶を濁すこともできたが、机や椅子は少しばかりの中学生用のものしかなかった。もちろん初等学校の机はない。そこで、当時としては貴重なリング箱を六つほど世話してもらい、その上に雨戸を外してきて乗せて机とし、その周りに座って勉強をした。きちんとした机はなくても、畳をあげた板の床に座っていても、みんなは一生懸命に勉強した。

そんな状況であったので、近所の公立学校で、古い机や椅子を新しいものに替えるために廃棄するという話を聞けば、飛んでいって払い下げてもらったものである。結構使えるものがたくさんあった。保護者の方々の協力で、こういう聞き込みが知らされると早速飛んでいく。

ずいぶん遠くまで行ったこともあった。もちろん今のように車が使えるわけではない。運搬にも大変多くの人々の協力があった。おかげで戸板を乗せた机も普通の学校の机に替わり、教室らしい様相をみせるようになったのである。

寮の食堂のベンチは大変重くて掃除当番は大変だったが、それでもみんなが安心して腰かけ、楽しく食事ができるということは何よりもうれしいことであった。

そんな意味で、この時期の啓明

はどこかで捨てられる運命になったこれらの調度品のリサイクルセンターともいえた。しかし、この「お声」にたいして文句をつける生徒はだれ一人としていなかった。いや、むしろ感謝の気持ちをもっていたものだ。

ビクスラー夫妻との出会い



○・Dビクスラー夫妻

昭和二五年の二月、お茶の水教会で伝道している米国人宣教師○・Dビクスラー夫妻が三井先生に招かれて来訪した。その際三井先生から職員に対して、ビクスラー夫妻が啓明学園に協力してくれることになったということが紹介された。暖房もなく、冷たくうす暗い、いかにも気の滅入りそうな日であったが、大柄なご夫妻の、いかにもアメリカ人らしい明るい雰囲気によって、何となくさきに希望が感じられるような気がした。

○・Dビクスラー先生は、一九一九年一月、二四歳の若さで日本

へ伝道に來られ、茨城県の山のなかでキリストの教えの伝道に努められた。太平洋戦争が始まり、一時帰国されたが、戦いが終わるとすぐに、二百頭ものヤギをアメリカで集め、友人の伝道者とともにヤギをつれて日本へやってきたのである。戦争で栄養も十分でない日本の子供たちが健康で大きく育つためにそのヤギの乳を役立ててほしいとの願いからであった。

その後、再び来日された時には、お茶の水で新しく教会を持ち、本格的に伝道活動に入ったのであった。お茶の水の教会は古風な日本家屋で、バイブルクラスは畳の部屋に座って行っていた。現在の お茶の水教会の建物はその後建て替えられたものである。

今でも茨城県の水戸、日立、大甕、大子など多くの町に教会があり、ビクスラー先生に導かれた人々の二世三世が伝道活動を行っている。

七月、学校の校地内で初めてバイブルキャンプが行われた。確かにイキキャンプだったと思う。

三日間位だったろうか。お茶の水教会の青年たちが何人も来てくれて、それぞれいろいろの分野で奉仕をした。啓明の先生方はすべてビクスラー先生のバイブルクラスに入り学んだのであった。

聖書の勉強、讚美歌の練習がたくさんあった。讚美歌は日本語と英語の二カ国語で歌われた。

児童・生徒たちが英語の讚美歌を覚えるのはさすがに早かった。午後は多摩川で泳いだり、火をたいてマシユマロを焼いたりして楽しい時間が用意されていた。

妙高高原での

バイブルキャンプ

学校が夏休みに入ると、先生方の有志は、妙高高原で行われたバイブルキャンプに参加した。

信越線田口（現妙高高原駅）から冷や汗の出るような危ない感じの山道をバスで登ってゆくと、妙高山のふところに抱かれた広い山裾になだらかな線の美しいキャンプ地がある。そこは、日本の憲政史上に有名な尾崎聖堂翁の娘婿である佐々木氏の所有する所であった。

木造の素朴な建物が幾棟もあり、そのうちの棟がわれわれの宿舎であり、食堂であり、勉強の場であった。これらの建物からほとんど等距離の所に大きな浴場があり、温泉があふれていた。

午前と午後バイブルクラスがあり、午後の時間の後は周辺の散策や野尻湖へのハイキングなどの楽しみがあった。なごやかな夕食と豊かな温泉での入浴。ここは、

まさに肉体の糧と心の糧とをいたたく日々であった。

帰る前日から、関東地方は大雨に見舞われて、ラジオではきりに多摩川が拝島地区で決壊したことを報じているので、いったいどうなることかと案じた。とにかく、田口の駅まで行ってみると、信越線もあちらこちらで不通箇所があるということだ。長野駅までで行けるということで長野まで行って夜を明かすことになった。そして次の日の明け方一番に、開通した列車に乗ったのであるが、川の堤が決壊したため水が線路すれすれにまでつくなかをのろのろと進んだのだ。

そんなこともあり、妙高高原の夏は多くの示唆に富んだものであった。わき上がる高原の霧が窓からフアーっと入ってくる部屋で学んだ『へブル人への手紙』もまた、その後の私の生活に大きな影響をもたらしてくれた。

クリスマススクールの

誕生 昭和二六年

バイブルと礼拝の

日々のなかで

この年の一月、文部省、教育課程審議会は道徳教育の充実の方策

につき答申を出した。ただし修身科は復活せずという建て前であった。二月には道德科というものは特設せず、四月から五月にかけて小、中、高校用に手引書をつくり配布した。

三月、私立学校法の施行に伴い、学校法人啓明学園の経営となり、理事長にO・Dビクスラー氏が就任し、夫人のD・Sビクスラー氏が園長、初等学校、中学校、高等学校の校長に菅野尚明氏が就任した。そしてキリストの眞精神を教育の基礎に置くことを明確に打ち出したのである。オックスフォード大学で教育を受けられて以来、三井高維先生が志しておられた、神とキリストを柱とした教育が実現したのであった。この時から啓明においては聖書が児童・生徒の心の教育の中心となったのである。

四月、新しい年度を迎え、学園も新体制で出発した。

北泉寮の階下の大広間で、二時間目と三時間目の間に二〇分間の礼拝が行われるようになった。

初等学校、中学校、高等学校合同で起立したままであったが、全校生が集まっても寮の大広間で十分なこと足りるほどの人数であった。また、一週間の授業のなかに聖書の時間が必修として二時間設けられた。さらに、学校は土、日休日

の完全五日制を実施した。

七月には、バイブルキャンプが行われた。宿舎は北泉寮の二階と台所の上の部屋であった。

午前中はもっぱら聖書の研究で、これは初等学校の児童から大人までいろいろのグループに分かれて行われた。児童・生徒たちの各クラスは、啓明学園で聖書担当をしている繁国良八先生とお茶の水教会のバイブルインスティテュートの学生がそれぞれ担当し、大人のグループはビクスラー先生のバイブルクラスであった。まだまだ聖書にはなじみの少ない人々が多かった。ビクスラー先生はこの時にまず「神の義」と「神の愛」について語られた。茨城弁を交えたお話は私の心に深く刻み込まれた。讃美歌二六二番が私の愛誦の一つになったのは、この時かであった。

九月、秋分の日に運動会を行う。クリスチャンスクールである啓明学園は、日曜日に行われる礼拝を大切にしていたので、学校の行事がそれを妨げてはいけないのである。そこで日本では当時、当然のように行われていた日曜日の学校行事は、日曜日をさけて祝日を選ばれたのである。

一二月には礼拝とキリストの物語のページェントを行い、非常に敬虔なクリスマスが行われた。

北泉寮の大広間に生徒全員が座り、その周りをお茶の水の若い人や、啓明の高校生がとり囲み、ミセス・ビクスラーの指導による美しいソロやコーラスで進められたが、その光景は、そこにいた人々に強烈な印象を残した。一二月の寒さも感じないほどだった。小さい子供たちも静かに美しい歌声に聴き入っていた。キリストの降誕はこのようにして祝うのであるということとを深く印象つけられたのであった。

新生

昭和二六年四月。それは啓明学園が明確にクリスチャンスクールということを打ち出し、歩み出した年である。

昭和一五年に啓明学園が創立される時、三井高維先生は、實際教育の責任者である菅野先生に、「自分は学校を設立するに当たり、英國で師とした人の話に深く感銘し、教育の基本にキリストの精神をおくので、その点は協力をしてもらいたい」と語られている(菅野先生はその時はまだ信者ではなかった)。当時、キリスト教会は統合を迫られ、平和を語る者は捕えられ、という時代である。キリストの精神等とうたえはとうてい学校は認可されなかった。そして、戦後

の苦しい経営のなかでの数年を経て、今、日本人をこよなく愛する一人の米人宣教師が三井先生の招きに応え、啓明学園をクリスチャンスクールとして世に表明して出たのである。三井先生が英時代に固められた志は、ビクスラー先生により形をなし実現したのである。

当時、啓明学園の教師にはほとんどクリスチャンはいなかった。それからは生徒とともに聖書を学び、礼拝を行う日々が続いた。そして学校行事、生徒指導上の問題など、われわれ教師の日常生活にさまざまな形で起こってくる問題を処理するに当たり聖書から学んでいったのである。その過程で、ビクスラー先生にぶつかり議論をしたことも多かった。そうして、先生方も生徒たちも次第にキリストの十字架を通して示された神の愛の深さに魅かれていったのである。

一人の人間が神の前に新しく生まれ変わるにより、新しい生涯に入るように、一つの小さな私立学校が、神の前に新しく生まれしたのである。

大手のビクスラー

ビクスラー先生はアメリカのネブラスカ州の出身であった。先生

の若い頃はまだ自動車ではなく馬車の時代であったという。また、住まいが砂漠に近かったということもあって、先生は「樹木」を大変愛し、大切にされた。そんなこともあって、防音校舎を建築するに当たっても、とことん樹を切らないことを条件にされた。「木は五年や十年では大きくならないよ」というのが口ぐせであった。

ビクスラー先生は、ちょうど私の誕生日の三日後に、伝道のために横浜に着かれた。ところが、先生に私の生年月日を知られたために大変閉口したことがある。

「あなたは今、国語の先生。でも僕はあなたより早く日本語を覚え31ました。あなたは生まれてすぐ日本語を話しましたか? 話しませんでしたね、ハハハ・・・」といつも楽しそうに笑われるのである。確かにそのとおりである。茨城の山のなかで長い間伝道しておられた先生は「いばらぎ弁」なのである。

先生は「えはらぎ弁」といわれた。また、小さいというのを「ちんこい」というので、初等学校の子供たちはそれを真似てはおもしろがっていた。そのうち先生方のなかにも茨城出身の方が多くなり、一時は茨城的イントネーションが学校内を風靡して、国語教師たるも

の大きい困惑したものである。

ビクスラー先生はよく笑いながら、僕はO・Dビクスラーです。

「茨城ではオーデのビクスラーといわれました」と自己紹介をされた。本当に大きく厚みのある手で、握られるとスッポリ入ってしまう。

しかも、どんなに寒い時でも温かい手であった。教師の間でも大手のビクスラーはいつも楽しい話題の提供者であった。彼は、アメリカの開拓者精神をもつ最後の世代ではないだろうか、われわれはよく話したものだ。ある時は

粉をこねて大きな大きな「おやき」をつくり、「これはデキサササイズです」といつてわれわれにふるま

つてくれたこともあった。

聖書に聞く生活

明治以後、日本の教育のなかでいわゆるミッションスクールの果たした役割は大きい。ことに女子教育については大変に大きな働きをしたと思う。

しかし、それらの学校も初期の頃

はともかく、次第に礼拝と聖書の時間があるというだけで、本質的には日本の普通の学校と変わらないものになってしまったものが多かった。

人は、自主性をもって事に当たり、決して判断を人に任せてはいかないという。しかし、ではその

判断は何を基準としているのか。それが正しいかどうかというもの

さしがなくは正確な距離は測れないのである。ビクスラー先生はそういう生活上の判断基準をすべ

て「聖書に聞く」ということを教えてくれた。啓明学園でもその判断の基準を、神の言葉である聖書

においたのである。

以来、啓明学園の児童・生徒、職員

の生活の指針がここに置かれた。

この時以来約二十年間、生徒の生活指導は、この絶対的な基準に

合わせて行われ、しかも、強い忍耐をもつてその実施に当たったのである。キリストが十字架によつ

て人間に示した深い愛のように。たつた一人の生徒のために午前二

時まで会議をもつたこともあった。夕食もとらず午後十時頃までとい

うのはざらであった。最後にはどうしようもなくなくなり、意見を求め

られて、ただ祈る先生もあった。

教室らしい教室もなく、設備も貧しく、経済的にも苦しいもので

あったが、生徒も先生も互いにぶつかり合いながらも成長した一時期であった。また、PTA

の協力も自発的に、積極的に行われたものであった。

名物・草取り作業

九月に学校が始まると、まず行

われるのが運動会に向けての運動

場整備の作業である。というところ

こえはいいが、草取りである。今の

の大運動場のあたりは一面のススキ

の原、いろいろの種類のススキが茂

っていた。これには手をつけ

ない。いや手がつけれないのである。小学校一年生から高校三年

生まで、やつと二〇〇人足らず

運動会に使う運動場だけで精いっぱいである。まだまだ残暑は厳しい。しかし、これをやらねば練習

もできないので、毎日毎日草取り

作業が続く。高校生のなかには、「草取りを覚えるために授業料払

っているのではないぞ」などと叫ぶ者もある。それを聞いて、先生

も他の友人たちも明るく笑っている。叫んだ当人も、自然に手は草

を抜いている。この草取り作業は、ついに啓明学園の年中行事となったのである。

卒業生に会うと、今でも草取りはやっていますか」とよく聞かれる。今はやっていないというところ

「惜しいですね、あれは何よりの教育ですよ、懐かしい」という人がたくさんいる。

クリスマスページェント

一二月のクリスマスには清らかな

それは英語と日本語で歌われる

讃美歌、やはり英語と日本語による

聖書朗読、そして世界の有名な

クリスマスカロルで綴るキリスト

降誕物語である。高校の男子生徒

がマリア、ヨセフ、ガブリエルと

三人の博士を演じた。音楽家のミ

セス・ビクスラーの指導によりこ

れらの生徒たちのソロあり、周りの人々のコーラスありで、すばらしい音楽劇であった。

この年以來、啓明学園のクリスマスには礼拝の後で常にこの形式

で、キリストの一生をあつかった

もの、キリストを通してわれわれに示された神の愛の物語などが演

出されるようになったのである。

ミセス・ビクスラー

昭和二七年

啓明ビューティフル!

前年から行われるようになった

ことわざがよく出てくる。

さすが山深い日本の山村での生活

に密着した伝道の経験からであろ

う。児童・生徒はみんなそのお話

に引き込まれていた。

英語の讃美歌は、ミセス・ビクスラーのリードで歌われた。抜群の

表現力と美しい張りのあるソプラノ、みんな新鮮なものとしてぐん

ぐん吸収していった。

こうして讃美歌のコーラスはこの年に誕生した。また、ミセス・

ビクスラーの努力によつてバイオリン、トランペット、トロンボーン、フルート、ピアノなどの楽器

もそろい、バンドが結成された。

この年に生まれたこれらのものは32

その後長い間学校のなかに消長はあつたが生き続けたのであつた。

ミセス・ビクスラーが常に口にされたのは「ケイメイ・ビューティフル!」であつた。それは、たと

えば美しい音楽を啓明のなかにとり入れることであり、また、また

学校の体をなしていない校舎を美しく整備することなどを含めて、

われわれに与えられた環境をまず

気持ちのよい、美しいものにつく

り変えてゆこうとするミセス・ビクスラーの心意気と啓明を慈しむ

気持ちから出る言葉であつた。

オクラホマの太陽

D・SビクスラーのDはデイラ
イラ、旧約聖書のなかに出てくる
デリラという婦人の名である。
その婦人はサムソンに近づき、彼
の力をぬき、捕えようとねらっ
ていた人々に、彼を捕えさせた婦
人として出ている。そんなわけで、
だんだんと聖書の話を知るようにな
った生徒が、「ビクスラー先生用
心して」などといったは大笑いを
したこともあった。

ミス・ビクスラーは、アメリカ
婦人らしい人であった。

子供のように純心で明るかった。
話に聞くオクラホマの太陽のよう
であった。ご主人を亡くされ大き
な遺産を継がれたのであった。

そのままアメリカで悠々と暮らさ
れても決して困らない身分であっ
た。O・Dビクスラー先生とは同
窓の間柄であり、彼が伝道のため
訪日している間に、奥様をアメリ
カで病気で亡くされたので、伝道
の伴侶として来日されたのであっ
た。五〇歳を過ぎてからの見知ら
ぬ国での生活は、さぞ大変なこと
だったろうと思う。

ミス・ビクスラーは、われわれ
には、いっさい日本語を使われ
なかった。

しかし、何かの拍子にふと日本語

を口にしておられるのを聞くと、
非常にきれいなものだった。やは
り音楽をなさるだけあって音感が
いいのかなと思つたものだ。

さて、ミス・ビクスラーの仕
事ぶりは驚くべきものである。そ
れは、アメリカの教会、友人に対
して絶えず手紙を出すことであつ
た。お茶の水教会のこと、啓明学
園のこと、こまごまとしたことが
手紙に書かれた。
ひまさえあればタイプをたたき、
手紙である。学校にきておられる
時も絶えることはない。

「ミス本間」の声がかかる。
「そらきた」と思つて飛んでゆく
と、その手紙を片っ端から封筒に
入れ、封をしていくのである。

その数たるや一週間に何百通にも
なるのであった。このような努力
のおかげで、戦後の経済的に厳し
いなか、日本の学校の常識からい
えば、ひとつまみもないような小
さな啓明学園が生き残ることがで
きたのであった。

ミス・ビクスラーは足が冷え
ると具合が悪くなることがあつた。
ある時、具合が悪いと悲しそうな
顔をされていたので、私が、「先生、
伝道者の足は幸せだと聖書にあり
ますね。大切にしてください。先
生の足はすばらしい足なのですか

ら」

という、大変に喜んでくださつ
たことがあつた。私とは、アメリ
カの発想と日本の発想の違いから
ずいぶん議論もしたが、しかし、
やはり一人の信仰者としてのミセ
ス・ビクスラーと接し得たのは大
きな幸せであつた。

啓明牧場の出発

啓明学園の児童生徒の発育を助
けるためというのでビクスラー
先生が二頭の乳牛を飼い始めたの
が啓明牧場の出発であつた。日本
には珍しい茶色のジャージー種で
ある。乳量は少ないが濃い乳を出
す牛であつた。

その後、アメリカのほうから送ら
れてきて、その数は次第に増え
ていき、昼食の時には児童生徒の
口に入るまでになった。啓明牧場
は、現在の大運動場の東側四分の
三位を占めていた。

やがて、スマートな牛舎もできた
のである。牛舎とサイロのある風
景は、スイスの放牧地を思わせる
ものだった。まさに、桜の木がな
ければと評した人もあつたほどで
ある。

コーラスに熱中

毎日の礼拝や聖書の時間に歌う
讃美歌は、生徒たちに新鮮な印象
を与えたらしかった。
讃美歌は長すぎもせず、短かすぎ

もしないということ、また各パ
ートが比較的やさしいということ
もあつてか、生徒たちは自分たち
でコーラスの練習を始めた。

昼休みなどに男子の高校生が一本
指でピアノをポロンポロンとたた
きながらベースのパートの練習を
している、誰かがそばへやって
きて、それに加わる。

そうしているうちに、礼拝の時に
高校生がだんだんパートに分かれ
て歌うようになった。そうすると、
楽しいものだからなおのこと練習
に励む。こうして日本語、英語の
讃美歌のレパートリーが急速に広
がっていった。ついには先生方の
なかでも好きな人が加わつて、常
時三〇人くらいは集まつて歌うよ
うになった。当時三〇人というた
うになる。

ミス・ビクスラーは音楽も学
んでいることは前に述べたが、み
んなが歌っているところへつかつ
かどやつてきて、一人ひとりの声
を聞き、即座に、あなたはソプラ
ノ、あなたはアルト、ベース、テ
ナーと、その人のパートを決めて
いく。強引といえは強引だが、し
かしそれによつて自分でも気づか
なかつた才能を引き出された生徒
たちもたくさんいたわけだから、
これはミス・ビクスラーに感謝

しなければならぬことだった。
高校生の自発的な讃美歌練習か
ら生まれたコーラスは、以後多少
の消長はあつたものの、現在の聖
歌隊にまでつながっているのだら
う。

胸に輝く新しいバッジ

「イエスはますます知恵が進み背
たけも大きくなり、神と人にと愛
された」ルカ二・五二

クリスチャンスクールをはつき
りと掲げて踏み出した啓明学園は、
戦争と敗戦の混乱のなかで新しい
バッジをつ



くる余裕も
なく過ぎて
いた。しか
し、ここに
きてようや
くそれに手
をつけるほ
どになつて
きた。帽章
のほうはそ
のままであ
つた。胸に

つけるバッジは、創立当時、島村
三七雄先生（美術担当）の原案を
もとにして、先生、生徒がいろい
ろ考えて日本離れのしたスマート
なものができるはずだったが、「啓
明」を象徴する星がついていた

めに、前にも記したように、これは陸軍に叱られるからといって徹章をつくる店が承知せず、結果的には、何の変哲もないもので、我慢せざるを得なかった。

そこで、今回は男子の襟と、女子用に同じデザインのものを考えることになった。ビクスラー先生の片腕となって当時の礼拝を担当され、クリスチャンスクールの基礎をつくるうえで大きな働きをされた繁国良八牧師が中心となって、この作業が始まった。議論百出の後、やっと決定したのが、上に掲げた図のデザインである。全体の形はいわずと知れた十字架を象徴している。学校の名前を囲んでいるS・S・P・Mは冒頭に記した聖書の言葉の英語の頭文字である。

「知恵が進み」はメンタルのM、「背丈も大きくなり」がフィジカルのP、「神」は上のSでスピリットを、「人」は下のSでソーシヤルを、それぞれ表している。

啓明学園の目標は、十分に学習し、知恵をみがぐること、十分に身体を鍛えて健康な体をつくること、そして神に愛される人となることにも、周りの人々からも愛される人となることにあり、それらを表しているのである。

このバッジは、最初のものはグレーの地金の上に金色で文字を描

き出していた。

重厚な感じでなかなかよかった。その後、七宝焼となり、紫に近い透き通るようなブルーの地に、白で文字を書いたものになった。型はさきものよりやや小型になった。

このバッジは、昭和四七年に現在のものに替わる時、購買部に残っていたものは多くの生徒に買われていった。生徒の間ではなかなかの好評だったようである。

理事長夫妻の努力と成果

昭和二八年

新校舎、つくりし学園の一致協力

一致協力

昨年あたりから、啓明学園に新しい校舎を造ってはとの願いが高まってきた。そして、ビクスラー先生夫妻の努力により、米国の友人からの援助もあった。多額なものではないが、講演の謝礼とか、手作り品のガレージセールからの収入とか、本当にニドルとか五ドルとかのものであったが、心のこもったものが送られてきた。さらに、戦後発足した啓明学園のPTAの方々のあるいなる働きが始まった。まず、校庭の芝生にテントを張って、といつても二張りほどであったが、手作りのものを並べ

バザーをやった。そして、米軍基地の人々を招き、それらを買ってもらった。みんな喜んで買ってくれた。まず手こたえは上々であった。それというのも、ミセス・ビクスラーは非常に活動的な方であったからだ。立川や横田の基地へ出かけて行つては、クリスチャンスクール啓明学園を紹介してくださった。将校婦人の集会に出席され、その会の後に行われるお茶の会の時に、PTAのお母さん方の作品のぬいぐるみ、編み物、刺しゅうなどを並べられた。

これが大変好評で、後には注文がくるほどになった。まさに、学園が一致協力して教室や講堂を与えられることを祈りながらの努力が続いたのである。

フアウンテンブラシ

英語の讚美歌を歌うために、その歌詞がある。ビクスラー先生が立派な讚美歌を持ってきてくれるが、とても数が足りない。そこで、いそいで毛筆で紙に書くのであるが、英語を書くのはなかなか難しいものである。これも大きな字を書くためには毛筆しかなかった時代であるからやむを得なかった。ミセス・ビクスラーは「毛筆でこんなにうまく書くとは」といつてもほめながら労をねぎらいつて

くださった。

小学生は歌を覚えるのがとても早い。ミセスの発音どおりにさっさきつさと覚えていく。そして、たちまち歌詞も覚え、今度はなんも見なくてもどんな歌うのである。こういうなかで初等学校から育つていった子供の中には、海外生活をした子供にも負けない英語力を身につけた者もあった。また、米軍の軍人がよく出入りしている店を経営していた人の子供が初等学校に入学してきたことがあった。

しばらくすると軍人たちが、この店では一番小さい子供の言葉が一番よく分かるといつて笑つたという。その子が聖書のことを英語でいうと、日本人の耳には、どうしても「バイポー」と聞こえるのであった。

ある日、ミセス・ビクスラーが、ここにこしながらやってきて、

「これからはこれを使って讚美歌を書きなさい」といつてさし出したのが、アメリカでできたというフアウンテンブラシであった。なるほど、毛筆よりは書きやすかった。以後、英語で讚美歌を書くのに時間が少なくてすむようになった。これはきつと、日本でも真似をしてつくられるにちがいないと話し合っていたのだが、案の定

それからしばらくして日本製のものが出現した。それにはマジックインクと名が付けられた。

また、ビクスラー先生が英語の讚美歌の本をアメリカから取り寄せてくれたので、希望者は手に入れることができるようになった。厚くてしっかりした表紙で、ブルーと赤の二種類の色があった。それを三〇〇円で購入した。

もちろん、本当はもっと高いものであった。当時の三〇〇円はわれわれにとつて、そう安いものではなかった。これもビクスラー先生の努力と好意のおかげであった。何しろ一ドルが三六〇円の時代である。

日本文化のなかで経営努力

昭和二九年

「コッポ編み」好評と

ミセスの職歴

この年も前年からの努力は引き継いで行われた。ことに緋い毛糸で編まれる「コッポ編み」のストールは非常に好評で、特にクリスマスなどの贈り物にと注文がたぐさくくるようになり、夏休みから一〇月にかけてはPTAのみならずにとつては汗だくの仕事であった。家族ぐるみで編物、刺しゅう、ブラウスなどの製作にあたる

人々も少なくなかった。初等学校の子供たちにまで、「コッポ編み」という言葉は親しいものになったほどである。

一方、ミセス・ビクスラーは、長いアメリカでの教師生活の実績をもって、基地のアメリカンスクールの講師も兼ねられた。そして、その報酬は学校の修理や校舎建築の資金にあてられたのである。

ここで、彼女の職歴について記してみた。彼女は、まずリンカーン小学校長を三年、コーデル市公立学校音楽指導主事を九年、コーデル・キリスト教大学の英語講師を三年、コーデル市公立学校視学官を八年、そしてジョージ・ペバダイン大学教務主任を二年という教育一筋の職歴をもった人である。

啓明学園生徒会の誕生

啓明学園生徒会がこの年に誕生した。しかし、それぞれの学校別に組織し、役員を選出したら残り生徒がないほどの人数であったので、初等学校四年以上高校までを一本にしたものであった。まさに前代未聞の生徒会であったといえよう。

また、当時は登校・下校は拝島駅から歩いて来るしかなかった。しかし、その登校風景はおもしろ

くもほほえましいものであった。高校生と初等学校生、先生と子供たちがそれぞれ話し合いながら畑の道を通って来る。途中でなにかおもしろいものをみつけた初等学校の子供が、虫の観察などを始めてしまうと、高校のお兄さんやお姉さんが「遅れるよ」と引っぱってくる。たまたま初等学校の一年生と一緒に先生が、聞かれるままに自分の兄弟の一番下がもう大学生だと話す。

「まあ、それではもうお楽ですわね」といわれてびっくりしたり、通学風景にはほほえましい物語がたくさんあった。

こういうありさまなので、いざ生徒会長の選出という時になると、初等学校の子供に人気のある高校生に票が集まる。何しろ人数は初等学校が一番多かったのであるから。しかし、たとえば進学のために勉強があるからといって推薦を断ると、当時の中高生は十分にそれらを考えて票を投ずる。従って、選出されるほうも困らないのだが、初等学校の子供たちはそんなことは関係がない。人気投票である。

そして、以後は児童会と、中高

生徒会という時代が続いた。中学と高校の生徒会が別になったのはいわゆる第一次ビーブームといわれる世代が高校生となった時からであった。

模擬結婚式

米国軍人の夫人たちは、バザーやお祭りの会も喜んだが、日本式の結婚式を見たいという希望が強くと、とうとうPTAがこれを基地のなかで行うことになった。お母さんの一人が新婦、お父さんの一人が新郎となり、媒酌人は事務長ご夫妻ということになった。

女性はもちろんであるが、男性も新郎、媒酌人いづれも紋付の羽織に仙台平の袴といういでたちであった。新婦の衣装は、PTAの会員のご好意ですばらしいもの一式を貸していただいた。大変な好評で、米軍のバスが送迎してくれて、四回か五回は式を行ったようであった。

まだまだ日本のことを知らない人が多い時代のことである。

本職の神官を頼んだことで、ビクスラー先生に叱られ、とりやめになってしまったのである。また、当時の日本の風習は世界の人々からは一種珍しいものとして見られていたのかもしれない。

だからこそ、基地内では大変な評判を得たのであった。

そうして、こういう交流がいろいろの面で当時の啓明学園の経済を支えることにより影響を与えたのであった。

ビープリペアー

啓明学園では、周囲に樹木が少なくなつたとはいへ、それでもまだ大きな木のあるほうだったろう。アメリカの乾いた地で育つたビクスラー先生は本を切ることは大変に嫌いであった。

児童生徒のはねまわる運動場の端の藪の中には、きじが住み、人の出入りのある門のそばの木には山鳩が住む。野ウサギが草取りをしている生徒たちの後をピョンピョンはねながら茂みから茂みへと移動していく。そのなかでも小綬鶏の多いことは驚くほどだった。

季節がくると五羽位の子供を引きつれた親鳥が芝生の上を横断していく。例のかん高い声はいつでも聞こえていた。

ビクスラー先生がこの声を聞き、啓明はすばらしいところですよ。

鳥が神様のごおぼを教えてください。世の終わりの時にあわてないよう用意しなさいと、ビープリペアー、ビープリペアーと朝からいっていますよ。

それまでは、「チョットコイ」

といっていた子供たちは、小綬鶏の真似をする時、「ビープリペアー」になったのである。こんななごやかな雰囲気のおかげでも、ビクスラー先生は、クリスチャンスクールとして厳しくしなければなら

ないところは非常に厳しくした。しかし鳥の鳴き方に寄せて、おもしろく子供達の心に響かせるという、何気ないユーモアをも持ち合わせておられた。「娯楽」には厳しかった。「娯楽は堕落になるよ」というわけである。聖書の

時間にもたびたび出てくる言葉であった。娯楽が堕落になる。語呂合わせのおもしろい言葉だが、含蓄のあるものだった。

慈善。ハーティーでの讚美歌

昭和三〇年

新しい講堂と校舎

新しい校舎が与えられることを望み、みんなで一致努力したかいがあつて、とうとう新しい

講堂（木造）と校舎（ブロック）が与えられた。設計はアメリカ大使館に勤務されていたミセス・ビクスラーの友人の夫君であると言ふことであつた。マリンプルーの三角屋根の二階建てを中心に、両翼にブロックの教室が片側三教室計六教室であつた。

そして講堂の下は、小さい部屋に分割され、初等学校の教室や図書室、事務室などが入っていた。枝を広く伸ばして茂る木々の間から見えるマリンブルーの屋根は、天気の日にはことに明るく空の青に映え、ちよっぴり異国的な雰囲気をかもし出していった。

講堂の正面入り口に向かって左手の三教室が高校、右手が中学校であった。まだまだ小さな所帯であった。また、礼拝はベンチに腰をかけても行えるようになった。

慈善パーティーでの

奉仕出演

この年の二学期の始まる頃、アメリカ大使館に来ておられたミセス・ビクスラーのお友だちから、一二月に行っている恆例の大使館の慈善パーティーのためにコーラスをしてほしいかとの話をもつてこられた。ミセスは大変乗り気である。

聞けば、今まではチャペルセンターの聖歌隊を頼んでいたという。びっくりしてしまった。

しかし、ミセスは大喜びなのでとにかく受けることになった。

もちろん何を歌うかの曲目はミセスが選んでくださった。讚美歌と各国のクリスマスカロールを全部で一二、三曲であった。一番の歌詞

は英語。二番は日本語である。なにしろ、中高生を合わせても混声の合唱隊をつくるのに選ぶだけの人材はない。そこで、全員参加となった。よほどの理由のない人以外はどれかのパートに入らなければならなかった。男声がかなり充実していたので、女声のほうは先生も入らないとバランスがとれないという始末であった。

ただちに練習が始まった。毎日毎日特訓であった。そんな努力が実り、たいしたもの、だんだんと楽しく歌えるようになった。そうすると、ミセスは立川や横田の基地内の教会へ行ってコーラスの奉仕をさせたのであった。場慣れをさせるためである。

練習したものを全部歌い終わると二〇分位はかかるのである。もちろん全曲アカペラ（無伴奏）であった。本番が近づくと二日ばかり合宿をして練習をした。

本番の日、アメリカ大使館差し回しの大型バスに乗り出発した。車の中でも発声練習をして、着いたらずぐ本番に入れるように準備をした。蛇足であるが、おもしろいことに大使館の門を入ると玄関までは右側通行になるということをこの時初めて知った。

用意されていた二階の部屋で少し休み、準備をしつつ待つ。やがて

案内されて下におりると、玄関を入った左側の階段の所が歌う場所となっていた。

次々と入ってこられるお客様が足を止めて聴かれる。なかにはしばらく一緒に歌う人もあった。

一回りでいいのかなと思っている。そうではなく、とうとう全曲を繰り返して四、五回、午前中は一時間歌いつ放しの奉仕であった。午後は二時間近くにもなった。しかし、来る方々が本当に喜んでくださるのが分かるので、こちらも大いに楽しんで歌うことができた。

このパーティーでは翌年も奉仕した。その年は大使が病気のため帰国されるというので、一〇月にパーティーを開くということになった。この時はアメリカ、イギリス、イタリア、日本など世界各国の有名な民謡や歌曲のメドレーを行った。外国のものは、一番は外国語、二番は日本語であった。日本の歌は、「さくら」、「荒城の月」、「ずいずいずつころばし」、「五木の子守唄」であった。

クリスマス之歌よりも、民謡のほうがそれぞれの関心があるのか、入り口が通れないほどの人が立ち止まって聴いてくれた。特に、「荒城の月」は編曲の妙もあってか好評であった。意外なことに、「ずいずいずつころばし」は、その曲が

非常にリズムカルで四声のかけ合いのような編曲であったためか、何回も歌ってくれとの要求が出た。仕舞いには手拍子をとってくれる人もみられた。また、意外に思ったのは、アメリカの女性のなかに、「五木の子守唄」の曲が好きだという人が多いということだった。

しかし、この二度の奉仕はいろいろのことをわれわれに教えてくれた。この時、パーティー券を買って集まってくくださった方々は、日本の恵まれない人々のために寄付をされるための協力だということであった。われわれも人々に聴いてもらい一生懸命に歌い、茶菓

子のもてなしを受けて帰ったわけだが、心の中にはそうしたことへの微力ではあるが協力ができたことに対する満足感と喜びがあった。そして、この全曲をアカペラで歌うということも、音を大切にすることの重要性をわれわれに教えてくれたという意味で有意義であった。

また啓明学園コーラス隊は、お茶の水教会の結婚式には必ず奉仕をした。そのため、ワグナーの『ローエングリン』のなかの「婚礼の合唱」を得意なレパートリーの一つにしていた。

拝島での日曜礼拝

昭和二六年、啓明学園がクリスマススクールを正式に表明して後に、学校の礼拝所で毎日曜日、教会の日曜礼拝が行われた。

これには、寮生活（暮から正月にかけて、一時的に家に帰っても、あとは一年中寮の生活である）をしている農業科の生徒、啓明学園の敷地内に住む教職員、そして周辺の村の人などが集まったのである。学園では、昭和二三年四月末日の日曜日から村の子供を集めて日曜学校を開いていた。

そこでは讚美歌のなかの子供の歌を歌ったりして、神様やイエス様の話をしてきた。

子供たちは喜んで集まってきた。親たちにしても、この地は当時は農村であったので日曜も祭日もなく農作業がある。そういうなかで日曜日に一時間半位でも午前中子供に心配をせずに畑仕事ができるということ、常に三〇名以上の子供が集まってきた。この集まりは、やがて、拝島教会の日曜学校になっていった。

拝島村に流れる讚美歌の

共鳴 昭和三年

「帰国子女」の入学

戦後まもなく海外に出てゆく日本人は少なかった。まして、家

族を連れてというのはごくく特別な人たちであった。従って中国、韓国、米国籍の子弟の編入学はあったが、海外勤務者の子弟の入学・編入学はなかった。しかし、この年あたりから、いわゆる、帰国子女、といわれる子供たちがぼつぼつ入ってくるようになった。

さて、この年、啓明学園の生徒会は、初等学校は児童会として独立組織をもつようになり、また中学・高校生は一緒にして生徒会を組織したのであった。

クリスマスの讚美歌街に

流れる

そのうちに、子供たちの集まりの指導者として啓明学園の中学・高校生が名乗りをあげるようになったのである。

また、これも生徒たちから出てきたのであるが、村の集会所が空いている時には子供たちのために幻燈会や紙芝居をやった。初めの頃は川向こうの滝山の麓の加住かすみや高月の部落にも出かけていった。川には粗末な板を二枚位渡した橋があった。それでもあればいいほうで、雨の後などは板を外してしまふので、水のなかをぎぶぎぶと渡ることになる。

機械は今のようには軽いものではな

い。肩にかつぎ、みんなで注意しながら渡った。そして、その夜集まることになって家につくと、もうみんなが待っているという具合であった。最初の頃は驚いたことに、お年寄りがたくさん集まっていた。

「若いもんは自転車で福生へ映画も見に行ける。でも、わしには何もない。ほんとに楽しみにしているよ」

そんな言葉が励みになって、川の水の冷たさも忘れることができたのである。

さらに、あまり明るくない電灯のもとの神様の話、イエス様の物語が、われわれの心の中に温かいヤル気をわき上がらせてくれたのであった。夜の伝道には、高校の男子生徒たちの大きな働きがあったことはもちろんである。

一月二四日の夜はクリスマスの歌を歌って村のなかを歩くことが、どうやら恒例となつてしまつた。人々に会えば、「クリスマスおめでとう」、「メリークリスマス！」の言葉が飛び交う。戦争中に用いた防空頭巾が変じて防寒頭巾となつている。小さい子供たちの群は、もちろん村の子供たちだ。大きい人は啓明の中学・高校生である。

子供たちに危険のないようにと心を配りながら歌つていった。

ひと頃は、どここの家も歌声が聞えと戸口に誰か出てきて「クリスマスおめでとう」と先に声をかけてくれたものだった。

ある年のクリスマスだった。拝島駅の前でクリスマスの歌を歌い、暗い道を学校へと引き返してきたことがあった。

ところが、一番後に一人の若い米軍の兵士がいるではないか。驚いて、なぜかと聞いてみると、彼は、太平洋戦争であちこち転戦し命が

らから帰国したのだそうだった。しかし、その後占領軍の一員として日本に来ることになった。その後

は心の中はすっかり荒み、この夜も駅前の日本人オフリミットの米軍専用の小さいバーで酒に浸つていたところである。ところが、

そんなところへクリスマスの美しい讚美歌が流れてきたために、自分も子供の頃、クリスマスの夜に教会で歌つたことなどをしみじみ

思い出し、涙が流れ、居ても立ってもいられずここまですべてき

てしまったという話であった。その時はみんな声もなく溢れんばかりの大きな感動を共有したものだ

だった。この日は、繁国先生の祈りをもつてこの感動的な交わりは閉

じられた。またある時には、たまたま横田からの帰りであるという米軍の将校

が、まさか日本でこのような姿のクリスマスに出会えるとは思つてもいかなかった、神のお導きですと感激し、とうとうその将校の家まで自分の自動車でピストン輸送つきで案内され、家庭で温かく迎えられたこともあった。

その時は、大人数になつたのでほんのちよつぱりになつてしまったクリスマススケーキではあったが、そのすばらしい味は今でも忘れられない。

拝島駅前、立川駅前でのクリスマスのコーラスも続けられたが、交通が激しくなり危険が増大してきたので、残念ながら中止せざるを得なかった。

それにしても、これらのコーラスは誰からの強制もないのに、自分たちで考え実践していたのだから、当時の中学生、高校生の情熱にはすばらしいものがあつた。また初等学校の児童のなかにも、中

学・高校のお兄さんお姉さんについていろいろな面で一生懸命働いた者もあつた。

不景気、流感そして勤評闘

争 昭和三二年

全国で流感が猛威をふるう

戦争が終わつた直後から日本の

社会には混乱はいろいろあつたが、病気の流行もその一つであろう。続々と外地から引き揚げてくる復員兵とともに病気もまた入ってきた。衛生状態は悪く、身体は栄養

失調であるから少々のウイルスですぐに広がるというわけであつた。連合軍の医療努力もあり、ど

うやら消化器系統の病気は、地域的な小集団の発生はあつても、全国的な大流行というのは治ま

つてきた。

この年の五月から六月頃にかけて流感が全国的に猛威をふるつた。世界的なものであつたのが、とう

とう日本をも襲つたのである。啓明でも全校規模で流感が広がり、児童・生徒、教職員の間に欠席す

るものが多数出た。当時の統計によれば、患者は小学校児童だけで五十万五千人、休校は千二百校に

及んだという。

この時の啓明での話であるが、先生のお見舞いに行く子供たちのなかで、大変に豪華な花束を買つていく者と、学校の庭に咲く野の

花をつんで花束としていく者とがあり、思わぬところでその先生に

対する日頃の認識が分かり、苦笑

文化の芽吹きと勤評闘争

一方においては、文化の華

の開花へ向かっていろいろ弄吹いた年でもあった。プロのコーラスグループとして「ダークタックス」の初演奏、ウィーン少年合唱団に引き続いての「木の十字架合唱団」が四月に来日し演奏を行っている。

また、上野動物園にモノレールが走るようになったり、「NHK」と「日本テレビ」がカラーテレビの実験局を開局したのもこの年の一二月のことであった。しかし、

この年の下半期から次の年の下半期にかけて日本は深い不況の底にあった。称して、「なべ底不況」といった。世の中が不況になると私立学校はいろいろと影響を受けることになるのである。また、公立校の教員の俸給算定のために勤務

評定なるものを提出せよということが前年の一月に出されて以来、この年も各地で勤務評定に反対する闘争が起こった。なかには警官隊との衝突という事態にまでなったところもあった。この騒ぎは次年度も収まる様子はなかった。

現実化してくる「帰国子女」

教育 昭和三年

文部省と日教組と……

二月に文部省から小中学校の「道徳」の実施要綱の通達があり、

四月から週一時間をこれにあてることになった。これに対する反対と、前から続いている勤務評定反対とが一緒にになり、教育現場はますます混乱していった。

日教組の大会では、外からみる限り、そのスローガンは「道徳」教育反対、勤務評定反対、そして待遇改善が常に主役であって、一人ひとりの子供の問題は置き去りにされているのではないかと思われる状況であった。

こうしたなか、この年の終わり頃、神奈川県では県教育委員会と県教組が勤務の神奈川県方式というのを打ち出し、教師の自己評価の記録とすることになった。

ロカビリー―世を風靡

二月に東京でウェスタンカーニバルが開かれた。この頃から若い人々の間にロカビリーは急速に流行し、中学・高校生のなかには学校を休んでもロカビリーの大会に行くというものも多く出た。啓明学園でも学校を欠席する者が何人かあったほどだった。

生徒会は何回も総会を開き、このブームにどう対処するか議論が行われた。しかし良識のある生徒が多かったおかげで大問題に発展することはなかった。

ちなみに、この頃は今のよう

に人が自分の楽器を持って演奏を楽しめるという時代ではなかった。

演奏会に行つて、その熱気と興奮のなかに身をおき、若者たちはそれに陶酔した。ホームルームでもよく取り上げられたものであったが、こんな話もある。ある先生が、「いったいあなた方は、あの雰囲気の中になんかいて、セックスアピールを感じないのかな」というと、生徒は、

「感じませんよ、全く純粹の音楽的興奮のみです」と答えた。

先生曰く、「そう、それはかえって心配だな。あのなかになんかあなた方位の年でセックスアピールを感じないなんて、その方が問題があつて心配ですね」というと、生徒の方がびっくりしたという話があつた。

ミッチーブームに フラフープ

「なべ底不況」のなかでもこの年の終わりに近い一月、皇太子・今上天皇と正田美智子さんとの婚約の発表は明るいニュースとして日本中を駆けめぐった。そして世間はいわゆるミッチーブームにわたるのである。

また、世界中を駆けめぐったフラフープがとうとう日本にも上陸してきた。そして学校の校庭はも

ちろんのこと、ちよつとした広場があれば、子供はもちろん、若いも若きも、年代を問わず腰を回してクルクルと楽しんだ。

腸捻転になるとか、いやいやスマートになるとか、諸説ふんぶんではあつたが、そんなことに委細かまわず、フラフープはクルクルと日本中を駆けぬけていった。

久々の「帰国子女」

初等学校高学年に「帰国子女」が編入してきた。戦後新しく編入してきた最初の子供である。まだその頃は帰国子女などという名称はなかった。

サンフランシスコからであつたらうか。もちろん補習校もない社会での生活であつた。編入したての頃は廊下などで呼びかけると、「イエス」という返事が返ってきた。気がついて恥ずかしそうに「はい」と言い直していた。

そのくらい外国語の生活が身につけていたのである。もちろん外国人は、他にも籍を置いていたが、そんなにまとまる人数でもないの

ながらも、一方に先生の昼休みを邪魔することへの申し訳ないという気持ちが表われていたものだった。

クラスの友だちのなかには外国人もいるので、すぐにうちとけた。ところがみんながびっくりしたの

は、その帰ってきた子供は、「なわとび」が全くできなかったということだ。ちょうどその頃は、「なわとび」が盛んであり、体育の時間でもとり入れられていた。もちろん遊ぶ時にも「なわとび」は人気の種目であつた。そこで、クラスのみんなどはそれぞれ力を合わせて「なわとび講座」を始めた。

クラスの担任も周りの先生方もただ見守っているだけで手は出さない。とうとう友人たちと本人の努力が実り、みんなとともに愉快に「なわとび」で遊べるようになってしまった。クラスの友人たちはアメリカの学校では全く「なわとび」というものがなかったということを知つたのである。

ちなみに日本で戦後、「帰国子女教育」というものが叫ばれ始め、文部省が乗り出して「帰国子女教育研究協力指定校」などというこ

少人数制で個人尊重の教育

昭和三四、三五年

コーラス熱ますます高まる

アメリカ大使館にコープスの奉仕をしてからというものが、ますますコーラスへの関心が高まり、中高生徒、先生の自由参加で常に三〇名から四〇名が自主的に集まって練習していた。誰かが始めると私もということ、みんながやってくるという調子である。

当時はまだまだ啓明学園では音楽の専任の先生をお願いするほど時間数がなかった。初等学校一年から高等学校三年まで一二クラスしかなかったから。従って、みんな素人である。先生方のなかに学生時代コーラスをやっていたという人があるくらいであった。ただ共通していえることは、全員歌うのが楽しくて仕方がないということであった。しかも、素人のこのおさ知らずで、学校行事にその活動が定着をみせてくると、うれしくてますます熱が入るのであった。この頃は、男子の参加が多く、素人のかなしさで、女声の方が押され気味となり、苦勞をしたものだった。しかし、入学式や卒業式はもちろん、他の行事での活動が定着したといえる。

日曜日に全員登校、

教会へ出席

啓明学園では、昭和三五年の四月から初等学校、中学校、高等学校とも日曜日に全員登校、教会礼拝または日曜学校へ出席することとなった。寮生は各自の家庭の近くの教会に出席することを認められた。

さて、日本全体に目を向けると、この年度は戦後最初のベビーブームといわれた時の子供たちが中学一年になる年である。本学園中学校も生徒数が増え、一年がA、Bの二クラスとなる。また、この年、安保改定の時を迎え、安保反対運動が高まっていた。

大学生や教職員が中心となり、高校生までもが参加するという運動の盛り上がりであった。東京では一千人の高校生が安保反対の会に参加したという。

こうした騒然たるなかにも文化面では新しいものが続々と出てきて人々の注目を引いた。たとえば、現在ではすっかり学校教育に浸透しているL1教室もこの時代に一步を踏み出したのであった。

津田塾大学の語学研究所が開設され、そこにランゲージラボトリーが設置され、その後、次々と他の学校への導入が行われるように

なったのである。

東京大学の入試問題

「漢文」で満点！

啓明学園では、もともと全学科平均してすばらしい得点を取るという生徒よりも、一科目でもなにか優れたものを持っている生徒が出ることに、より教育的関心を持っていったことは事実である。

そういったなかで、東京大学の入試問題を受験した生徒が、「漢文」の問題で満点をとるという快挙をなした者が出た。

クラスのなかで、彼の成績が特別に良かったというのではなかったが、彼には豊かな感性と柔軟な頭脳があった。普段の勉強はといえ、しているのかわからないのかまことに頼りないものだったし、漢文についても授業の進み具合はといえ、えびのんびりしたものだった。いたっておもしろおかしくやっていたので、なんとなく頭に入ったものかもしれない。とにかくクラスメートが驚いたし、それ以上に本人も驚いていた。本人は驚いた後で得意になることも忘れなかった。

啓明学園の授業は、もともとが少人数制のクラスでやってきている。もちろん、これは個別にみていく必要があるからだ。ただ、こういう授業は教師のほ

うがよほどしっかりしていないと、

慣れ合いになって学習はおろそかになり、とめどもなくだらしないものになりがちである。

その点をしっかりと見すえていれば、一人ひとりの理解度は、少し慣れれば容易に見分けがつく。

そこで、分かっているかと思われ者には分かるまで時間を与える。要は、みんなに説明するには基本的なところはしっかりと説明をし、後はそれぞれの力に従って深めていくように指導すればよいのである。

昨今では、多くの大学が、「一芸に秀でた生徒」を歓迎する風潮にあるが、先の生徒のように「漢文」に満点をとる者があるとすれば、それは学園としても非常にうれしいことであるばかりか自慢のできることである。

生徒会休会

九月になっても新しい生徒会の役員などは改選される様子もないし、活動もさっぱりなされ、ていまいようだ。どうしたものかと思っていたら、どうやら生徒のほう

が放り出してしまったようである。啓明学園の中学・高校の生徒会は、他校の学生生徒の政治活動を耳にしても、これといった政治的影響を受けず、日常の学校生活をよりよい展開のためにと学園生活をや

つてきたのである。

この年度の高校生は、非常に豊かな個性の持ち主が多く在籍していた。学校の勉強ができるとかできないとかを問題にする前に、人間として豊かなパーソナリティーを持つ生徒たちであった。

ところが、こういう生徒たちを指導するのは教師としてはなかなか難しいものだ。そんな関係もあったのかどうか、とうとう生徒のほうが生徒会活動を放り出してしまったのである。せつかく生徒から内発的に誕生したのに惜しいこと

だと思つたが、主体となるべき生徒にやる気がないので、しばらく様子をみてみようということになり、無理に生徒に働きかけることはしなかった。教師の側のような態度は、見方によっては教育の怠慢と決めつけられても仕方がないが、生徒の「わがまま」

を許しただけでは決してないし、また、わがままと決めつけるわけにもいかなかった。それまでの経過をよく観察し、今の場合はこの方法が最良であるとの見方からであった。少人数制で個人の特性を尊重する教育というのは、実は、大人数で組織的に生徒が動いてくれる教育よりも、よほど神経を遣うのである。

中学校に在学していたある男子

生徒が、公立中学校に転校して行くことになった。その理由に曰く、「ここでの生活は少人数制なので何事につけ自分だけしらん顔をしているということがしにくい。

勉強も自分のレコードとの争いなのでいくらやってもきりが無い。このわずらわしさに疲れしました。ちよつと休んできません」

というのであった。現在、国立大学で教えている人の弁であるが、これは先生方も同様、小さいさいことまで目につくので、それを一つひとつ 選別して指導するのは、まことにわずらわしいのである。

生徒会の休会の原因も、そうしたなかで起こったものであった。以後、昭和三九年に再開するまで、生徒会はしばらくの休みに入ったのである。

高校生急増対策

昭和三六、三七年

啓明牛乳の増産を計る

長い戦争により食べるものも十分になかった日本で、将来を背負う子供たちに少しでも栄養のあるものをとることで、ビクスラー先生はアメリカの友人の協力を得て学園での牛乳の頭数を増やし、ミルクをたくさん生産するようになった。主としてジャージー種

牛であったため、その牛乳は濃くて、しばらくそのままにしておくのとびんの口のところにクリームが厚くたまり、びんをさかさまにしても牛乳がこぼれないほどであった。

初めのうちは昼食の時にのみ児童・生徒、そして教職員が思う存分飲むことができるほどであったが、やがて牛乳の頭数を増やすに従い、啓明牛乳は学校外にも出るようになった。特に、アメリカ軍の基地の人々にであった。日本に占領軍としてきて以来、米軍は生の牛乳を横田基地などで飲むことができなかった。

つまり、日本の牛乳製造過程が衛生的にみて十分ではないということがその理由で、そのため粉ミルクで長い間我慢をしていたわけである。たまたまビクスラー先生の友人が横田にいられた折、そこへ先生が啓明牛乳を持ち込んだのがきっかけで、やがて製造設備などの厳重な検査が行われて、生の牛乳を基地に持ち込むことに合格したのであった。

それからは横田、立川あたりに住む米人たちが自動車に積んで運ぶ姿が賑やかとなった。

一時、奥多摩街道脇の校地に販売のためのスタンドがつくられた。お茶の水教会と啓明の間を週に二

回往復されるビクスラー先生は、荻窪の衛生病院などに配達をされたこともあった。「僕は牛乳配達人です」といつて大きな体をゆすつて楽しそうに笑っておられた。啓明牛乳はそれから十余年間、運動会の時の特別販売など、学校の行事の時にはいつも活躍し、人々に親しまれたのであった。

気候のよい季節には、柵の中のんびり草をはむ乳牛の姿がある。それを柵の外の草の上に。べたんと腰をおろした児童や生徒が画板の上の画用紙に描いている風景はのんびりとしていて、ふと時間の流れも止まったかと思われるような錯覚を見る者に与えた。近所の小学校や保育園の子供たちが先生に連れられて「牧場」の見学や写生に来校することも多かった。

時には柵をぬけ出して教室を訪問する牛もあった。授業中に突然、開いている窓からニユーッと牛の鼻が入ってきてびつくりさせられたこともたびたびあった。逆に、生徒のほうもこっそり柵の中に入り、牛の背中にちゃっかり乗っている者があったから、これは五分五分というところであろうか。

啓明の職員の子供たちが都内に移転したら、ミルクがまずいというので市販の牛乳を飲まなくなってしまった。実は私たちも旅行な

どに出てほとんど牛乳は飲まなかった。啓明牛乳の濃い味に慣れると、他のものは薄くてとても牛乳とは思えなかったからである。

中学校の学力テスト

日教組を中心に日本中の学校の猛反対に会い、しかも一部の生徒には受験拒否者も出た文部省の中学校二・三年生を対象にした「全国一斉学力テスト」に啓明学園は参加した。少人数制で個別指導的な学習を進めていると、個人的な進度はよく分かるが、それが日本全体からみるとき、どの位のところにあるかということ、常に確かめておく必要がある。日本の学校の教育が個別ではないので、進学の時などにはやはり全体のなかでの状況をみておかないと見当がつかないということになる。今のうちに偏差値などというものがたちまちに出てくるというような時代ではなかった。もちろん、大学進学のためのテストは幾つかあったのだが。

ありがたいことにそれを文部省がやってくれるのだから喜んで参加したのである。啓明学園は世の中の学校がどうであろうと、そのことと自体が悪いことでなければ、学園が自主的に考えて行動をとる学校である。きわめて自主的であり、

柔軟性のある体質を持ち合わせていた。二名の教員が採点者になった。

この時代は、敗戦後一六年をへて公立中学校が相当に充実してきたため、私立中学校は生徒数が減り、休校を余儀なくされる学校も出てきた。この地区でも中学校を併設している学校のなかで中学校を閉校していなかっ。だのは二つの有名校と啓明学園の三校だけであった。

東京は他県とは違い、高等学校はとも都立だけでは間に合わなかった。それで、私立学校に助成をして協力してもらおうという状況であった。そのため、高等学校40はどこでもかなりの競争があり、人数が集まったが、中学校のほうはそうはいかなかった。ある学校では、二〇〇人募集したところ、応募者が少なくてとても成り立たないというので、急ぎよ募集をやめ、応募した子供に対しては他校を紹介するということになった。うだ。そうした生徒が啓明学園にも何名かが志願してきたことがあった時代である。

高校生徒数ピークへ

向きの準備

第一次ベビーブームといわれた子供たちが、次の年度からは高校生となる。そして、その次の年に

はピークに達し、しばらくはこの状態が続くことになる。そこで日本全国でその対策が始まった。矢継ぎ早に、公立高校の増設、教員の養成と打ち出されてきた。

は違うこじんまりした学校として、必要欠くべからざるものを備えるという 実践的なものであった。この年度から高等学校一年が二クラスとなり、さらに翌年からは三学年ともに三クラスとなった。啓明では高校一年が二クラスになり、多くなつたといっている位であつたが、社会では、高校全員入

啓明学園はこの時、高校一クラス 五五名をとつてほしいとの要請を受けた。今までは二〇名から二五名そこそこが一クラスである。それを五五名で一クラス、合計二

啓明学園がクリスチャンスクールとしての歩みを始めてから十年が過ぎた。この間に生徒や教師のなかでクリスチャンとしての生活を歩み始めた者も多くなつた。

御心よいざこ……

三〇名で二クラスということに落ち着いたのであつた。教室の大きさは普通の学校並みの大きさのものが二教室である。このようにして三八年度のピークへ 向けて準備がなされたのであつた。

そのような生徒の一人の訃報が飛び込んできたのは寒さの厳しい時期であつた。S君は母親と二人暮らしてあつた。初等学校から学園でともに生活した彼は、とても体の弱い子供であつた。たびたび貧血をおこしては倒れた。しかし、

四月には生徒数の増加とともに教員の数も増やしてきた。そのため今度は、今までのように 家族的な、なんとなくみんなが協力してそれぞれの役割を果たしてきたという雰囲気はできにくくなつてきた。そこで学校運営の組織を整備して、主任制度を実施することにした。もちろん大規模な学校と

び、この年の三月、卒業と同時に、その頃徹底したキリスト教主義の教育を行つていた岩手県の山中にある高等学校に、音楽の教師となつて赴任することになり、そのための卒業証明書をもらいに学校にやつてきたことがあつた。そして本当に明るく自分の志が満たされたことを喜び、語り、帰つていつたのだつた。それがなんと、この青年の訃報が届いたのは、それから二週間たつたたぬかという時であつた。

啓明学園がクリスチャンスクールとして歩み始めた者も多くなつた。そのような生徒の一人の訃報が飛び込んできたのは寒さの厳しい時期であつた。S君は母親と二人暮らしてあつた。初等学校から学園でともに生活した彼は、とても体の弱い子供であつた。たびたび貧血をおこしては倒れた。しかし、

中学、高校と進むうちに次第に丈夫な体になり、高校生になつて洗礼を受けてからは心のたくましさも出てきた。やがて、彼は音楽を身につけて伝道をしようとしたのである。

ベビーブーム世代の

高校生像 昭和三八年

日曜日の新しいシステム

クリスチャンスクールとして歩み出して十余年。日曜日の過ごし方にはさまざまな形があつた。そしてこの年、日曜日の新しいシステムが実施されたのである。

学校の授業は月曜日から金曜日まで、土曜日は休みというのは従来と変わらない。

日曜日、通学生には午前九時から九時五〇分まで聖書の時間を置いた。寮生は夕方帰寮後、午後四時三〇分から五時二〇分まで聖書の時間が置かれた。いずれも必修である。日曜日の聖書の時間は週日中に置かれた聖書の時間とは異なり、専門の聖書担当の先生が担当されるのではなく、クリスチャンの先生に学校が委嘱して担当してもらつたのである。

通学生は初等学校の低学年・高学年、中学校は一年から三年まで合同、高校は一年二年合同、三年は別にして一クラスにした。寮生も初等学校は低学年と高学年に分け、中学生は全員、高校生も全員を一つのクラスにした。後に担当者の都合で中学と高校は一つにした。多少の無理はあつたが。日本では、日曜日は一家がそろつてともに過ごす日である。

その日にわずか五〇分とはいえず学校へ出なければならぬとなると生徒からも保護者からも相当に抵抗があるだろうと思われたが、案外と静かに実行に移せたのであつた。

生徒たちがそれぞれ聖書を学んでいる間、先生方も先生方だけで聖書を学んでいたのである。この方法は、昭和四三年のO・Dビクスラー先生が急逝するまで続いたのである。この頃を振り返つて、学園で生活した卒業生が、いうには、

「日曜日の朝の聖書の時間に登校するのはごくあたりまえなことであると申つていた。家族で遊びに出かける人たちは、聖書の時間が終わるのを待つて、その後そろつてバスに乗つたり、車に乗つたりして出かけて行くのをよく見かけた」と懐かしそうであつた。

この聖書の時間は、生徒たちに非常に大きな影響を及ぼした。専門の先生から聖書の基本を学び、日曜日には生活のなかでの実践を通しての学びがある。しかも生徒は遠慮なく質問や意見も出せるというので、クリスチャンスクールの生徒としてどう生活すべきかということをしつかりと根づかせることになった。

週日の礼拝が分けられた

月曜日から金曜日までの五日間の学校の礼拝は、初等学校、中学

校、高等学校の三校が同じ場所
合同で行っていた。しかし、人数
も増えてきたということもあつた
が、まず高等学校の生徒から礼拝
を学校別にしてほしいとの要望が
出てきた。確かに初等学校一年か
ら高校三年までが同じ話を聞くこ
うするのは大変に難しいことであ
る。話をする側からいえば、どこへ
対象をしばればよいか分からない。
高校生向きにすれば初等学校には
理解しにくいものとなり、初等学
校の子供たちは礼拝の間忍耐を
強いられることになる。

初等学校にちょうど合わせるよう
に話をすれば、高校の生徒には子
供っぽくてなんだか馬鹿にされた
ような気持ちになるものである。
話をする先生の側からは、その難
しさは前々から話に出していたの
である。

しかし、場所が一つしかないの
で、時間をずらすしか方法がない。
そこで啓明学園の特別な 教育環
境から、月曜日は初・中・高校の
合同の礼拝とし、火曜日から金曜
日に分けることにした。

そして初等学校は授業開始前、中
学・高校は一時間目の授業が終わ
った後ということになった。そし
て、初等学校の礼拝の間は中学・
高校はラジオ体操、中学・高校の
礼拝の間は初等学校がラジオ体操

ということになったのである。
このラジオ体操が、なにか締まり
がなくだらしがらないとの評も出た
が、 magari なりに何と継続した
のである。しかし、評判が芳しく
なくても、運動会の時のラジオ体
操には大きな力を発揮した。
なにしろ毎日のことであるから、
やはりそれだけの練習にはなつて
いた。後にこれをとりやめてしま
うことになった時、毎日積み重ね
られた練習の成果というものは
つきりと思ひ知らされたのである。

生徒会の復活と

文化週間の誕生

ある日、高等学校の国語の授業
を行っていたら、生徒から質問が
出た。

「先生、啓明学園は生徒会を禁じ
ていると聞いたんですが、本当に
すか」

「どんなでもない、そんなことあり
ませんよ」

「じゃあ、どうして生徒会がない
のですか」

そこで、私は以前の経過などを
含めて説明をした。あなた方の先
輩が、ずいぶん前に生徒会をつ
くり活発な活動をしていたこと、そ
の後、数年前に生徒の方から自然
消滅的に活動をやめてしまったこ
と、そこで、私はなんとか活動を

続けさせようと思ったのだが、生
徒の方にその自発的意思がなく、
ついに休止のやむなきに至つたと
いうことを縷々説明した。

そこで生徒は納得し、それでは
というので、さっそく準備にかか
り、とにかく活動を始めたのだつ
た。初等学校、中学校、高等学校
それぞれに児童会、生徒会をつ
つたのである。啓明学園の場合、
生徒会は生徒の勝手な活動ではな
く、学校の指導のもとに活動する
ということ、本来、生徒会という
のは、学校の教育方針を實踐達成
するために協力する生徒側の活動
機関であるということをはつきり
とさせた。そして、学校行事では、
実行委員会は生徒会長を中心と
した生徒の側が中心となり、一
月に、第一回の文化週間が開かれ
た。

日本ではどの学校でも文化祭
とか、何々を冠した学校祭と呼ば
れるのが普通に催される。

しかし、この時の文化祭に「祭」
という言葉を使用することに難色
が示された。それは、「まつり」と
いうのは、神社仏閣を連想させる
という宗教上のこともあつたが、
その昔はともかく、現代では民間
で祭りというとき、ほとんど遊び
のイメージが主になっていること
が多い。そこで、啓明学園のこの

行事は、ただおもしろおかしく遊
ぶのが主たる目的ではなく、少し
でも文化の向上・発展を考えると
いうことを目的とするという考え
方をした。そこで「祭」を用いな
いことにしたのだつた。

そこで、催し物が約一週間に及ぶ
ので、バードウィーク、安全週間
などの例にならない、文化に触れ、
文化を考える週ということで、「文
化週間」と名づけられたのである。
この期間中、演劇、音楽、研究
発表(教科・グループ・個人)の
場である発表会(中学・高校、学
芸会(初等学校)などが催された。
作品展示を主とした展覧会高等学
校の各クラスで行うクラスの展示
会などが計画された。

中学・高校生の発表会には二日間
を要する多彩なプログラムもあつ
た。ことに研究発表では、個人や
グループで研究していたものが発
表されたので、準備期間が短いに
もかかわらず、充実したものがあ
り、見学者の目を引いたものだつ
た。なお、クラスの展示は、後に
中学生も加わつた。

無責任時代の生徒

戦後のベビーブームの子供たち
は高等学校一年生となつた。啓明
にも今までは比喩のものにならな
いほどの人数が外部からどつと入

つてきた。

ところが一カ月、二カ月と生活
をしている間になにか今まで啓明
に入つてきた生徒とは違つたもの
を感じる。授業を休むのではない
が、遠足には欠席をする。運動が
きらいだからといって出て来ない。
その半面、自分の好きな物にはど
んなに悪い条件でも参加する。ま
た、何かの折に注意をしたりする
と、「自分のせいではない、社会の
せいだ」などと平気でいう者もい
る。別にどつと立てて悪いことをす
るわけではないが、かなり無責任
なところを持ちあわせている。

なぜだろう。いろいろと話を聞
いたり、注意をしていると、高校42
入学に始まって就職まで、彼らは
親から「お前たちは子供の絶対数
が多いから大変な競争をしなければ
ならない。しかし、それはお前
たちが悪いのではない。とにかく
お前たちは勉強をしつかりやれ、
他は何もしなくてもいい」といわ
れて小学校、中学校を過ぎてきた。
だから、授業は出るが遠足などは
進学には関係ないから行かない。
そのうえ、そういう状態に自分か
ちをおいたのは親たちであり、決
して自分のせいではないという考
え方が、彼らに定着してしまつて
いたことが分かつた。
こういう考え方の生徒が大勢入

ってきたので、彼らに啓明本来の考え方を理解させるのは大変な努力を必要とした。しかし、なかにはよく理解する生徒もあり、そういう彼らのすばらしい努力と協力があったので、大きな混乱も起こさずに生活できたのである。しかも、この時期、高校生徒会の活躍はすばらしかった。学校生活上なにか問題が起これば、高校生徒会は総会を開き、みんなで考え、討議する必要があるれば、毎日でも総会を開いて徹底的に検討する。顧問の先生も大変だが、生徒も大変であった。生徒数が一〇〇名そこそこの時代の話である。

東風は「わいよ」

ビクスラー先生は啓明学園の責任をもたれるようになってから亡くなられまでの間に、時々アメリカに行かれた。先生にとつては、帰米ではないようだった。「僕の言葉はもうアメリカでは通じないようだよ」といつて、よく笑っておられた。

短いアメリカ滞在の間にあちこちをかけ回り、友人たちに啓明学園の教育を説明し、学校への協力を呼びかけて歩かれたのである。こうした忙しいアメリカの旅の間に先生は、『墮落の道をたどるアメリカの青少年』の病んだ姿をつぶ

さに見られ、非に心を痛めておられた。こうした情況が、そう遠くない将来に日本の青少年の姿にもなるのではないかと案じておられた。やがて「東風は「わいよ！」が先生の口ぐせの一つになっていた。そしてアメリカの青少年を堕落させた原因の一つに、「自動車社会」があることを指摘しておられた。「自動車は密室だよ」とよくいわれた。確かに動く密室である。

しかも、スピードデーにどこへでも自由に行ける。行動範囲が広いのである。啓明でもこうした「車社会」をそのまま放置しておけば、不都合なことも出てきそうなのが、あったので、学校周辺の交通事情もよくなってきたことに合わせ、学校生活をするうえには自動車やオートバイなどは必要がないというところで、在学中には免許取得を許可しないという方針を打ち出した。ただし、家庭の都合で高校卒業後に直ちに運転免許が必要な者については、家庭からその旨を申し出てもらって例外的に許可をした。そんな場合でも、卒業までは、免許証は校長の手もとに預かることにしてあった。卒業式の後に、校長が「おめでと〜うございます」といつて返したのであった。

こうした方針を出したのは、その後、青少年の間に自動車、オ

トバイなどが問題をまき起こしてくる二十年も前のことであるが、生活指導の会などで、「先見の明がありましたね」とよくいわれたものだが、これは「東からの風は「わいよ」と警告を發し、啓明の高校生が学校生活をするのに、本当に車の免許が必要なのかどうかをみんな考えて、指導上の一つの結論を出し、それを生徒や家庭に十分説明し、理解してもらい、協力を引き出し得たのが幸いしたのであった。

新寮舎、修学旅行、暴行

事件のこと 昭和三九年

新しい寮舎での生活

今まで長いこと立派な建物を寮舎として生活してきたが、それは決して子供たちの寮生活というものをもを基本に考えた建物ではなかった。従って収容人数にも限界があり、さらに初・中・高校の別なく、男女の別すらもなく、生活には非常に都合の悪い面が出てきていたのである。それらのことを考慮して、多くの人々の協力を得て新しい寮舎の建築が始められた。これが十一月に完成し、寮生は新しい寮へと引き移ったのである。

新しい寮舎には暖房もあり、いろいろと使い勝手がよく、便利で

ある。生徒たちは新しい寮での生活を喜んだが、一方で、今までのように広い広間がなくて、なにをするにも気を遣わねばならないのはちよつと気づまりのようだった。しかし、明るい食堂で初等学校から高校までが和気あいあいと食事をする風景はまことによいものである。大きい生徒のそばには小さい初等生がいる。

そのうえ、男子も女子もいる。大きな家族のような姿であった。周りの様子は変わったが、なかの生活にはそう大きな変化はみえなかった。

もちろん、今までのような和室の畳の上に蒲団を敷く生活とは違い、一室に四人で、しかも二段ベッド使用という生活が始まったのである。啓明学園の寮生活の歴史は長い、一つの大きなポイントを印した年であった。

修学旅行の新しい方式

戦後の荒廃ぶりも、この年あたりになるとどんどん復興し、学校では修学旅行も年中行事として行われるようになった。

しかし教育面では、親も教師もしつけに自信を失いつつあった。いわゆる社会人として当然守るべきことすらも、子供たちから「古い」といつて一蹴されることを恐れているという風潮である。

おまけに子供は無限の可能性をもつ天使であるなどとおだてる文化人たちがいるため、凶に乗った子供たちのなかには勝手な行動をする者が激増したのである。

たとえば、修学旅行が行われれば、旅館はめちやくちやにされ、土産屋や駅のプラットホームの売店まで、生徒による集団万引きに泣かされるという状況であった。

世には修学旅行廃止論がごろごろとまき起こっていたほどである。

こういうなかで、啓明学園でも従来の旅行方式に検討を加えて新しい方式を考えようとしたのである。初等学校は従来の方式をそのままに残し、中学・高校の方式を変えることになり、準備に入った。立川市に近畿日本ツーリストの営業所ができてから、啓明学園は何回か修学旅行を扱ってもらっていた。そこで、学校側の旅行のあり方など希望を話すことになった。たまたまこの時に扱ってくれた係の方が西洋美術を専攻したという人であった。彼は、少人数を生かしてこんな旅行にしてはどうだ

ろうかと計画案を出してきた。それによると、飛鳥地方に重点を置いたものだった。

学校側としては、なんとか名所旧跡を巡る観光旅行から脱したいとの希望を持っていたので、この方式を容易に受け入れることになった。つまり、一泊で渡り歩くのではなく、足掛かりの地を決めて、研究的にその周辺を歩くというものであった。場所を絞り込み、そこについての地理、歴史、文学、伝説、風俗・習慣など、テーマ別にグループをつくり、それぞれのグループが研究をし、それをまとめて印刷し、各自がそれをもって出かけるという方式である。

出かけてからも見学する場所についての事前の説明はそのグループが行うというものであった。また現地の郷土史家やいろいろな専門家の話を聞き、自分たちの調べたものに肉付けをし、見聞を広げていったのである。

啓明流校外暴力対策

この年度は全国的にみて、中学校の生徒が校内で教師を刺すなどの暴行事件が頻発した。

また、啓明の生徒たちが他の中学校の生徒に襲われるという事件も、この頃から急激に増し

ていった。それは主に下校時に狙

われた。高校生であつても被害を受けるようになってきた。

心ついには、女生徒をいつも尾行する者があるとの知らせを受け、このままではと警察に連絡をし、私服の係官に、防犯を依頼するということもあつた。

そんなわけで、学校としても独自に対策を検討し、次のことを徹底させた。それは

「暴力に対して手向かうな。逃げることをせよ。そしてすぐに学校へ連絡せよ」というものであつた。血気盛んな青年にとつて、これは実に難しいことである。高校生にとつては、相手は年下の中学生である、我慢のできぬのは当然である。時には、初等学校の子供が不良の誰々にあつていと聞かされ、あるいは啓明の中学生が危ないと聞いて、押っ取り刀で飛び出そうとした高校生もいた。

それを必死でなだめて、代わりに先生方が助けに出かけたなどということもあつたが、この難しい学校の方針をよく我慢して守ってくれたと思う。

拝島駅までの道にはまだまだ住宅の少なかつた頃であつたが、生徒が民家に飛び込んで事情を話すと、快く電話をかけさせてくれたし、時には、近くの住民が外の気配を感じ、すぐに学校へ連絡してくれ

たということもあつた。

ある時は生徒からの通報で先生が飛んで行ったことがあつた。すでにパトカーが到着していて、もう始末が終わつていたこともあつた。驚いて聞いてみると、電話をかけた生徒の情況判断で、これは警察へ先に知らせたほうがよいと思つたということだつた。

校内では、われわれ教師がゆっくり腰を落ち着けていられないほど何かと悪さをしてくる啓明学園の生徒たちではあつたが、外部の人に迷惑をかけるということは決してなかつた。

いささか自慢話になるが、警視庁の少年課の調査によれば、啓明学園は、外部に被害を与えることのない学校であるとの評価を得たのである。交通事故も被害者はいないが、加害者にはなつていない。昭島警察からはそのことを高く評価されていたのである。

これらの評価を受けたのも、学園で十分検討をし、それを徹底し、さらに一致した気持ちをもつて生徒指導に当たつた先生方の努力のあつたことも忘れることはできない。それ以上に、生徒たちが、「暴力に対しては逃げることをしなさい。そして、学校に連絡をしなさい」の決まりを守ってくれたことや地域の住民の協力があつたこと

はもちろんのことである。

東京オリンピック

この年、戦後見事に復興した日本を世界に誇示すべく東京オリンピックが開かれた。それに併せて新幹線ができ、首都高速道路ができるというように、たくさんの施設ができた。

そして、代々木の陸上競技場を始めてとして多くの体育施設もできたのである。

そんな年であつたが、啓明学園にテレビ受像機はなかつた。保護者の特別のご好意により、二〇インチのテレビ受像機が講堂に置かれた。児童・生徒は、そこに釘付けとなつて世界の競技を観て、若い気持ちを高揚させたのだつた。

オリンピックが開かれるのは普通は夏と決まっているが、この時は、日本の夏の暑さを避けて秋の一〇月に行われた。前日までの東京はいわゆる秋霖シヤウリンといわれる天

気で、どんよりと暗い空からは、しとしとと小雨が降り続いていた。ところが、開会式の朝はぬけるような秋空が広がり、関係者たちをホッとさせてくれた。

この大会では、日本期待の「東洋の魔女」といわれた女子バレー

チームのおかげで、六人制バレーは生徒たちにもよく知られるところとなつた。しかし、この東京オリンピックで啓明学園の生徒たちが特に感銘を受けたのは、体操競技であつたようだ。力強さと柔軟性を兼ね備えた体操の妙技に、生徒たちはただただうっとり見とれていた。

この大会の特徴は、戦後最大の参加国があつたことだ。そして、忘れられないのは、独立したばかりのアフリカ諸国の参加が多かつたことや、開会式の後に独立を果たし、閉会式には新しい国名で参加した選手たちのあつたことだ。次のメキシコ大会では人種問題が吹き出し、さらに政治的な情勢がオリンピックへの参加に影響したことを考えても、この大会は大成功のうちに終わったといえる。

防音校舎建設を願つて

昭和四〇年

横田基地と生徒たちの

騒音測定記録

さて、日本全国にある米空軍基地の周りでは、離着陸の騒音のために精神的にも身体的にもいろいろの問題が起つていた。ことに学校においては、騒音による授業

中断、子供たちの集中力が弱くなるなど、多くの問題が提出されてきた。そこで国としても放っておくことができなくなり、防音校舎の建設があちこちで始まった。

最初は公立校を対象として始まったが、やがて私立学校も対象として扱われるようになったのである。啓明学園も横田基地から東南に位置するために授業中の中断はしばしば起こった。特に夏場が大変だ。暑いから窓は開け放しである。冷房などというものはまだまだ普及していない時代だ。高等学校の生徒が測ったところによると、四五分の授業の間に完全に授業のできなかった時間が二〇分もあったという。窓を閉めた冬場はいくらか少ないとはいっても、頭上を飛ぶ時は教師も生徒もだまって待つという状況であった。一機だけで飛ぶことはまれで、何機も過ぎていくのである。時々鬱憤晴らしに、

大声で「基地反対！」などと怒鳴ってみんなをわせる者もあった。これはもう絶対に防音校舎が必要である、という気持ちが高まってきた。もちろん、学校の責任者のほうでも、すでに建築を終わった学校の様子を見に行ったり準備を怠らなかつた。

この年度の高校三年生の有志が、

ひそかに自分たちで丹念に騒音の測定をやり、また、実際に授業の様子を記録し、学校の方へ提出した。実はこの記録が、防衛施設庁の係官に大変大きな影響を与えたというのを後になってから知った。直接に防衛施設庁との交渉の窓口をなさった故山崎光三郎先生は、「自分たちは間に合わないことは分かっているが、後輩たちが少しでも静かに勉強できるようにお願いします」という、騒音測定

の記録を提出した生徒たちの言葉に大変深く感動したという。

防音校舎ができたのは、彼等が卒業してから二年たった後であった。

カラスと制服

ある日、初等学校の男子が二人職員室に飛び込んで来たことがあった。啓明学園の児童・生徒は伝統的に職員室に来ることが好きである。何かにつけて入って来る。ドアが開いていると、

「トントン」と口でいつてから入って来る者もある。さて飛び込んで来た二人の話である。

「先生、旧寮の屋根にカラスの子がいるんです。落ちるといけないのでつかまえていいですか」

「あぶないからだめです」

「でもあのまま放っておくとええ

がなくて死にますよ」

「だいじょうぶ。必ず親が近くにいるの。だから近よると親が攻撃して来るわよ」

「先生、僕たちちゃんと制服を着たままで行くんですよ」

「え？ どういうこと？」

「いたずらっ 子なら制服を着てカラスをつかまえにはいきませんよ一言っだとたん、職員室にいた先生方が一斉に大笑いをした。しばらくはその笑いが止まらなかつた。

「そうね。カラスが制服を分かってくればねえ」

二人の男の子のキョトンとした顔が、また一層の笑いを誘ったのだった。木立の多い学園生活のなかならではの一コマであった。

友の過ちは自分の過ち……

昭和四一年

ふしぎなめぐり合わせ

四月に防音校舎の建築が始まり、そのため中学校は初等学校遊戯場に仮設のプレハブの建物を造りそこへ移った。なんでも楽しむことの上手な生徒たちは、床がフワフワするといつては喜んでいたので思い出す。そして、礼拝その他の行事は、日本館の階下を昔のように使用した。

さて、いよいよその建築施工者

は大成建設と決まった。ところが偶然にも、この建設会社の方で、個人的にビクスラー先生をよく知っているという人がいたのである。戦前、ビクスラー先生が茨城で伝道しておられた時に、その人の身内が先生に大変お世話になったということで、よく先生

の話を聞いていたというのである。私はこの話を聞き、不思議な想いになった。実は、大成建設の前身というか、基礎をなすものは大倉土木といつて、有名な実業家の大倉喜八郎が興した会社である。

この会社に明治二七、八年の日清戦争の頃働いていたのが、私の祖父である。祖父はこの会社の横浜支店で、やがて、魂の救いの恩人”奥江清之助氏に出会う。そして遂に、神の深い愛を知るところとなり、「人格をひっくり返された想い」という祖父は以後、キリスト教の伝道者として生涯を捧げたのである。

啓明学園の防音校舎が、大成建設にゆだねられ、さらに、こんなにかかわりがあることが分かって、なんとなくこの仕事に神の御手のなかにあるように、私には思えたのである。

飛鳥や佐渡にいにしえの

夢を馳せる

高等学校の修学旅行は、当時としては、ごく少数の歴史を好む専門的な人々が対象としていた奈良県の飛鳥地方を中心に行われた。啓明としては大人数の一学年で六十余名、これは一般の学校の一クラスの人数である。

事前に準備されたもろもろの資料を持つての旅行である。山の辺の道の前方後円墳や崇神天皇陵に洽つて古代に夢を馳せつつ歩いた。また、陵のお堀にかま首をもたげて水面をすべるように泳ぐ小さな蛇に、何か神秘的想いを抱いたり、われわれのほかにも人もいない飛鳥寺では、話し込むうちに興にのつた住職が一絃琴を弾いてくれた45

りというハブニングまで経験したのである。多くの人々の集まる、いわゆる名所旧跡をめぐる従来の旅行では味わうことのできないものであった。

中学校の旅行は佐渡ヶ島である。新潟の佐渡汽船の乗り場では、東京からどうしてわざわざ佐渡なんかへ来るの」と珍しがられたり、また、相川の町に三泊したところ、まだまだ観光化されていない静かな町で、「あのグレーのスカートを

はいた女子と紺のズボンの男子生徒たち、こんな田舎町で三日もなにをしているんだらう」

と不思議がられた。中学校の旅行

は社会科を中心とした「佐渡金山」がテーマであった。とにかく可能ながり歩いて、金山の関係を自分の目で見て確かめる。少し距離のある所は路線バスを利用する。

金山研究では新潟県の委嘱を受けるくらい実績のある地元の相川高校の金山研究クラブの説明も聞いた。そこで啓明の生徒たちが感動したのは、東京ではただ学校の勉強のみに一生懸命になっているという現実がある一方で、こんなに地元を愛し、そのために楽しんで研究に励んでいる高校生がいるのだということであった。あの時、相川高校の生徒が後から送ってくれた箱いっぱい金の鉱石は、今どうなっているのだろうか。

中学校三年の佐渡の旅のなかで最後の一日だけは観光バスのお世話になった。途中で、バスガイドさんの説明が中休みになったところで、みんなで楽しむ段になった。この学年には外国の国籍を持つ人が何人かいた。そこで、まずアメリカの民謡が飛び出す、中国の歌が出る、韓国の歌も出る、そして日本の歌も出る。もちろん歌詞はそれぞれの国の言葉である。

次々に飛び出す歌に拍手と車の中は大いに盛り上がった。そこで、驚いたのはガイドさんであった。しばらくはあつけにとられたよう

に見ていたが、やがてそつとかわらの生徒に聞いた。

「みなさんの学校は、一体どういう学校なんですか」

友の過ちを知って……

高校の修学旅行中にある事件が起きた。それは夜中、こつそりとして一室に集まった何人かの生徒がトランプに興じたということだった。女子の生徒も何人か参加していた。ところがそのことを知った生徒が止めるべきだと思いつつ止めることができなかった。しかし、どうしても心が落ち着かず、次の日の行程が終わってから先生に申し出た。止め得なかった自分たちも同罪であるとして。先生はこれを受け入れ、その生徒たちと相談のうえ、旅行がすべて終了し帰ってから処置をしようということになり、帰った後、校長に報告し、そのことにかかわったすべての生徒と保護者に対しても指導をした。

普通ならなんでもないことかもしれない。しかし、旅行中の規則というものが、それに違えば、当事者はもちろん親にも話して指導するのが学校のやり方であった。また、申し出た生徒が、自分が止め得なかったのは同罪である、という考え方は、クリスチャンスクールである啓明学園では伝統的

に指導してきているところである。友だちがなんらかの過ちを犯していること知りながらかばうのは共犯である。

また、見て見ぬふりをするのは、友人が悪魔のささやきに誘われていのに、その悪魔に加担しているのだという考え方である。

よくないことをやった当事者はもちろんであるが、それを知っている止めなかった者、かばう者は同じように指導されてきたのである。知っていて止めなかった者が、何日間かの謹慎をいわたされた例もあった。

中軽井沢の寮

例年、夏の休みにはバイブルキヤンプを行ってきた。

拝島の学校で行ったこともあるし、旧軽井沢のビクスラー先生の家で行ったこともあった。その家は高い木々に囲まれ、木の根元には大きなシダが茂っていた。

そして、小さいリスが高い木をのぼったりおいたり、庭を走り回るといふ家であった。しかし、学校の新しい校舎の建築のため、この家を手離した後は、白樺湖の奥の樽ヶ沢、中軽井沢など、よその施設を借りて行っていた。

この年、中軽井沢前沢の地に寮の用地が確保された。田と林に囲まれているだけで、周りにはなに

もない所だった。七月、そこに啓明学園の寮が建てられたのである。クリスチャンスクールである啓明学園の各学校は、ふだんは文部省で定められた教育課程に従って授業しているが、夏の何日間かをここで集中して学ぶ。イエスキリストを通して人間に啓示された神の愛と恵みを記した聖書を、このキヤンプで学ぶのである。

初等学校は三年以上の有志、中学校、高等学校は三年生か必修となった。後に一年が必修となり、さらに途中編入した者、または病気などのやむを得ない理由により中一、高一で参加できなかった者は次の年度に参加するということになった。そして、高等学校は、男子と女子を別の日に行行った。後には中・高男子と中・高女子とに分けて行ったこともあった。この年の高校生は、男子も女子も、庭の木を植え替えたり、運動する場所を地ならしをしてつくったりと、大変な労働をして寮の基礎をつくったのであった。

寮からの眺望としては、二階からはもちろんのこと、門の所に立つと、遙か木立の向こうに雄大な浅間山の長く裾を引く姿が望める。朝日に彩られ、また、夕もやに沈むまで、刻々と色を変えてゆく浅間山の姿はすばらしいものであつ

た。ここでのわずか四、五日の生活とはいえ、俗世界から離れて集中して学ぶ聖書の学びは、これから何年も過ぎて後、卒業生たちの心に得がたい糧となつて、なつかしく思い出されるであろう。中軽井沢前沢の寮は啓明学園の魂の中枢に確かに位置するものである。

幼稚園開園、新校舎完成で文化習慣 昭和四二年

みんなで引っ越し

この年の九月には木造の幼稚園園舎が完成し、啓明学園幼稚園が設置された。とんがり屋根の、なんとなく外国のおとき話に出てくるような家を思わせる建物である。この年、みんなでまだかまだかと待っていた防音校舎ができた。七月の暑い時であったが、みんなで力を合わせて引っ越しが始まった。特に、一年余り仮設のプレハブ校舎で過ごした中学生は大喜びで、率先して新しい校舎への移転に協力した。

教室も廊下もピカピカのプラスチック。これなら上履きの底もそう減らないだろう。今までは教室から教室への移動もすべてコンクリートであったから、上履きの消耗はかなり激しかったのだ。そして、何よりもみんなを驚か

せ、また喜ばせたのは、外の音が
入ってこないことであった。

二重の窓をきっちり閉めてさえお
けば、頭上を飛行機が飛んでも遠
雷のような感じにしか思えず、授
業には全く差し支えがないことだ
った。授業を何回も中断し、いら
いらしたのが全くそのようので、
同じ場所に建っている教室とはと
ても思えなかった。

日本人は夏でも春でも秋でも、
窓を開け放して自然の風をとり入
れることが伝統的に好きであるか
ら、常に閉めきつているというこ
とはなかったが、夏の冷房、冬の
暖房と、今までは考えられない
生活がこの時から始まったのであ
る。ストーブに入れた薪がうまく
燃えず教室中が煙となり、先生を
いぶり出したといつて生徒が叱ら
れた時代は、いまは遠い昔の物語
となった。

これぞ文化の日

一月三日を中心とする文化週
間は、新校舎完成記念をテーマ
とすることになり、初等学校、中
学校、高等学校が合同で行うこと
となった。それぞれの発表のなか
の一日は卒業生の出演による催し
の日とした。一月三日前後とい
うのは卒業生のみならずともつ
なかなかなか忙しい時期である。
しかし、そんななかでも都合をつ

けて喜んで出演してくれた。出し
物は日本舞踊、清元、琴、そして
ヴァイオリンの演奏であった。

日本舞踊に出演した卒業生は、す
でに稽古場を持ち、お弟子さんを
教えている。そのお弟子さんを引
き連れてのお師匠さん直々の出演
であった。また、清元の演奏をし
てくれた人は、小学校一年から高
校一年まで学園で過ごし、中退し
て祖父の跡を継いだ人である。

非常に優れたものをもっていた青
年であり、当時その世界で若手と
して注目されていた。その三味線
の音に、初等学校の子供たちもし
んとして聞き入っていた。

琴の奏者は高校時代は身体が弱
く、やつと卒業をしたという人で
あったが、卒業後の入院生活の後、
不思議と丈夫になり、琴の世界で
活躍をしていた人だった。

今、その人は日本だけでなく、ま
さに琴をかついで世界中を演奏し
て回っている。

ヴァイオリンの演奏をしてくれ
たのは、音楽をもって伝道をと、
学校に在学していた時から母親と
ともに考えていた人であった。ま
だ若い卒業生だが、江藤俊哉氏の
教えを受けたその演奏は確かなも
のであった。在学当時にも、たま
たま来校されたビクスラー先生の
友人の前で演奏をした時、アメリ

カ留学の意思があればぜひ労をと
りたいという申し出のあったほど
の人だった。これらの卒業生の姿
を目の当たりにみて、後輩たちは
大いに刺激を受け、発奮したこと
だろう。

その時に、今度機会があれば、
琴とフルートとヴァイオリンで
「春の海」の合奏を卒業生で、や
りたいと話し合ったが、それはま
だ実現していない。

ビクスラー先生さようなら

昭和四三―四五年

可愛らしい仲間

長い間の念願だった幼稚園がと
うとうとできた。啓明学園に新しく
小さい仲間が増えた。ケヤ、カエ
デ、エノキなどの木々に囲まれ、
外国の童話にでも出てきそうな可
愛らしい建物の中に元気な幼児た
ちの声が響くようになった。

さしあたり二年保育ということ
であったが、小学校、中学校、高
等学校と啓明で学べば、通算一四
年間の生活ということになるわけ
だ。事実この後、高等学校の卒業
式に何人も保護者から「一四年
間お世話になりました……」とい
う挨拶を受けるようになる。初等
学校、中学校、高等学校と合同で
行う運動会にも、この年からは常

に啓明学園の幼稚園児の演技が参
会者の心を和ませてくれるように
なった。

啓明学園の幼稚園には、いわゆ
る遊具というものはあまりないが
木々に囲まれた広い運動場では園
児たちが思い切り走り回ることが
できる。後には、そのひとすみに
可愛らしいプールが造られ、夏に
は水しぶきの音と園児たちの声が
響くようになった。玄関わきのフ
ェンスに沿って植えられたカイド
ウは桜の後に赤い花をつけ、初夏
が近づくと頃、アメリカカ花ミズキの
白い花が太陽に向かって開く。そ
の花の蜜や、木々の実を目当てに
集まる小鳥たち。まことに今の時
代からみればぜいたくといわれる
環境かもしれなかった。

日本に深い愛の足跡を

残して

寮舎も新しくでき、防音校舎も
保護者に大きな負担をかけること
もなく完成した。そして念願の幼
稚園も開園した。

ビクスラー先生は、教会、社会福
祉など奉仕事業、また、教育関連
のいろいろの用件を抱えてアメリ
カへ発たれた。それは、昭和四
三年七月五日のことであった。
そして、これがO・Dビクスラー
先生と私たちの、この地上におけ

る永遠の別れとなった。
九月、先生は母国アメリカで七三
年の天寿を全うされたのである。

啓明では、この年の一月三日、
盛大な学園葬が、学校の聖書講義
室で行われた。ビクスラー先生を
知る旧職員、卒業生が続々と集ま
り、当時、立川近辺では、花屋さ
んがこれだけの生花を扱うことは
一生に一度あるかないかというく
らいの生花につつまれた葬儀であ
った。その花の中に微笑んだ

「信仰の働き人」の顔があった。
その前列の机上花の中に一〇月一
日付で日本政府より贈られた勲四
等旭日小綬章があった。

半世紀にわたる日本の教育に対す47
る大きな貢献を讃えたものであつ
た。日本の地から召天したいと望
んでやまなかったビクスラー先生
地上にもてるすべてのものを捧げ
尽くしてキリストとともにあり、
全身全霊で教育に打ち込み、日

本と日本人を深く愛した先生であ
った。O・Dビクスラー先生の逝
去後も、筆者が啓明学園を去る一
九八六年までの一八年間、キリス
トの教えを根幹においた教育は学
園のなかに生き続けたのである。

一人ひとりを生かす教育の大動脈
として働いていたのである。

一九一九年一月、横浜港に着い
た二四歳の一米国青年は、その後

四九年間神の愛を説き続け、心から日本と日本人を愛して、そのために奉仕した。戦前の山村における伝道、敗戦後の廢墟のなかで飢餓に苦しむ人、ことに子供たちのために、たくさんの牛とヤギをアメリカから引き連れて来た。戦争のため、一人ぼっちになった子供たちのための施設をつくり、その後援をし、貧しく住む所もなく戸籍もない親と子供のための交楽学園の設立と運営、そして茨城キリスト教学園の創立。三井先生より依頼されての啓明学園（啓明クリスチャンアカデミー）の経営、来日以来の先生の足跡は奉仕の心で貫かれたものであった。

教会の活動においては、どんな人に対しても大きく手を広げて迎え入れた先生であったが、学校は教育機関であるとはつきりしたラインを引いておられた。

「啓明学園は、教育機関ですよ。福祉施設ではありません」とよくいわれたものだ。O・Dビクスラーが、啓明学園を運営された時代は、今とは違うが、いろいろな問題が吹き出し、また日本の国内も揺さぶられた時代であった。

こうしたなかで、小学生から高校生までの寮を持つ学園は、うっかりすると福祉施設のように利用されるおそれがあった。ことに、

当時は急上昇を続ける離婚問題と、その家庭の子供たちの入学（寮依頼は多かった。なかには福祉施設だと思つて来た人もあった。ビクスラー先生は「啓明学園はブ

ロックンホームの後始末をする学校ではない」といわれた。従つて、学校では受け入れる時に、大変に慎重であった。しかし、受け入れたからには多くの先生は協力をし

てその教育に当たつたものだった。この時代に中学や高校で学んだ卒業生は、「僕たちが在学した時代

啓明には教育の、『教（きょう）』もあつたが、『育（いく）』があつた。すばらしい育があつた」という人が多かつた。確かに、O・Dビクスラーを理事長として、校長以下、神の義と神の愛を基本に

おいた「人間の教育」があつたのだ。

「微笑みをたたえて…」を遺して

O・Dビクスラー逝去後の一年、学校の教育は順調に行われていた。しかし、先生の死の翌年の秋には、ミセス・ビクスラーが病のため、別れがたい日本に心を残しながら米国に帰られた。

そして、明けた昭和四五年一月も間もない頃、アメリカからミセス・ビクスラー逝去の悲しい報が海を

越えてもたらされた。五十歳を超えて来日され、O・Dビクスラーの協力者として伝道を助け、ことに啓明学園の校舎を始め他の施設の修理のため、アメリカ軍基地内のアメリカンスクールの講師となり、その収入をすべて捧げられた。「啓明ビューティフル」を口ぐせのように、いつもいつておられた。さらに、小さなゴミでも見逃さず

に拾つておられた姿は忘れられない。また、常に唇の両端を両手の人差し指で上の方へ押し、人々の顔を眺めておどけてみせておられた。これは、常に「微笑みをたたえて」という意味であつた。

啓明学園が一番経営の難しい時期にあつては、別荘を手離し、牛を飼つて牛乳を生産し、自ら基地や病院に配達もした。

また、PTAの人々の協力を得て基地でバザーを開くなど、あらゆる工夫をこらして、なんとかこの学園の維持に努め、しかも日本の教育のなかに一番足りないといわれる、「神の言葉」に基礎をおいた生活を学校のなかにしっかりと

根づかせた功績は大きい。今、その二人の信仰者は相次いで天に召されたのであつた。

一方、ミセス・ビクスラーの訃報とほとんど時を同じくして、菅野校長が入院された。校長先生は、

いつも身近にあつて、いつでも頼ることができると思つていただけに、われわれには大変なショックであつた。しかも、大切な入学試験（中・高）を控えている時であつた。しかもこの年は、全国の高等学校の卒業式で、生徒の造反行動が目立ち、卒業式には警察も特別に警戒をする体制をとつたほどであつた。

幸いにして啓明学園ではそんな心配はしなすんだが、警察からは、校門の外のお店で待機して

いたので、という過剰反応の知らせもあつた。しかし、一致協力して何とかこの難局を乗り切ることができたのはまことに幸いであつた。

本格化する帰国子女教育

昭和四六〜五一年

海外勤務者子女教育研究

協力校指定の会議に参加

啓明学園設立者である三井高維先生が、昭和四五年の六月から理事長に就任された。

この年の四月から学校の運営組織、諸制度を変更した。従来は授業五日制であつたのが、日曜日を休日として月曜日から土曜日までの授業に変更した。

また、礼拝については初等学校は従来どおりであつたが、中学、高等学校は昼休みに行い、参加も自由とした。この礼拝のあり方による影響は、生徒の学校生活に対する指導の面にたちまち表れた。それは、今まで、指導の根本にあつた大黒柱がなくなつたのだから無理もないことであつた。それだけに、今までになく生活指導面で困難をきわめたのである。

この一年の状況をみた理事長は、すかさず「自分は間違つていた」と反省され、次年度の昭和四七年四月から、礼拝については従来どおりに戻され、クリスチャンスクールであることを再確認したのである。

昭和四六（一九七二）年という年は、ちょうど戦後の高度成長期の始まりの頃から、海外へ出て行った日本企業の海外勤務の人々が、帰国をして来る頃であつた。

そこで帰国してきた子供の教育の問題が一度に吹き出してきた。そこで、その対応のために、海外子女教育振興財団の設立とともに、文部省が指導を始めたのであつた。文化庁が直接の担当であつた。海外で生活してきた子供を、いかに日本の教育に適応させるか、という

ことが大きな課題となつた。逆に、海外で育つた子供の長所、

特徴を日本の教育のなかで生かそうということに気がつくまでに、その後十余年もかかったのである。

啓明学園は、外国人も受け入れ昭和三五（一九六〇）年頃から、ぼつりぼつりと帰国する子供を受け入れていた。文部省に「海外勤務者子女教育研究協力校指定」という制度ができたことを知り、その仲間に当学園も入ることを考えた。そこでこの年の秋、文部省で会合があるというので見学の意味で、出席させてもらうことにした。

三井高維理事長、菅野校長、筆者との三名で出かけた。場所は文部省のあまり広くない部屋に、海外子女教育振興財団関係者、すでに文部省からの指定を受けている国公立小学校、中学校、私立学校などの関係者、それに文部省の係官という構成であったが、われわれ三名を加えても二十名に満たないささやかな会であった。

しかし、集まった学校関係者や財団の人々は、海外で生活をしてきた子供のために、帰国後、日本語で学べる学校の設立や、帰国後の教育についていろいろと熱っぽく話し合っていた。もちろん、啓明学園が昭和一五（一九四〇）年にこの教育を始め、この年まで続けて海外勤務者の子弟教育や外国人（米国、中国、台湾、韓国）の

教育に当たっているなどということを知っている人はなかった。

はつきりした記憶はないが、もし、その場に先頃故人になられた生江先生（桐朋女子）が出席しておられたならば、啓明のことを知っていたのは先生一人ということになる。

この話し合いのなかで今もはつきり憶えているのは、ある方の話のなかに、「日本人学校を世界につくるのは大切である。今までは海外へ出れば、ことに先進国へ出た場合、その地の学校へ入れることを当然と考え、喜ぶのは、日本人が今だに白人崇拜の気持ちをもっていることの証拠である……」という言葉があり、私は驚いたものだった。

難しい帰国子女教育の方法

昭和四七（一九七二）年に、当学園は、初等学校、中学校、高等学校に国際学級を付設し、帰国してくる子供たち、および外国人子弟を受け入れることを正式に始めた。そして、一月には、かねて申請を出していた海外勤務者子女教育研究協力校の指定を受けた。この時点で、啓明学園の帰国子女教育は第二期に入ったといつてよい。その最初は、父親が出征直前に病没した米軍人の遺児と、南ベトナム

の政治家の遺児二人という組み合わせとなった。第二期の帰国子女教育では、その教育の方法としては、その当時は他に類をみないものだった。当時、国立、公立、私立の帰国子女教育をする学校の教育の方法として行われていたのは、一般のクラスへ混入して行うものと、帰国子女だけをもってクラスを編成して学習を行うものとの二つの方法がとられていた。それぞれによいところもあるが、また欠点もあった。

一般クラスへの混入は、日本の学校生活には早く慣れるという点ではよいが、学習の能率は芳しくはなかった。つまり、分からない授業の時間にも出ていなければならぬからである。特別クラス編成のほうは、学習の能率を考えると、えでは非常によい。しかし、学校生活を通していろいろと日本独特の生活を覚えるという点では難しい。そのため、いろいろと工夫をして、クラブ活動は一般クラスと混ぜたりもしてみた。また、混入式のほうも、放課後の補習などを行ったりもした。

啓明学園は、結果として、どういふ方法をとったかという点、混入式と特別クラス方式との、それぞれの長所を合わせた方法をとった。つまり、ホームルームも含め

図表一五 啓明学園帰国子女教育の方式（昭和47年以後）



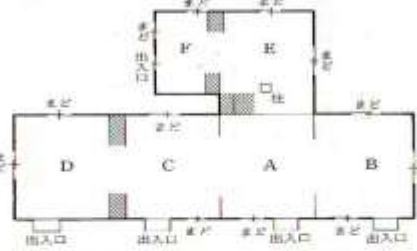
て学校生活はすべて一般クラスに混入して生活させる。そして、学習については、その子供の日本語の程度に応じて、必要な教科は国際学級の特別授業で行うというものであった。また、外国語については、英語だけでなく、その子供が生活していたところで身につけた外国語を特別クラスで学習できるようにした。従って、日本語の向上とともに日本の学習のほうは一般クラスのほうへ編入して行

もう一つの特徴は、編入学年の問題であった。これは三井高維理事長の強い希望で、日本の学齢相当の学年に編入を受け入れたことであった。これは帰って来る保護者には大変な安心感を与えたのだが、現場の教師には実に大きな努力を強いられるものであった。自分の専門とする教科を研究し、何を基本とするかを探り出し、またそれをどう教えていくかという教授法の研究工夫が、成果を上げるうえには不可欠であったからだ。

高度な授業を受けることができ（図表5の啓明学園帰国子女教育の方式を参照）。

図表一六 啓明学園国際学級教室（プレハブ）

最初は、A、B、Cの3室であった。次にEを増設し、続いてFを増設したが、なお不足であったのでDを増設した。



1. 教室は建築上の強度の許すかぎり区切ることをさけ、ドアも全部あけている。
2. この教室では一般学級の時間割により、最少10名から最多70名くらいがそれぞれの力に応じた授業を受けた。
3. Aの室には、コピー、印刷機、テレビ、VTR、その他資料収納の戸棚、生徒個人の学習用引き出しなどが設置してある。
4. A、C、Dの3室は主として国語、社会の授業が行われ、授業に必要な図書、参考書、辞書などが備えられている。なお、Dは初等学校の児童が主として使用している。
5. Bは理数系の教室で、理数系の教材が集められている。
6. E、Fは外国語の教室である。
7. 増設のため教室と教室をつなぐ空間（斜線の部分）も書棚その他の教材関係の収納用に用いている。
8. 主として国際学級の授業を担当する教員は、各教科の教室につねにいて、授業にくる生徒の指導にあたっている。

学習の形は、児童・生徒が自分で学習していく方法である。児童・生徒の現在の日本語力を細かく調べ、それに従って各教科それぞれに、その個人に対する学習の進め方（メニューと称していた）がつけられる。児童・生徒は自分のメニューに従って、教室に備えられた辞書、参考書、図鑑などあらゆるものを用いて学習する。そして、疑問の点は教師に質問して確かめる。そして、一定の学習をした後にテストを受け、合格すれば先へ進むというものであった。

昭和四八（一九七三）年には啓明学園の幼稚園も防音校舎になった。ピンク色の可愛らしい園舎はコンクリートの防音校舎となった。また、とりあえず校舎内の会議室を使用していた国際学級の特別授業を行う教室が、防音校舎向かい側にプレハブながら三教室でできた。この教室も普通の教室とは違い、三教室が全部通しになっていた。つまり、教師はどこにいても、全部の児童・生徒の状況が見通せるようになっていたのである。しかし、各自はそれぞれ自分の学習に余念がないから、邪魔になる

話し声などはなかった（図表6の啓明学園国際学級教室を参照）。

ちょうど、この年の四月からは急速に帰国子女の在籍が増加した。一般教室の向かい側に芝生の庭をはさんで建てられた国際学級の教室へは、自分の国語力、外国語力により作られた自分の時間表に従い、一般教室と特別教室の間を時間ごとに往き来する帰国子女たちの姿が賑やかであった。

小さい初等学校の子供から高校生まで、それぞれの学習のための道具を抱えて、話をしながらも急いで次の授業に遅れないように移動をしていた。見慣れた者には、ごく普通の日常的風景であったが、来訪者には珍しいものであったらしい。

昭和四九年の三月、帰国子女教育研究協議会の中学校部会が、本学園において開催された。

ここで本学園の帰国子女教育の授業の公開授業を行い、個別指導の実際を参集の諸氏に参観していただいた。

土曜日であったため、本校は休みであり、公開授業に出る生徒だけに登校をしてもらって行われた。

そのためことに静かで、協議会に集中できたことは幸いであった。中学校部会とはいいながら、文部省関係、指導の講師、参加の

先生方、合わせても五十名に満たなかった。まだまだ戦後の帰国子女教育は始まったばかりの頃であった。本学園の教諭が海外の日本語補習校や、全日制日本人学校へ派遣されることが相次いだ。

教員数もそう多くない小規模の学校としては、経験年数が長いベテランの先生方を送り出すのはなかなか問題も多かったが、国際的な視野をもち、常に海外の姿をみつめていた理事長の意に沿うように先生方も大いに努力をしたのであった。昭和五〇（一九七五）年には体育館が完成し、長い間雨の降る日は体育の授業に困っていたが、この年で解消した。

昭和五一年、本学園各学校の帰国子女受け入れについて、その教育の方法のユニークな型が多方面の関心呼び、特に高等学校への編入希望者が増した。当時は編入に際しては学年、学期の区切りの時に受け入れるところが多く、帰国したからといってすぐに編入できることは少なかった。

しかし、本学園は初・中・高ともに随時編入であった。従って、帰国すればすぐに次の日からでも一応のテストをして、よほどのことのないかぎり編入を受け入れたので、ことに大学進学を控えて一刻でも早く日本の学校での学習を望

む高等学校の生徒とその保護者にとつては大変に喜ばれたのであった。帰国してくる児童・生徒は、四月、六月、九月、一月に集中するようになった。

帰国子女の編入が増加するに従って、さまざまな問題が出てくるので、全職員の研究と協力を望むために、常時打ち合わせの会を開き、また、夏の休み中に行われる学内の研修会には、特別な研究会をもつたりして、学校全体での教育を進めるように努力したのである。

三井先生の死と国際人養成教育 昭和五一年一六〇年

国際学級の増設から 交換留学へ

昭和五二年、帰国子女教育のなかで特にクローズアップされてきたのが、高等学校の受け入れであった。社会の要請の強まりに、文部省もその対策として、帰国子女を受け入れることを目的とした高等学校の設立に踏み切ることにした。まず次年度、五三年四月の開校を目指して、この年の三月から国際基督教大学に高等学校が設立されるための準備委員会が置かれた。これを手始めとして、同志社国際高校、暁星国際高校が受け

入りを主たる目的とした高校として設立されていった。それと同時に、公立、私立の高等学校のなかに、この教育を手掛ける学校が数を増やしていった。

公立の小学校、中学校では協力を中心にして地域にセンター校ができ、一応の体制としては、どこへ帰ってきても困ることのない形ができたといえる。

制度として整えられても、それで問題がなくなつたわけではない。外国の学校に在学していたために日本語に弱点のあるもの、外国の

学校と日本の学校の履修教科の違い等々、実際の教育の面では難問は山積していたのである。特に高等学校の場合は、単位の認定ということがあった。高等学校には、

三年間に八五単位（昭和五七年度施行の教育課程より八〇単位）の修得が最低単位数として決められている。これも長い間海外で生活してきた生徒にとっては容易なことではなかった。海外で履修したものをどう認定するかが大きな問題として浮かび上がってくるのであった。

この頃には、本学園高等学校の帰国子女の大学進学についての実績が認められ、編入希望者が増加した。帰国を控えて、あらかじめ手紙や国際電話で希望を伝えてく

るという者も出てきた。

少人数制を教育の基に置いている本学園としては、クラスの人数を二〇名から二四名としているため、教室も普通の学校に比べて小規模である。そのために帰国子女

の編入が増し、しかも併設の初等学校、中学校からの進学希望がほとんど一〇〇パーセントということになると、学校の施設が追いつかないという状況になってきた。

ここに、新しい校舎の必要性が切実なものとなったのである。

また、オーストラリアの男子校克蘭ブルックスクールとの短期交換留学生の制度をつくり、互いの学校の夏期休暇を利用しての生徒の交換留学が行われた。

この年の七月より一カ月間、男子二名がオーストラリアに派遣され十二月から一月にかけては、オーストラリアからの生徒が本学園に滞在したのである。

かねて海外との交流を考えて、三井高維理事長が奔走してニューヨークに本部をもつ「啓明学園国際教育基金」が設立されたが、これに対し、この年の九月、米国公

益法人とする旨の認可がおりた。以後、アメリカから先生や高校生が、この援助で本学園に在学、また勤務されることになる。また、この法人の奨学資金を得て

アメリカの大学へいったのは、帰国子女の男子でM・I・T（マサチューセッツ工科大学）に入学を許された生徒であった。

三井高維理事長の逝去

昭和五四年、国際的に活躍する人材の育成のためにと東奔西走された三井高維理事長が、七月半ば、軽井沢で心臓発作に見舞われ、虎ノ門病院で入院加療にあたられていたが、七月二九日早朝逝去された。夏の行事が開始されようとしていた矢先であった。

理事長の遺志により、バイブルキヤンプやオーストラリアへの留学生の派遣は滞りなく行われた。

新学期の九月三日には学園葬が行われた。先生は、早くから世界を歩き、本当に世界に通用する人材を育てたいとの理想をもつて学校を興し、キリストの教えを基にし、国際的なスケールをもつ日本人を育成しようと熱心に努められた。卒業式、入学式、また、各学期ごとの始業式、終業式の場合常に児童・生徒に熱く語りかけられた姿はいつまでも若々しくわれわれの目に映った。

かつて、創立三五周年を祝った時「創立五十周年の時には、われわれ職員は誰もいなくて先生だけが健在ではないか」などといつて

互いに笑い合ったものだった。

いつもお話の終わりには、アツシジの聖者といわれた、聖フランチェスコの言葉をもって結ばれるのが常であった。

それは、一人の人間として、楽しい時も、悲しい時も、苦しい時も、すべて神の前にぬかづき感謝を捧げるといふ謙虚な思いに満ちた詩である。日本の財閥の本家の次男という位置に生を受けた人であったが、若い頃から外国を巡り、多くの友人をもち、名利を好まず、教育という地味な仕事に一生を捧げた先生、その先生の到達された境地にもっとも似つかわしい詩だったのではなかったらうか。

啓明学園の創立当時にはとても想像もできなかった大国にのし上がった日本は、世界中からいろいろの面で注目を浴びている。そして、その責任ある人々の一言一句は直ちに大きな波紋を広げることになる。そういう今、故三井高維先生が抱き、その実現に一生を尽くされた理想の大きさを、あらためてはつきりと見る思いがする。

その年の十一月には、故三井先生の置き土産である、オーストラリアの留学生に女子が加わるようになった。

メルボルのセント・キャサリン高校からであった。

菅野校長の退任と時代の流れ

昭和五五（一九八〇）年には、

児童・生徒の数が増加し、長い間続いてきた初等学校、中学校、高等学校合同の卒業式を打ち切らざるを得なかった。つまり、初等学校一年から三年までは参列しないという処置をとった。

中学校と高等学校は、各学年二クラスとなった。

啓明学園としては大変な変化であった。職員の数も増してきたので、今までは、特に組織立ったものをもつていなかった国際学級への編入希望者に対するテストなどの手順の方法、合格・不合格の決定は51どこで行うかなど、きつちりとした組織をつくり上げることにした。ちようどこの年度は創立四〇

年を迎えたわけである。その記念式が一〇月に行われた。翌年には、外務省関係、海外子女相談員協議会、ロータリークラブ国際委員会などから帰国子女教育の実際を見学に来校されることが多くなってきた。

また、この年、ニューヨーク、ボストン、ワシントン、ロサンゼルスに三井英子理事長を先頭に教諭が同行し、学園の帰国子女受け入れの実際、海外の生活における子供の教育に対する対応などにつ

き説明してきた。

昭和五七（一九八二）年には、
帰国子女教育研究校としての指定を受けてから十年がたち、その実績が認められ、一年以上先までの予約希望も相談されるようになった。そこで、学校全体の種々の組織をしっかりとし、必要なものを約束ごとで行うのではなく、改めて明文化し、整備することとなった。翌年には、前年から開始した明文化の作業のなかでも、最大の作業で、当学園帰国子女教育が個別指導によっているので、その学習の評価を、日本で行われている学習評価と調和を保ち、問題の生じないようにするためにはどうしたらよいかを検討した。

昭和一五年以来の経験のうえに立って、あらゆることを慎重に考えて、六月に「国際学級評定および公簿記入等に関する留意事項」を決め、評価の指針とすることになった。これは指導要領などの改訂等により改訂を加えている。

昭和六〇年の九月に菅野校長が退任し、名誉校長となる。昭和一五年の創立以来、創立者故三井高維先生の理想をよく理解し、その理想を実際の教育活動にどのよう

であった。

帰国子女教育にしても、非常にユニークで、しかもその教育法にしても理論だけでなく、その体得者が抜けるということは大きなことであった。きわめて特徴のあった学校教育も新しい時代に向かつて変化してきているのである。

あ と が き

今から十年も前のことになるが、私が、まだ「啓明学園」の教師をしているころ、国語科を担当している同僚から、「啓明学園の歴史」をまとめてみてはどうかと、しきりに勧められていた。そればかりか、そのうちに、いよいよ高じて、私の名前入りの原稿用紙までも用意してきたのである。

私には、書きたいという多少の気持ちではあったが、それ以上に、多忙な日常のなかにあり、全くゆとりのない生活を強いられていた時であったので、なかなかその決心がでないでいたのであった。

ところが、こんどは「啓明学園」を退職する段になると、いよいよ多方面からやかましく責め立てられるようになってきた。ちょうどそんな時に、ある出版社から、「帰国子女教育の貴重な記録

を、ぜひ一冊にまとめてください」というお話があった。正直その時には、私の気持ちは揺れ動いた。そして重い腰をあげて、それでは書いてみようという決心がついたのだった。

平安時代に『更級日記』の作者は、自分の少女時代からの四〇年間を回想して作品にまとめ

たという。啓明学園の歴史となると四五年間を遡らねばならない。

私はまず、古い記録をひっくり返し年表を作ることから始めた。といっても、この作業が大変で、実に二年余を要した。さらに、内容についてであるが、私はまず、一九四〇（昭和一五）年には他に例のなかった「帰国子女教育の実態」を組織立てて書くことから始めた。しかし、創立から敗戦までの間の記録は赤坂校舎とともに焼失してなにもなく、ただただ私自身の記憶に頼るしかなかった。

そこで私は、同窓会名簿の、さらに写しの断片をひっくり返し、ひっくり返して名前をながめることをした。こうしていると、不思議なものである。記憶が記憶を呼び、忘れかけていた昔の顔、景色、時代をその底から今にたぐり寄せることができたのである。こうして、あせらずゆっくりと糸をたぐりながら、筆を進めて、さら

に五年が過ぎた。

この作業の過程で、私の啓明学園での四五年が、その長さを感じさせないほど鮮明によみがえってきた。そして、その日々がいかに充実したものであったかをも発見することができたのである。そんな意味で、この一冊は、小さな一私立学校がいかに激動のなかを生き抜いてきたかの足跡であり、その一区切りを示す記念碑であるといえる。

本書はここに、神のお許しを得、そのお恵みにより完成をみた。心から感謝をし、大きな喜びを表したい。最後になりましたが、出版するにあたり、多くの方々のお力添えをいただいた。また、専門的なアドバイスをいただいた御園書房の山下勝利氏にも心から感謝を捧げたい。

一九九二年一月一日

ほんまやすこ 本間平安子

大正8年(1919)東京都に生まれる。

昭和15年(1940)東京女子大学国語専攻部卒業。

〃 啓明学園小学校に教諭として勤務。

その後は、中学校・高等学校の教諭も務める。

昭和30年(1955)学校法人啓明学園評議員となる。

昭和46年(1971)中学校教諭・教頭に就任する。

昭和61年(1986)啓明学園を退職する。

この間、文部省教育課程審議会国語科委員、帰国子女進路実態調査委員会委員や教科書出版社の小学校国語教科書編集委員などの委嘱を受ける。また国際基督教大学高等学校設立専門委員会委員、同志社国際高等学校設立懇談会委員を歴任する。

平成25年(2013)8月21日逝去されました。

賞 罰

日本私立中学・高等学校連合会、東京都知事、文部大臣より学校教育の振興・発展に尽力との理由により教育功労者の表彰を受ける。

国際ソロプチミストより、婦人栄誉賞を受ける。

.....
学舎はのびのびと楽しく
帰国子女教育の50年
.....

この本は平成4年10月30日に 著者／本間平安子 発行所／有限会社御園書房
発刊者／山下勝利 から出版された本を本間平安子の著作権管理者0000と上記発行
所・発行者の許可を得て啓明学園同窓会が2018年4月に再編集して配布たものを同
窓会ホームページに掲載しました。

発行 啓明学園同窓会

〒196-0002 東京都昭島市拝島町5-11-15

TEL042(541)1003 FAX042(542)5441